

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第32集

関越自動車道関係

埋蔵文化財発掘調査報告

— XVIII —

屋田・寺ノ台

1 9 8 4

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県内における関越自動車道は、県内南部から北部へかけての丘陵及び平野部約71kmを縦貫し、すでに昭和55年から供用が開始されております。

この関越自動車道の建設に伴い、埼玉県教育委員会は、事前に路線内の遺跡分布調査を実施し、日本道路公団と慎重に協議を重ねた結果、屋田・寺ノ台遺跡は、発掘調査によって記録保存を行うことになりました。

発掘調査から報告書の刊行に至るまで埋蔵文化財保護に対する深い御理解をいただいた日本道路公団、並びに種々の御協力をいただいた嵐山町教育委員会、滑川村教育委員会、地元各位に深く感謝いたします。

本書の刊行が、御助力をいただいた方々にその責を果たすとともに、広く教育・学術研究・文化財保護行政の資料として活用されるよう希望いたします。

昭和59年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 長 井 五 郎

例 言

- 1 本書は関越自動車道にかかる、比企郡嵐山町及び滑川村に所在する屋田遺跡（53委保記第17の993号）、寺ノ台遺跡（53委保記第17の1180号）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は日本道路公団の委託により、埼玉県教育委員会が主体となり実施したものである。整理、報告書作成作業は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が昭和58年度に受託し、実施した。

なお、調査の組織は4ページに示したとおりである。

- 3 出土品の整理および図の作成は今井 宏、井上尚明、立石盛詞、酒井和子が主に担当し、近江かおるの補助を受けた。
- 4 発掘調査における写真は増田逸朗、今井が、遺物写真は今井が撮影した。
- 5 本書の執筆は、今井 宏、井上尚明、立石盛詞、酒井和子があたり、分担は以下の通りである。

横川 I-1

今井 I-2、II、III-1、III-2-(1)、III-2-(3)、III-2-(4)、III-2-(5) (遺構)、
IV-1、IV-2-(1) (遺構)、IV-1・2

井上 III-2-(2)、IV-3

立石 III-2-(4) (遺物)、IV-4

酒井 III-2-(4)b (遺物)

III-2-(5) (遺物)

IV-2-(1)a (遺物)

IV-2-(2)

- 6 出土遺物、粘土の理化学的分析については、井上 巖氏にお願いした。
- 7 本書の編集は、埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査研究第四課職員があたり、横川好富が監修した。

凡 例

1 本書に掲載した挿図類の縮尺は原則として次の通りである。

遺構 住居跡 (1/60)、古墳 (1/150)

遺物 土器実測図 (1/4)、土器拓影図 (1/3)

埴輪実測図 (1/4、1/5)、石器実測図 (1/3)

2 遺構図版中、焼土は  のスクリーントーンで示した。

3 赤彩された遺物は、その範囲を  のスクリーントーンで示した。

4 復元実測を行った土器は、中心線を一・一の一点鎖線で示した。

5 土器実測図中遺物輪郭線からはみ出す「一」は横ナデの範囲を示す。

6 土器実測図中の矢印は、工具の動いた方向を示す。

7 篋削りは実線で、篋削りの後ナデないし横ナデは破線で示した。

8 土器観察表中、法量は推定値を () で示し、内面の色調は () で括った。

9 土器観察表中、胎土は次の記号で示した。なお、胎土分析資料については分析結果をそのまま示した。

A：石英 C：角閃石 E：酸化鉄 G：白色針状物質

B：長石 D：軽石 F：雲母類

目 次

序

例 言

I	調査の概要	1	
1	調査に至るまでの経過	1	
2	調査の経過（日誌抄）	5	
II	遺跡の立地と環境	7	
III	屋田遺跡	9	
1	遺跡の概観	9	
2	遺構と出土遺物	10	
(1)	縄文時代の遺構と出土遺物	10	
	a 集石		
	b グリッド出土縄文土器		
	c グリッド出土石器		
(2)	縄文時代晩期終末の土器	21	
(3)	弥生時代の遺構と出土遺物	25	
	第14号住居跡	第15号住居跡	
	第21号住居跡	第22号住居跡	
(4)	古墳時代の遺構と出土遺物	34	
a	住居跡	34	
	第1号住居跡	第2号住居跡	第3号住居跡
	第4号住居跡	第5号住居跡	第6号住居跡
	第7号住居跡	第8号住居跡	第9号住居跡
	第10号住居跡	第11号住居跡	第12号住居跡
	第13号住居跡	第16号住居跡	第17号住居跡

	第18号住居跡	第19号住居跡	第20号住居跡	
b	古墳			78
	第1号墳	第2号墳	第3号墳	
	第4号墳	第5号墳	第6号墳	
	第7号墳	第8号墳	第9号墳	
(5)	近世の遺構と出土遺物			162
a	土 塼	b 溝	c 塚	
d	社 跡	e 屋敷跡	f 樽埋設遺構	
g	炭 窯			
IV	寺ノ台遺跡			175
1	遺跡の概観			175
2	遺構と出土遺物			177
(1)	古墳時代の遺構と出土遺物			177
a	住居跡			177
	第1号住居跡	第2号住居跡	第3号住居跡	
b	古墳			192
	第1号墳			
(2)	近世の遺構と出土遺物			192
	第1号塚	第2号塚		
V	屋田遺跡出土遺物胎土分析			196
VI	結 語			205
1	吉ヶ谷期の遺構と遺物について			205
2	円筒埴輪棺および壺棺の接合関係について			206
3	縄文時代晩期終末の問題について			210
4	住居跡および古墳出土の土器について			214

挿 図 目 次

第1図	周辺の遺跡分布図	6	第35図	第7号住居跡	52
第2図	屋田遺跡標準土層	9	第36図	第8号住居跡	53
第3図	集石	10	第37図	第8号住居跡出土遺物	54
第4図	グリッド出土縄文土器(1)	11	第38図	第9号住居跡	56
第5図	グリッド出土縄文土器(2)	12	第39図	第9号住居跡出土遺物	57
第6図	グリッド出土縄文土器(3)	15	第40図	第10号住居跡	58
第7図	グリッド出土縄文土器(4)	16	第41図	第10号住居跡出土遺物	58
第8図	グリッド出土縄文土器(5)	17	第42図	第11号住居跡	60
第9図	グリッド出土縄文土器(6)	18	第43図	第11号住居跡出土遺物	61
第10図	グリッド出土石器	20	第44図	第12号住居跡	62
第11図	グリッド出土縄文土器(7)	22	第45図	第12号住居跡出土遺物	63
第12図	グリッド出土縄文土器(8)	23	第46図	第13号住居跡	64
第13図	第14号住居跡	25	第47図	第13号住居跡出土遺物	65
第14図	第14号住居跡出土遺物	26	第48図	第16号住居跡	66
第15図	第15号住居跡(1)	27	第49図	第16号住居跡出土遺物	67
第16図	第15号住居跡(2)	28	第50図	第17号住居跡	68
第17図	第15号住居跡出土遺物	29	第51図	第17号住居跡出土遺物	69
第18図	第21号住居跡	31	第52図	第18号住居跡	72
第19図	第21号住居跡出土遺物	32	第53図	第18号住居跡出土遺物	72
第20図	第22号住居跡	33	第54図	第19号住居跡	73
第21図	第1号住居跡	34	第55図	第19号住居跡出土遺物	74
第22図	第1号住居跡出土遺物	35	第56図	第20号住居跡(1)	75
第23図	第2号住居跡	36	第57図	第20号住居跡(2)	76
第24図	第2号住居跡出土遺物(1)	38	第58図	第20号住居跡出土遺物	76
第25図	第2号住居跡出土遺物(2)	39	第59図	第1号墳現況図	78
第26図	第3号住居跡	40	第60図	第1号墳全体図	79
第27図	第3号住居跡出土遺物	41	第61図	第1号墳出土遺物(1)	81
第28図	第4号住居跡	42	第62図	第1号墳出土遺物(2)	82
第29図	第4号住居跡出土遺物	43	第63図	第1号墳出土遺物(3)	83
第30図	第5号住居跡(1)	44	第64図	第1号墳出土遺物(4)	84
第31図	第5号住居跡(2)	45	第65図	第2号墳出土遺物	89
第32図	第5号住居跡出土遺物	46	第66図	第2号墳	90
第33図	第6号住居跡出土遺物	49	第67図	第3号墳	91
第34図	第6号住居跡	50	第68図	第4号墳	93

第69図	第4号墳主体部	94	第104図	第7号墳周溝土層断面図	147
第70図	第4号墳出土遺物(1)	95	第105図	第7号墳出土遺物	147
第71図	第4号墳出土遺物(2)	96	第106図	第7号墳円筒埴輪棺出土状況図	149
第72図	第4号墳出土遺物(3)	99	第107図	第7号墳円筒埴輪棺(1)	150
第73図	第5号墳現況図	100	第108図	第7号墳円筒埴輪棺(2)	151
第74図	第5号墳石室(1)	102	第109図	第7号墳壺棺出土状況図	152
第75図	第5号墳石室(2)	103	第110図	第7号墳壺棺(1)	153
第76図	第5号墳周溝外土壌	104	第111図	第7号墳壺棺(2)	154
第77図	第5号墳石室出土遺物	105	第112図	第7号墳周溝8区出土円筒埴輪	155
第78図	第5号墳埴輪棺出土状況図	108	第113図	第8号墳出土遺物	156
第79図	第5号墳出土円筒埴輪(1)	110	第114図	第8号墳	157
第80図	第5号墳出土円筒埴輪(2)	111	第115図	第9号墳	159
第81図	第5号墳出土円筒埴輪(3)	112	第116図	第9号墳出土遺物	160
第82図	第5号墳出土円筒埴輪(4)	113	第117図	土壌	162
第83図	第5号墳出土円筒埴輪(5)	116	第118図	溝	163
第84図	第5号墳出土円筒埴輪(6)	117	第119図	塚	164
第85図	第5号墳出土円筒埴輪(7)	120	第120図	社跡	166
第86図	第5号墳出土円筒埴輪(8)	121	第121図	社跡出土遺物	167
第87図	第5号墳出土円筒埴輪(9)	123	第122図	屋敷跡	168
第88図	第5号墳出土人物埴輪(1)	125	第123図	屋敷跡出土遺物	169
第89図	第5号墳出土人物埴輪(2)	129	第124図	埴埋設遺構	170
第90図	第5号墳出土人物埴輪(3)	131	第125図	埴埋設遺構出土遺物	172
第91図	第5号墳出土人物埴輪(4)	132	第126図	炭窯	173
第92図	第5号墳出土馬形埴輪	133	第127図	寺ノ台遺跡標準土層	175
第93図	第5号墳出土家形埴輪	136	第128図	寺ノ台遺跡全掘図	176
第94図	第5号墳出土家形埴輪	137	第129図	第1号住居跡出土遺物	177
第95図	第5号墳出土盾形埴輪	138	第130図	第1・3号住居跡	178
第96図	第5号墳出土大刀・韆・牙形 埴輪	139	第131図	第2号住居跡	180
第97図	第6号墳	140	第132図	第2号住居跡カマド	181
第98図	第6号墳周溝土層断面図	142	第133図	第2号住居跡出土遺物(1)	182
第99図	第6号墳周溝遺物出土状況図	142	第134図	第2号住居跡出土遺物(2)	183
第100図	第6号墳円筒埴輪棺出土状況図	142	第135図	第2号住居跡出土遺物(3)	187
第101図	第6号墳出土遺物(1)	144	第136図	第2号住居跡出土遺物(4)	189
第102図	第6号墳出土遺物(2)	145	第137図	第3号住居跡出土遺物	190
第103図	第7号墳	146	第138図	第1号塚出土遺物	192
			第139図	第1号墳	193

第140図	第1号塚	194	第146図	QT-PL相関図	203
第141図	第2号塚	195	第147図	分析資料一覧	203
第142図	三角ダイヤグラム位置図	199	第148図	円筒埴輪棺相関図	207
第143図	菱形ダイヤグラム位置図	199	第149図	縄文時代晩期～弥生時代中期 遺跡分布図	211
第144図	Mo-Mi-Hb三角ダイヤグラム	199	付 図	屋田遺跡全体図	
第145図	Mo-Ch・Mi-Hb菱形ダイヤグラム	199			

図 版 目 次

- | | | | |
|-------|---------------------------------------|-------|----------------------------------|
| 図版 1 | 屋田遺跡遠景（北より）
第 1 号住居跡 | 図版 18 | 第 5 号墳石室土玉出土状態
第 5 号墳石室鉄鏝出土状態 |
| 図版 2 | 第 2 号住居跡
第 2 号住居跡遺物出土状態 | 図版 19 | 第 5 号墳埴輪出土状態
第 5 号墳埴輪出土状態 |
| 図版 3 | 第 3 号住居跡勾玉出土状態
第 4 号住居跡 | 図版 20 | 第 5 号墳周溝
第 5 号墳周溝外土埴 |
| 図版 4 | 第 5 号住居跡
第 7・8 号住居跡 | 図版 21 | 第 6 号墳全景
第 6 号墳周溝遺物出土状態 |
| 図版 5 | 第 9 号住居跡
第 11 号住居跡 | 図版 22 | 第 7 号墳全景
第 7 号墳円筒埴輪棺 |
| 図版 6 | 第 12 号住居跡
第 15 号住居跡 | 図版 23 | 第 7 号墳円筒埴輪棺
第 7 号墳壺棺 |
| 図版 7 | 第 15 号住居跡
第 15 号住居跡遺物出土状態 | 図版 24 | 第 7 号墳周溝埴輪出土状態
第 8 号墳全景 |
| 図版 8 | 第 15 号住居跡ピット
第 15 号住居跡炉 | 図版 25 | 第 9 号墳全景
第 9 号墳遺物出土状態 |
| 図版 9 | 第 16・17・18・20 号住居跡
第 16 号住居跡土器出土状態 | 図版 26 | 集石
塚 |
| 図版 10 | 第 17 号住居跡
第 17 号住居跡土器出土状態 | 図版 27 | 社跡
炭窯 |
| 図版 11 | 第 18 号住居跡
第 20 号住居跡 | 図版 28 | 屋敷跡
屋敷跡流し溜 |
| 図版 12 | 第 1 号墳遠景
第 1 号墳遠景 | 図版 29 | 樽埋設遺構
第 3 号土埴 |
| 図版 13 | 第 1 号墳剣出土状態
第 1 号墳周溝外土埴遺物出土状態 | 図版 30 | グリッド出土縄文土器
グリッド出土縄文土器 |
| 図版 14 | 第 4 号墳調査前全景
第 4 号墳全景 | 図版 31 | グリッド出土縄文土器
グリッド出土縄文土器 |
| 図版 15 | 第 3 号墳全景
第 4 号墳全景 | 図版 32 | グリッド出土縄文土器
グリッド出土縄文土器 |
| 図版 16 | 第 5 号墳調査前全景
第 5 号墳調査後全景 | 図版 33 | グリッド出土縄文土器
グリッド出土石器 |
| 図版 17 | 第 5 号墳石室全景
第 5 号墳石室封鎖石 | 図版 34 | グリッド出土縄文土器
グリッド出土縄文土器 |

- 図版35 第14・21号住居跡出土遺物
図版36 第15号住居跡出土遺物
図版37 第2号住居跡出土遺物
図版38 第3・4・9号住居跡出土遺物
図版39 第5号住居跡出土遺物
図版40 第11・12・17・19号住居跡出土遺物
図版41 第16・20号住居跡出土遺物
図版42 第1号墳出土遺物
図版43 第13号住居跡・第1号墳出土遺物
図版44 第4号墳出土遺物
図版45 第5号墳出土円筒埴輪
図版46 第5号墳出土円筒埴輪
図版47 第5号墳出土円筒埴輪
図版48 第5号墳出土人物埴輪
図版49 第5号墳出土人物・馬形埴輪
第5号墳石室出土遺物
図版50 第5号墳出土盾形・家形埴輪
図版51 第6・7・9号墳出土遺物
図版52 第7号墳円筒埴輪棺
図版53 第7号墳壺棺
図版54 寺ノ台遺跡遠景
第2号住居跡
図版55 第1号墳石室全景
第1号墳石室全景(東壁側より)
図版56 第1号塚全景
第2号塚全景
図版57 第2号住居跡出土遺物(1)
図版58 第2号住居跡出土遺物(2)
図版59 第2・3号住居跡出土遺物

I 調査の概要

1 発掘調査に至る経過

関越自動車道新鴻線は、東京都練馬区を起点として、本県の川越市・東松山市・上里町を経て群馬県・新潟県新潟市に至る310kmの高速道路である。すでに、東京川越市間は、昭和46年12月に、また、川越市東松山市間は昭和50年8月に供用が開始されている。埼玉県内のこの供用区間の埋蔵文化財包蔵地の発掘調査は、東京川越市間2遺跡を埼玉県遺跡調査会が、また、川越市東松山市の12遺跡を埼玉県教育委員会が直営で実施し、すでに調査報告書が刊行されているところである。

さて、東松山市から県境の児玉郡上里町に至る、いわゆる東松山以北については、昭和44年4月埼玉県行政推進対策委員会高速自動車道部会幹事会において、5万分の1の地形図に基本計画ルートが示された。この案を、昭和36年度に実施した、埼玉県埋蔵文化財包蔵地分布図と照合すると、20箇所以上の遺跡と、埼玉県指定史跡杉山城跡（嵐山町）と十条条里遺跡（美里村）が含まれていた。

そこで、この基本ルートに対する文化財保護側の意見を次のようにとりまとめ、高速自動車道部会長（企画部長）あてに提出した。

- 1 県指定史跡杉山城跡、県指定史跡十条条里遺跡のルートの変更を検討されたい。
- 2 その他のルート内に所在する埋蔵文化財については、事前調査、発掘調査等により対処可能と思われる。
- 3 出土品が多量にあると予想されるので、資料館・陳列館等の建設による保存について考慮してもらいたい（サービスエリア内でも可）。
- 4 当面事前調査が必要となる関係箇所が多いので、計画的に調査できるよう検討する必要がある。

関越自動車道東松山以北のルートは、丘陵上・丘陵裾部・平野地帯を約36キロメートルにわたって建設されるもので、かなり多くの埋蔵文化財包蔵地が所在するものと予想されたので、昭和45年度、文化庁から国庫補助金の交付を受けて、改めて分布調査を実施した。この調査は、県内の考古学研究者を調査員に委嘱して実施したもので、基本計画ルートの東西約2キロメートルの範囲を対象にした。その結果、244箇所以上の遺跡が確認され、ルートをどのように変更しても、かなりの遺跡が建設用地内に入ることが確実となった。

昭和45年5月、埼玉県行政推進対策委員会高速道路部会幹事会において、建設省関東地方建設局から、5千分の1の図面によるルート説明、さらに、本年6月上旬には、日本道路公団に事業を委託することになっている、との説明があった。一方、この5千分の1のルート図は、県道路建設課にある地図によって各課が検討することにし、重大な支障のある場合は、5月中に、県企画課を通して建設省へ通知することになった。

それから約1年が経過。昭和46年4月、行政推進委員会高速道路部会幹事会において、関越自動車道建設計画にかかる東松山市～上里町間の関連公共事業調査について日本道路公団との打合せ会が行われ、同年8月以降、関係各課による調査が開始された。この年、県教育局内の組織改正が行

われ、社会教育課から文化財係が分離し、文化財保護室が新設され、まだ日本道路公団高速道路建設局と協議の最中であった関越自動車道川越市～東松山市間と並行して、文化財第二係がこの事務に当たった。さて、関連公共事業調査で、文化財保護室が担当した調査は、5万分の1の地形図上にルート案のセンター両側2キロメートル、さらに2千分の1の平面図でセンターの両側100メートルに所在する埋蔵文化財を調べることであった。この調査の結果、5万分の1の地形図を利用したセンター両側2キロメートルでは112箇所の埋蔵文化財が、またセンターの両側100メートルの範囲では、23箇所の埋蔵文化財が含まれていることを確認し、一応この結果を日本道路公団に通知し、埋蔵文化財については、損傷を最少限度にとどめてルートを決定するよう要望した。

この間、日本道路公団では、県指定史跡杉山城跡及び十条条里遺跡をルートから大きくはずす努力がなされた。

昭和47年4月、日本道路公団高速道路建設局から千分の1平面図（設計図）が届けられ、本線内の遺跡分布確認調査が文化財保護室第二係の職員によって東松山側と上里町側からの二班に分かれてセンター杭をたどって幅約100メートルの範囲内で行われ、時期的に地上観察の困難な寄居町の一部を後日に残して、一応次の17箇所を日本道路公団に提示した。

遺跡番号	遺跡名称	所在地	種別	時代
滑川 1号	屋田遺跡	比企郡滑川村大字月輪字西新井	古墳群	古墳
滑川 2号	寺ノ台遺跡	比企郡滑川村大字水房字寺ノ台	塚	
嵐山 1号	越畑城跡	比企郡嵐山町大字越畑字城山	城館跡	戦国
寄居 1号	おかね塚	大里郡寄居町大字裏果	塚	
花園 1号	台耕地遺跡	大里郡花園村大字黒田	集落跡・古墳群	縄文・古墳
寄居 2号	新堀遺跡	大里郡寄居町大字用土字新堀	集落跡	
寄居 3号	沼下遺跡	大里郡寄居町大字用土字沼下	集落跡	奈良・平安
岡部 1号	清水谷遺跡	大里郡岡部町大字本郷字北坂	集落跡	縄文・古墳・奈良
岡部 2号	安光寺古墳群	大里郡岡部町大字本郷字清水谷 児玉郡美里村大字古郡字石神	古墳群	古墳
美里 1号	塚本山古墳群	児玉郡美里村大字下児玉字西山	古墳群	古墳
児玉 1号	雷電下遺跡	児玉郡児玉町大字浅見字雷電下	集落跡	古墳・奈良・平安
児玉 2号	飯玉東遺跡	児玉郡児玉町大字下浅見字飯玉東	集落跡	古墳・奈良・平安
児玉 3号	女堀条里遺跡	児玉郡児玉町大字下浅見字四方田前 本庄市四方田字塚崎	条里跡	奈良・平安
上里 1号	本郷東遺跡	児玉郡上里町大字七本木字本郷下	集落跡	古墳
上里 2号	愛宕遺跡	児玉郡上里町大字七本木字愛宕耕地	集落跡	古墳
上里 3号	中堀遺跡	児玉郡上里町大字塚字中堀北	集落跡	奈良・平安
上里 4号	若宮台遺跡	児玉郡上里町大字帯刀字堀の内	集落跡	奈良・平安

日本道路公団の用地買収および工事計画案の整ってきた昭和48年2月、高速道路建設局及び東松山工事事務所と、工事発注予定と埋蔵文化財についての打合せ会が行われた。東松山以北の工事区は、東松山側から滑川・嵐山・寄居・花園・美里・上里の六工区に分かれており、工事発注は、48年11月、上里工区から始まるという。ここで問題となったのは、48年度に発掘調査を実施しなければならぬとなると、関越自動車道川越市～東松山市間で発掘調査した遺跡の整理報告書刊行事業とかち合って調査員が大幅に不足することになる。そこで、今後の工事発注計画と発掘調査を要する遺跡との関係を詳細に検討し、調査員の人員増に関する資料を整え、教育局内人事担当課と協議

を開始した。

その後、公団側と48年度に調査事業を開始する方針で、細部の協議がもたれ、発掘調査から整理報告書刊行に至る調査事業年次もほぼ解点に達した。

昭和48年4月7日付け東建総第222号で、日本道路公団高速道路建設局長から、埼玉県教育委員会を經由して、文化庁長官あて、昭和42年9月30日付けで締結した「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」の第1項に基づく協議が行われ、埼玉県教育委員会は「当該地内に所在する埋蔵文化財については、公団と十分協議し、記録保存のための発掘調査を実施する」との届出を付け、文化庁に達達した。

これについて、文化庁は、昭和48年6月2日付け委保第59号で「当該施行地内の遺跡については工事前に発掘調査を実施すること。重要な遺構を発見した場合には、設計変更等によりその保存に配慮すること。」と回答した。

問題となっていた調査員の人員増も解決し、調査体制も整い、上里町地内の4遺跡の調査経費が48年9月、県議会上程可決され、昭和48年9月25日付けで日本道路公団東京建設局長あて、発掘調査の実施について、昭和48年度計画書を添えて通知し、10月25日、上里1号（本郷東遺跡）をトップに関越自動車道東松山—上里町間約36キロメートルに所在する埋蔵文化財包蔵地の調査が開始された。

発掘調査を進める一方、山林や宅地等、時期的に地上観察の困難な場所についても、随時確認調査を進めた。その場合、新たに次の11箇所が確認され、その都度、日本道路公団に提示し、発掘調査を実施した。

(横川好富)

遺跡番号	遺跡名称	所在地	種別	時代
嵐山 2号	中郷遺跡	比企郡嵐山町大字広野字中郷	集落跡	縄文
寄居 5号	中井丘遺跡	大里郡寄居町大字用土字中井丘		縄文
寄居 6号	中山遺跡	大里郡寄居町大字用土字中山		
寄居 7号	落久保遺跡	大里郡寄居町大字用土字落久保		縄文
寄居 8号	平原遺跡	大里郡寄居町大字用土字平原	集落跡	奈良・平安
寄居 9号	鶴巻遺跡	大里郡寄居町大字赤浜字鶴巻	集落跡	縄文・平安
岡部 3号	北坂遺跡	大里郡岡部町大字本郷字北坂	古墳群・集落跡	縄文・古墳
美里 2号	甘粕山遺跡	児玉郡美里村大字甘粕字東山	集落跡	縄文・古墳・平安
児玉 4号	後張遺跡	児玉郡児玉町大字浅見字下々田 本庄市大字四方田字塚場	集落跡	古墳
上里 5号	耕安地遺跡	児玉郡上里町大字梶字中畑北	寺院跡	平安・鎌倉
上里 6号	久城前遺跡	児玉郡上里町大字嘉美字一本松西 本庄市大字今井字久城前		奈良・平安

発掘調査の組織

1 発掘

主体者	埼玉県教育委員会	教育長	石田 正利
事務局	埼玉県教育局文化財保護課	課長	杉山 泰之
		課長補佐	秋葉 一男
企画調整	埼玉県教育局文化財保護課	文化財第二係長	早川 智明
			補沼 幹夫
			駒宮 史朗
			本間 岳史
庶務経理	埼玉県教育局文化財保護課	庶務係長	長谷川 清
			太田 和夫
			千村 修平
			沼野 勉
発掘	埼玉県教育局文化財保護課	文化財第三係長	横川 好富
			増田 逸朗

2 整理(昭和58年)

主体者	(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団	理事長	長井 五郎
		副理事長	岩上 進
		常務理事	石川 正美
庶務経理	(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団	管理部長	佐野 長二
			関野 栄一
			江田 和美
			福田 浩
			本庄 朗人
			福田 啓子
整理	(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団	調査研究部長	横川 好富
		調査研究副部長	小川 良祐
		調査研究第4課長	今泉 泰之
			今井 宏

3 協力者 比企郡嵐山町教育委員会 滑川村教育委員会 地元住民

2 発掘調査の経過（日誌抄）

滑川1号（屋田）遺跡、滑川2号（寺ノ台）遺跡の発掘調査は、昭和52年9月より翌53年4月までの7ヶ月間の計画で実施された。

以下、発掘調査の進行状況を月毎に記して行きたい。

9月 19日に現地で調査方法・諸確認を行うとともに、器材搬入・事務所の設置を行う。

屋田遺跡は、月ノ輪古墳群内に所在するため課査区内に墳丘の明瞭な4基の古墳が存在し、正確な現況図作製のため、1～4号墳の清掃作業から着手した。調査体制の整った下旬から、グリッドを設定し、併せて標高を求め基準杭とした。1号墳より順次、測量・写真撮影を行う。

10月 1～4号墳の清掃及び測量を継続する。調査区を東西に走る道路を基準に北側をA区、南側をB区と仮称し、A区の遺構分布・保存状態の把握・排土場所の決定をするため、グリッドに並行してトレンチを設定する。中旬より重機を導入し、表土剥ぎを実施。遺構確認作業に入る。墳丘の削平された5基の古墳・五領期住居跡14軒が検出された。下旬より6・7号墳周溝調査開始。

11月 1号墳々頂にグリッド設定、主体部及び墳丘調査に着手、墳頂部より近世の社跡が検出された。6号墳は3軒の住居跡と重複する事が判明し、7号墳からは壺棺・円筒埴輪棺が確認されたが、休日に円筒埴輪の一部が盗難に会う。中旬よりA区五領期住居跡群の調査開始。各住居跡とも保存状態は良好ではないが、遺物の出土を観る。

12月 五領期住居跡群及び古墳群で調査の終了したものから、順次実測を開始し、併せて写真撮影を行う。2号墳にグリッド及びトレンチを設定し、調査を開始する。B区の遺構分布・保存状態の確認・排土場所設定のため、グリッドに沿ってトレンチ設定・排土作業を行う。僅かな土器片の散布が認められるだけで、古墳以外の遺構は存在しないことが判明した。

1月 9日より寺ノ台遺跡の調査も並行して実施する。器材の搬入を行い、緩斜面に存在する塚の調査に入る。遺構の分布状態を把握するためトレンチを設定、排土を行う。塚の調査終了を待って、中旬より重機を導入、遺構確認を行う。鬼高期の住居跡3軒、終末期の古墳1基が検出された。下旬より北風に悩まされつつ遺構の調査にかかる。2月上旬調査終了。

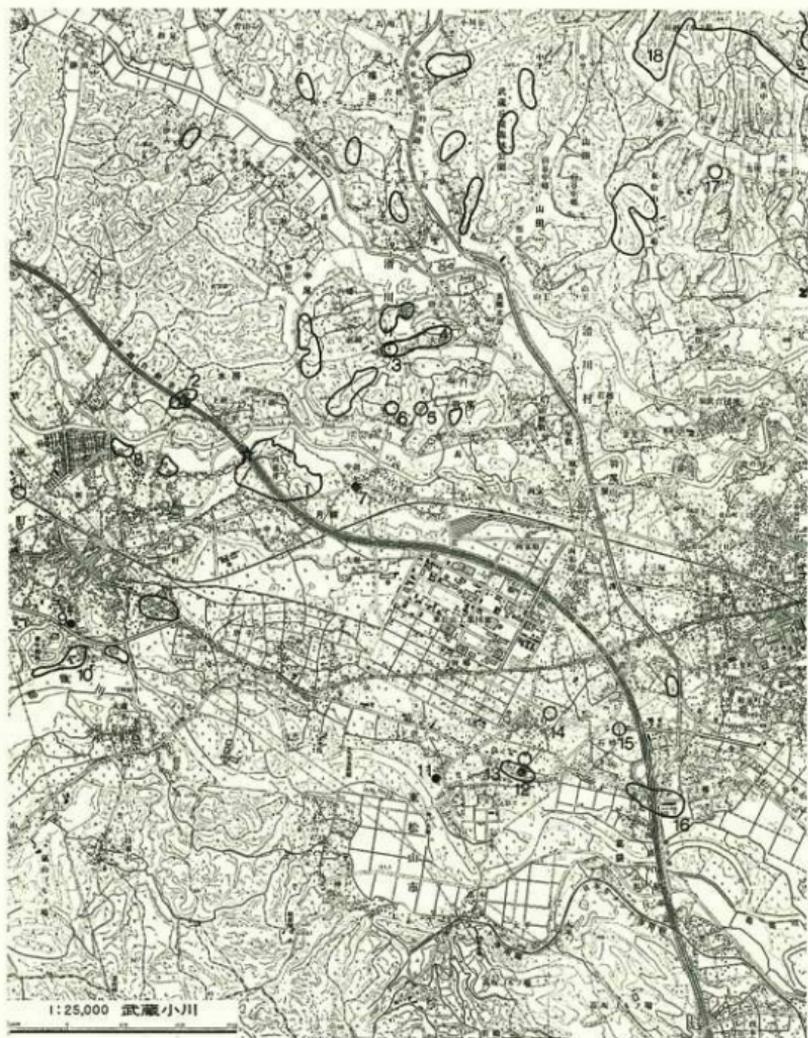
4・5号墳の調査に着手。5号墳より横穴式石室・円筒埴輪列が確認される。

2月 1・4・5号墳に主眼をおき調査を継続する。1号墳々頂表土下1mまで精査が進行し、剣・管玉が出土するが、主体部は未確認、周溝調査を開始する。4号墳々丘より多量の和泉期高杯が出土する。5号墳石室の精査、棺床面より鉄鍔・土玉が出土する。下旬より実測開始。

3月 1号墳々丘削平、墳丘下より4軒の住居跡検出、調査に着手する。また、周溝調査時に東側に隣接する9号墳を検出する。中旬より9号墳の周溝調査、併せて吉ヶ谷期住居跡の調査も実施。15・21号住居跡より、吉ヶ谷期の良好な資料が確認される。中旬に4号墳調査終了。

4月 未調査であった近世の埴壇遺構・炭窯・1号墳々丘下の縄文晩期包含層の調査を行う。実測図・写真を点検し、補充する。28日をもってすべての調査を終了する。

（今井 宏）



1:25,000 武蔵小川

- | | | |
|---------------|------------|------------|
| 1. 月輪古墳群・岡田遺跡 | 7. 月輪神社古墳 | 13. 下唐子古墳群 |
| 2. 寺ノ台古墳群 | 8. 花見堂遺跡 | 14. 岩の上遺跡 |
| 3. 大谷遺跡 | 9. 稲荷塚古墳 | 15. 雉子山遺跡 |
| 4. 大谷古墳群 | 10. 寺山古墳群 | 16. 附川古墳群 |
| 5. 羽尾遺跡 | 11. 曹塚古墳 | 17. 吉ヶ谷遺跡 |
| 6. 平谷瓦遺跡 | 12. 若宮八幡古墳 | 18. 三千塚古墳群 |

第1図 周辺の遺跡分布図

II 遺跡の立地と環境

屋田遺跡及び寺ノ台遺跡は、それぞれ、比企郡嵐山町大字川島宇屋田・滑川村大字月輪字西荒井、滑川村大字水房字寺ノ台に所在している。両遺跡は、中央に市の川を狭み、南北に約500 m 離れた台地と丘陵上に存在している。特に屋田遺跡は、月輪古墳群に属している。交通の面からは、東武東上線武蔵嵐山駅の北東3 kmに位置している。

滑川村を含む比企郡は、埼玉県を山地・台地・低地に区分した場合の台地に相当し、埼玉県のほぼ中央部に位置している。地形的には、外秩父山地の外縁にあたり、比企丘陵・松山台地・高坂台地及び荒川低地から成り立っている。また、比企丘陵は、中央を東流する都幾川によって、北・南比企丘陵に2分されている。北比企丘陵は、さらに市の川と滑川によって3地域に分割されている。

屋田・寺ノ台遺跡が立地するのは、都幾川と市の川に狭まれた最も広い空間をもつ地域である。屋田遺跡は、北比企丘陵の裾部を縫って東流する市の川を目前に臨む右岸の台地上に存在し、寺ノ台遺跡は、左岸の丘陵屋根上に存在している。比企丘陵は、低丘陵と台地及び小河川が複雑な地形を描き出しているが、両遺跡も例外でなく、屋田遺跡は西側を、寺ノ台遺跡は東西両側を小支谷で画されている。

自然的環境について述べて来たが、次に歴史的環境を探ってみたい。北比企丘陵及びそれに連続する台地上には、各時期に亘る各種の遺跡が濃密に分布している。近年それらのうちのいくつか、関越自動車道の建設など各種の開発にかり調査報告が成されている。これらの調査報告された遺跡を中心に、屋田・寺ノ台遺跡で検出された諸遺構と関連する周辺の遺跡を概観してみたい。

まず縄文時代であるが、屋田遺跡では早期熱糸文系・押型文系・条痕文系土器、前期後半諸磯a・c式、晩期終末の工字文系土器が出土しているが、いずれも後世の遺構に攪乱されて原位置を留めたものではない。遺構としては条痕文土器を伴う集石が1基検出されたに過ぎない。このような存り方は、比企丘陵では通有とされてきたが、金平遺跡(金子1982)では野島期の住居跡が検出され、緑山遺跡(今井1982)では野島期及び茅山上層期以降の炉穴・土壇・黒浜・諸磯a式期の住居跡が報告されている。晩期終末の千網式類似土器は、屋田遺跡と立地条件を同じくする花見堂遺跡(梅沢1976)で報告され、今後この地域で該期の遺跡が増加していくことが予想され、除々に比企丘陵の縄文時代が解明される段階になりつつある。

比企丘陵には、櫛状工具による波状文・籠状文を文様主体とする岩鼻式土器(金井塚1964)と縄文を文様主体とする吉ヶ谷式土器(金井塚1965)の二系統の土器群が存在し、両者は並存したと考えられているが、今だ多くの課題を残している。屋田遺跡では、調査区北端の台地縁辺部から吉ヶ谷期の住居跡が近接して検出され、良好な資料を提示している。周辺には、標式遺跡となった吉ヶ谷遺跡(第1図17)、市の川左岸に位置する大谷遺跡(金井塚1973・第1図3)が存在し、いずれも狭い沖積地を臨む台地上に立地するという共通点が認められる。

次に古墳時代であるが、古墳群形成と重要な関わりをもつ集落遺跡の調査は、花見堂遺跡(金井

塚1976)、大谷遺跡で実施されたに過ぎず、また不明な点が多い。そこで比較的調査の進んでいる古墳群に焦点を絞って述べてみたい。屋田遺跡では、五領期14軒・和泉期2軒及び9基の古墳が調査されている。また寺ノ台遺跡では、鬼高期住居跡3軒と終末期の古墳1基が調査されている。

屋田・寺ノ台遺跡周辺には、数多くの古墳群が分布している。滑川左岸の丘陵上には、丘陵頂部に築造された雷電山古墳を中心に、8支群に分かれて分布する三千塚古墳群(金井塚1962)、鴻の面古墳群が存在している。滑川と市の川に挟まれた丘陵及び台地上には、東京大学によって調査され、胴張横穴式石室が検出された愛宕塚古墳(東京大学考古学研究室1964)を含む大谷古墳群、中尾・平・唐古古墳群が分布している。また、都幾川左岸に形成されたのは、寺山(今泉1976)・下唐子・附川(金井塚1974)古墳群である。三千塚古墳群のように、6世紀代の古墳群と重複するものもあるが、いずれもその立地条件や内部主体及び出土遺物より7世紀代を中心に築造された後期の群集墳と推定されている(金井塚1981)。

屋田遺跡の属する月輪古墳群は、昭和26年に東京大学が行なった分布調査時には、44基の古墳が確認されている(東京大学考古学研究室1964)が、現在では大半が消失し僅か10数基残る程度である。月輪古墳群はその分布状況から、5～6の支群に区分され、石室を主体部とする支群が1つに対して、石室以外の主体部が大部分を占める支群が3～4と考えられている(高柳1980)。

今回の調査は、古墳群を南北に横断する状態で実施され、調査区北端の台地肩部に存在する6基、台地内奥平坦面に存在する3基が調査されているが、これらは分布状態から判断すると別の支群と考えられる。台地肩部に存在する6基の古墳は、いずれも主体部は不明であるが、ローム構や箱式石棺などと推定される。特に第1号墳は、径27.6m、高さ3.6mを測る大形の円墳で、墳丘より原位置ではないが、剣・鎌・管玉が出土している。立地条件、規模、出土遺物から月輪古墳群内で最古の古墳と推定される。台地内奥平坦面に存在する第2・4号墳は、低墳丘で主体部がそれぞれローム構、土壇であった。第5号墳は調査された古墳中唯一の横穴式石室をもつ古墳である。横穴式石室としては、初現的な無袖短冊型の石室である。

月輪古墳群周辺に存在する古墳群を概観したが、月輪古墳群以外は、いずれも横穴式石室をもつ群集墳と推定される。まだ不確定要素は多分にあるが、おそらく月輪古墳群が市の川流域で最大、最古の古墳群と考えられる。(今井 宏)

引用・参考文献

- 今井宏「緑山遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第19集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1982
- 今泉泰之「寺山」埼玉県遺跡発掘調査報告書第9集 埼玉県教育委員会 1976
- 金井塚良一・梅沢太久夫「花見堂」嵐山町教育委員会 1976
- 金井塚良一「東松山市天神裏遺跡第1次調査」埼玉考古第2号 1964
- 金井塚良一「埼玉県東松山市古ヶ谷遺跡の調査」台地研究№16 1965
- 金井塚良一「大谷遺跡」滑川村教育委員会 1973
- 金井塚良一「三千塚古墳群発掘調査 一中間報告一」三千塚古墳群調査会 1962
- 金井塚良一「東松山市史 資料編第1巻」市史編さん課 1981
- 金井塚良一「古墳調査報告書 第8編 比企地区」埼玉県教育委員会
- 金子直行「野島式土器について—金平遺跡出土土器を中心に—」土壇考古第6号 土壇考古学研究会 1982
- 高柳茂「羽尾黒跡発掘調査報告書」滑川村教育委員会 1980
- 東京大学考古学研究室「埼玉県宮前村の古墳調査」考古学雑誌第49巻4号 1964

Ⅲ 屋田遺跡の発掘調査

1 遺跡の概観

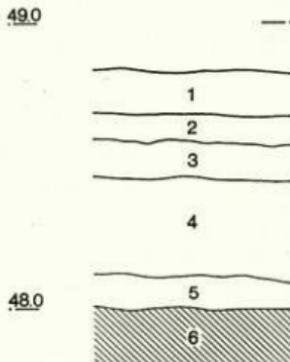
北比企丘陵の裾を縫って流れる市の川には、多数の小河川が流入している。屋田遺跡は、右岸の台地から流入する小河川に東西両側を画され、市の川を目前に臨む比高差6mの台地上に所在している。調査区は台地を横断するため、標高49~54mと差がある。遺跡の基本層序は、茶褐色土15~20cm、褐色土10~20cm、ソフトローム15~20cm、ハードローム30cm、茶褐色粘質土10~15cmで赤褐色粘質土に至る。住居跡群の存在する縁辺部では、褐色土の堆積が薄く、斜面部では層厚を増している。調査前の地目は、一部桑畑であったが、雑木林が調査区の大半を占め、調査に多大な困難が伴う事が予想された。

調査は、調査区内のすべてを掘る事を目標に、国家座標に沿って、50×50mの大グリッド、A~Vを設定し、さらに25区分して10×10mの小グリッドに細分した。小グリッドは北東隅から南・西へ、平行式に1~25の番号を附し、D-1、D-2と呼称した。

検出された遺構は、弥生時代吉ヶ谷期住居跡4軒、古墳時代五領期住居跡16軒・和泉期2軒・古墳9基と中・近世の塚・社跡・屋敷跡・土壇・溝・樽埋設遺構である。また、遺構が検出されたのは、縁辺部に相当する調査区北側のC・D・G・H区と台地内奥平坦部のM・Q・T区であり、中央の緩斜面には、僅かな土器片が散布するだけで、遺構は全く確認できなかった。これは屋田遺跡が、縁辺部と内奥平坦部の立地を異にする2遺跡から成り立つ事を示唆するものと思われる。

吉ヶ谷期の住居跡は、調査区北東の台地縁辺部に存在し、立地条件を同じくする古墳に切られているが、第15号住居跡からは、良好な資料が出土している。五領・和泉期の住居跡も古墳群と重複し、縁辺部及び縁辺部から50m程離れた平坦部に等高線に沿って存在している。住居跡相互の重複は無いが、表土が薄いことや耕作などで攪乱が激しく保存状態の悪いものが多い。各住居跡からは土器が出土し、特筆すべき遺物として、第13号住居跡から土器製作時の粘土削り屑が出土している。古墳は、縁辺部と内奥平坦部の2グループが存在している。縁辺部に築造された古墳群は、剣や管玉を出土した第1号墳を除いて、墳丘は完全に削平され、いずれも主体部の検出は不可能であった。第7号墳から壺棺、円筒埴輪棺が検出された。内奥平坦部の古墳は、横穴式石室の第5号墳を除き、低墳丘のもので保存も良く、主体部も確認された。第2号墳から直刀、第4号墳から多量の高坏などが出土している。

(今井 宏)



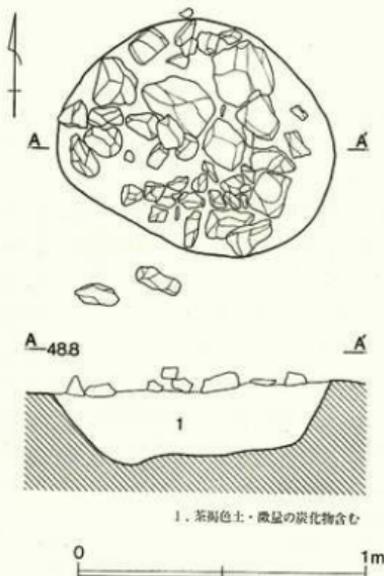
第2図 屋田遺跡標準土層

2 遺構と出土遺物

(1) 縄文時代の遺構と出土遺物

調査開始前の現地踏査では、古墳時代の遺物に混在して条痕文土器や諸磯c式土器が散見され、該期の遺構の存在が期待されたが、集石が1基検出されたに過ぎない。縄文時代の遺物は、住居跡覆土や古墳々丘内より出土しており、これら後世の遺構によって破壊されたものと想定される。

a 集石 (第3図、図版26)



第3図 集石

調査区西端の第6号墳々丘内に存在し、H-13・14グリッドに位置している。墳丘の中心部よりやや南側へ外れるが、疎櫛等の可能性があるため慎重な調査を行なった。集中する疎は、組まれた状態もなく、また、疎中より1片の条痕文土器細片が出土し、早期の集石であることが判明した。

集石は、径90cmの円形状に5~25cm、特に拳大から人頭大の疎が乱雑に置かれていた。疎は、ヒビ割れたものが目立つが、焼土・炭化物は存在しなかった。チャートを主体に、砂岩・泥岩の疎が使われている。疎下には、微量の炭化物を含む茶褐色土を覆土とする、94×82cm・深さ20cmの東西に長い楕円形を呈する浅い土壌が存在する。土壌の壁は緩やかに立ち上がり、床面は凹凸が目立つ。覆土中からは、疎や遺物の出土は皆無であった。

b グリッド出土縄文土器 (第1~9図、図版30~33)

屋田遺跡から出土した縄文土器は、後期を除き早期から晩期終末に至るまでの多時期に及ぶ。主体を占めるものは、早期燃糸文系・押型文系・条痕文系土器と前期の諸磯c式土器及び晩期の大洞A・A'式併行土器である。いずれも遺構などに包含層が攪乱され、層位的に扱えられなかった。

以下、時期・型式を基準にして説明する。なお、晩期の土器については、次項で説明を加える。

I群 早期に属するものを一括する。燃糸文系(1~4類)、押型文系(5類)、条痕文系(6~9類)に分類し説明する。

1類 (第4図1)

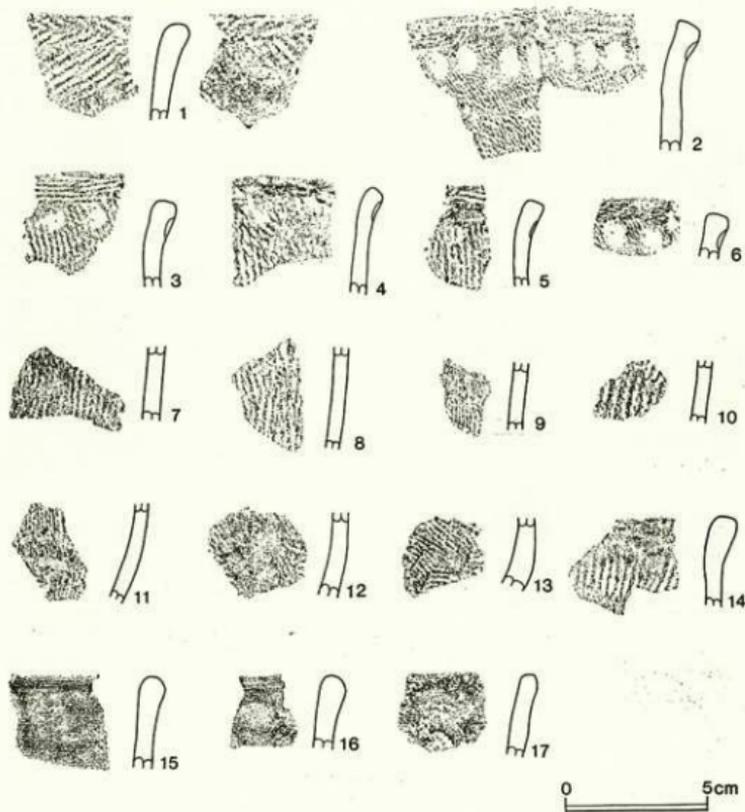
口縁が肥厚反し、口唇部に綾杉状の縄文、口縁内外面には横位の原体LR縄文が施されてい

る。胎土には小石が多量に含まれるが、焼成良好で堅緻、茶褐色。井草Ⅰ式に比定される。

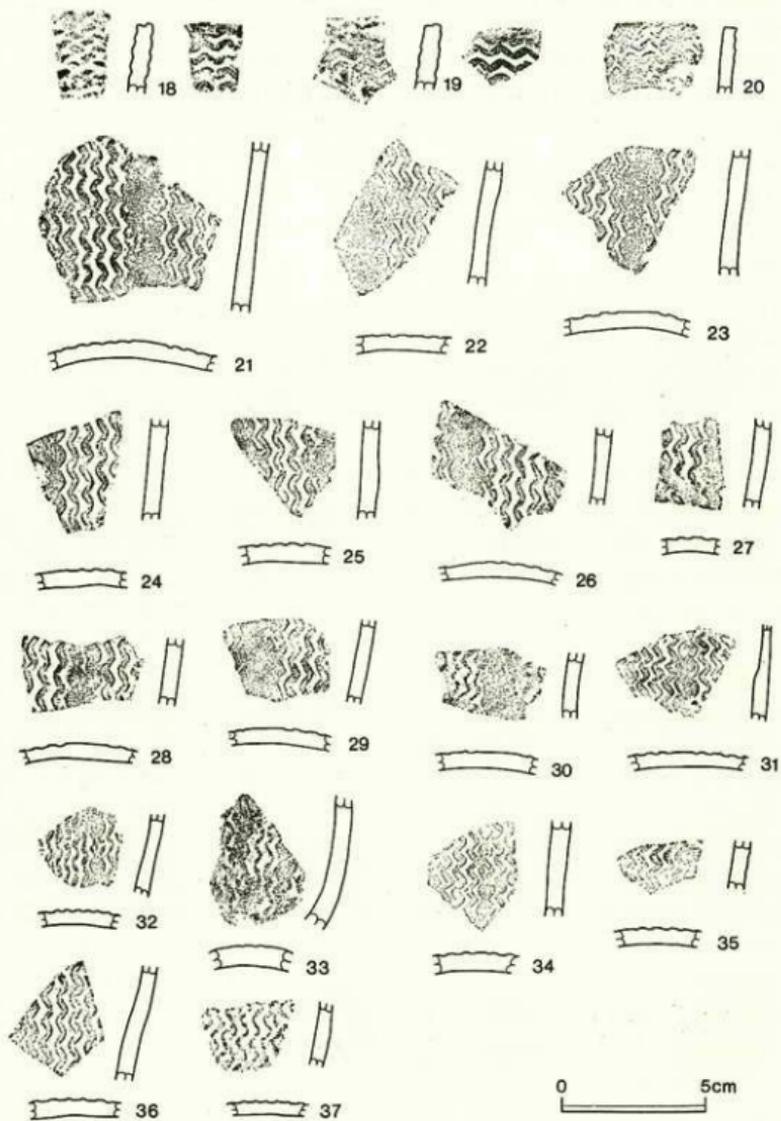
2類 (第4図2~13)

口唇部に燃糸を施文し、口縁部以下に斜位及び縦位の燃糸文が施されるもの。2~6の口唇直下には、爪形文が深く密に施文されている。いずれも口縁が肥厚外反するが、2は角頭状、他は丸棒状を呈する。原体はすべてLr、4は条が太く、他の条は細い。胎土は小石を含みザラつく。焼成良好で堅緻。2・4・6赤褐色、他は茶褐色。7~10は胴部片。原体はすべてLr、10の条は太く、他は条の細い燃糸が粗く施される。11~13は底部近くの破片。12の原体はRl、他はLr。胎土は小石を含み、焼成良好で堅い。7・10茶褐色、他は赤褐色。井草Ⅱ式に比定される。

3類 (第4図14)



第4図 グリッド出土縄文土器(1)



第5図 グリッド出土縄文土器(2)

口唇部及び口縁部に縄文の施文がなく、口縁下より縦位の縄文が施されている。口縁は肥厚し、2類よりも外反がきつい。多量の小石を含むが、焼成良好、濃茶褐色。夏島式に比定される。

4類 (第4図15~17)

撫糸土器に伴出する無文土器である。3片とも口縁部片。内外面とも丁寧に磨かれ平滑に仕上げられている。15・16の口縁は肥厚し丸棒状を呈し、僅かに外反する。17は口唇下が薄く、直線的に外反する。胎土には小石含む。焼成は良好。濃茶褐色。

5類

山形押型土器を一括する。口縁部3片を含め総数20片。すべて第1号墳々丘及び墳丘下の住居跡覆土から出土し、原位置ではないが、該期の生活空間の在り方を示唆している。原体及び施文方法の違いなどから、A・B2種に分類し説明する。

A種 (第5図18・19・21~30)

条間が2.5~3mmとやや幅広く、胴部縦帯に無文部において施文されたもの。原体端部にはすに切られている。18は口唇上及び口縁内外面に、同一原体で口唇直下より横位に施文されている。外面は原体の重複部で、条の幅は2~3mmと広狭がある。原体の長さ、条数、単位は把握できない。19も口唇上及び口縁内外面に同一原体で横位に施文され、内面には7mmの無文帯が存在する。外面の施文は浅く不明瞭。小石・雲母片を多量に含み、焼成良好。18茶褐色、19赤褐色。21~26は同一個体と思われる縦帯のみ観られる胴部片。長さ2.6cm・6条刻みの原体を、器面を平滑にした後縦位に施文している。原体端部の施文が不明瞭なものもある。胎土に小石・砂粒・雲母片を多量に含み、焼成良好で堅緻、赤褐色。28~30には、それぞれ1.2、1.6、1.2cmの器面調整時の縦位の擦痕の残る無文帯が存在している。小石・砂粒を多量に含み、焼成良好で堅い。茶褐色。

B種 (第5図20・31~37)

1.5~2mmと条間が狭く、また密接施文されたもの。原体端部にはすに切られている。20は口唇部が平坦な口縁部。器面の荒れが激しく不明瞭であるが、口唇上は施文されず、口唇直下より条数3以上の原体で横位に粗く施文されている。胎土はきめ細かく、焼成良好、茶褐色。31は5mm、32は3mmの無文帯をもつが、31は施文が平行せず上部で接する。31の条間1.5~2mm、32は1~1.5mmと狭い。33は唯一の底部付近。単位は不明であるが、長さ1cm・3条の短い原体で口縁より底部方向へ粗く施文している。34~37は密接施文されたもの。原体長・条数は不明。34・37は原体の重複が認められる。35の施文は浅い。小石・砂粒を多量に含み、焼成良好で堅緻。茶褐色。

6類 (第6図38~41)

条痕文を地文にもち、沈線による区画内を刺突文で充填するもの。茅山下層式に比定される。38・30は内割ぎ状を呈し、丸棒状の口唇上に刻目をもつ。口唇直下に横位の1条の沈線が走り、三角形区画内を細い竹管刺突で充填している。39は角頭状を呈する口縁部。内割ぎは顕著ではないが、口唇上に刻目をもつ。口唇直下の半円・三角形区画内に刺突文が充填されている。41は区画下に多数竹管の横位の刺突文が施されている。繊維の含有は少なく、多量の小石・砂粒を含み表面がザラつく。焼成良好で堅緻。38~40濃茶褐色、41黒褐色。

7類

沈線などの区画文をもたず、直接文様が施されるもので、茅山上層式以降のものと思われる。A種 絡状体疋痕文、B種 刺突列点文をもつものに分類される。

A種 (第6図42・43)

42は内割ぎの丸棒状を呈する口縁部片。内外面とも細かな横位の擦痕を地文としている。外面口唇部にかかり左下がりの絡状体疋痕文が粗く施文されている。施文は深い。43は丸棒状の口縁部片。口唇直下に絡状体疋痕文が浅く施文されている。胎土には小石・砂粒を多量に含むが、繊維の含有は少ない。焼成は良く堅緻。42濃茶褐色、43赤褐色。

B種 (第6図44~54)

44は刻目をもつ口唇部が外側へ張り出す唯一の口縁部片。口唇部に竹管による大小の刺突文が横位に並行して施されている。地文は横位の擦痕。繊維の含有は少なく、小石・砂粒を多量に含む。焼成良好、茶褐色。45・47はくびれ部片。45は内外面に太い条痕文が施され、くびれ上に細い半截竹管の刺突列点文が施文されている。内面の条痕文は格子状の文様を描出している。53はくびれ部の突帯をまたぐ、幅1.2cmの太い竹管で爪形状刺突文が施されている。繊維の含有は少なく、小石・砂粒を多量に含む。焼成良好で堅緻。45・53赤褐色、47茶褐色。46・48~50は刺突列点文が密接施文された胴部片。すべて竹管によるもので、器面に対して鋭角的に刺突されている。48には2種の竹管が認められる。多量の小石・砂粒を含み、繊維の含有は少ない。焼成良好で堅い。茶褐色。51は横位の条痕文上に2条の浅い刺突列点文が認められる。52のくびれ部は無文で、丁寧に撫でられている。54は斜位の擦痕を地文に、半截竹管による2条の刺突が深く加えられている。繊維の含有は少なく、多量の小石・砂粒を含む。54は焼成不良で脆く、他は良好。茶褐色。

8類

条痕文土器の口縁部を一括する。口唇部の刻目の有無でA・B2種の分類が可能である。

A種 (第6図55~57、第7図58~61)

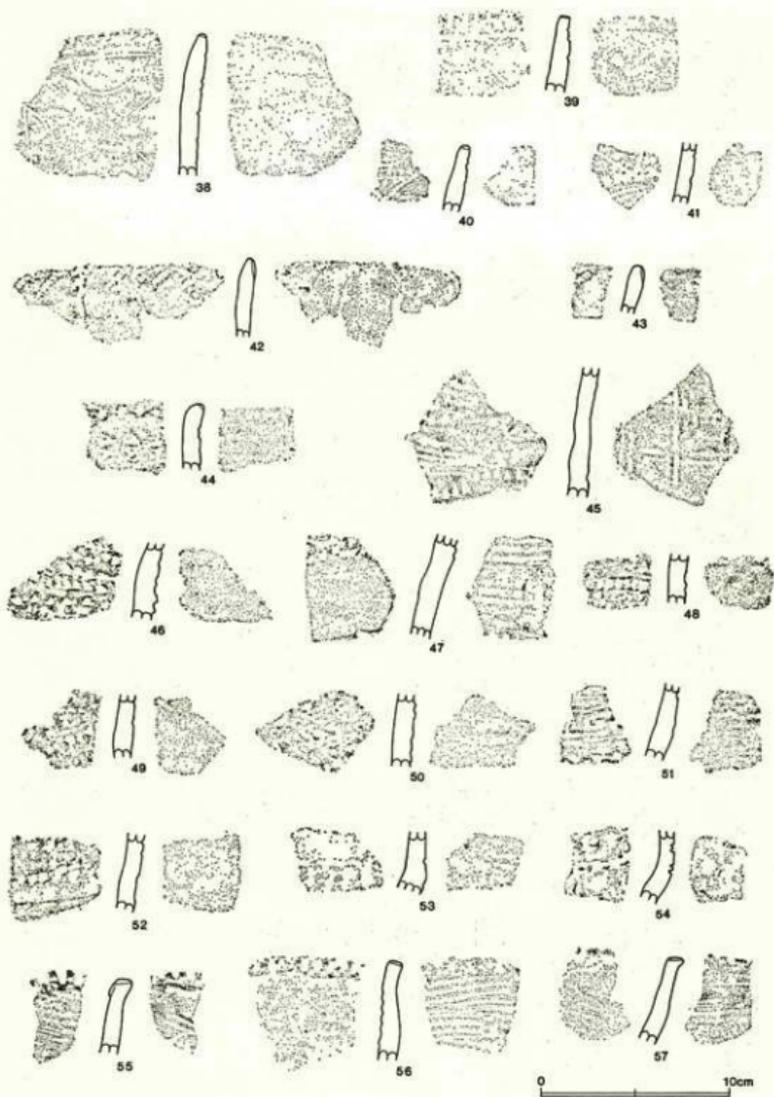
口唇部に刻目をもつもの。口縁部の形態の違いにより、刻目の施し方にバラエティーがある。55は内面に折り返しがあり、刻目が口唇に水平に深く加えられ、内外面とも横位の浅い条痕文。56・60・61は角頭状を呈し、浅い刻目が56・60は水平に、61は斜めに加えられている。口唇が外側へ突出する57の刻目は、浅く水平に加えられている。58・59は幾分外傾がきつい内割ぎ状口縁。刻目は口唇端に浅く加えられ、いずれも内外面とも横位の浅い条痕が認められる。繊維の含有は少なく、多量の小石・砂粒を含んでいるが、焼成は良い。55・57・61赤褐色、他は茶褐色。

B種 (第7図62~65)

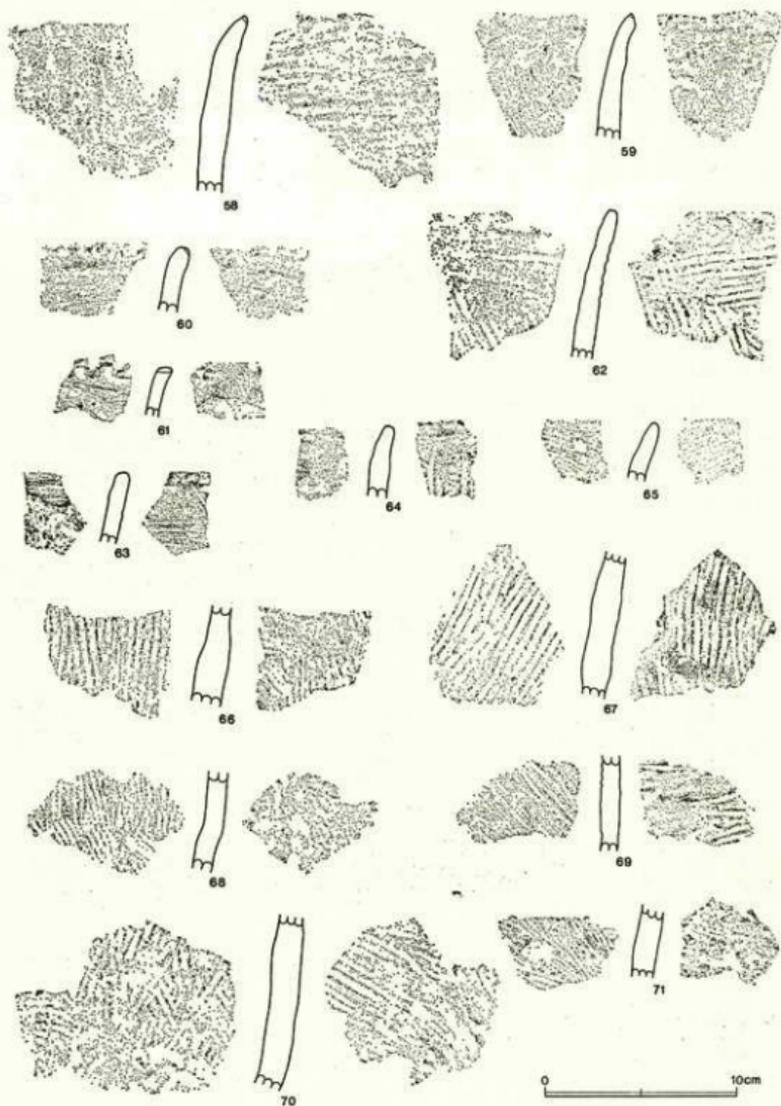
口唇部に刻目をもたないもの。62は丸棒状の口縁で、内外面とも横・斜位の深い条痕が施されている。63・65も丸棒状の口縁であるが、内外面とも横位の擦痕が認められる。64は内割ぎの口縁。外面横位の擦痕、内面縦位の深い条痕が施されている。小石・砂粒を多量に含む、繊維の含有は少ない。焼成良好。63茶褐色、他は赤褐色。

9類 (第7図66~71、第8図72~78)

条痕文土器の底部及び胴部を一括する。胴部内外面に於ける条痕文は、条痕の幅・施文の深淺・方向にバラエティーが認められる。66・68は内外面とも縦位、67は斜・縦位、69は斜・横位。70は



第6図 グリッド出土縄文土器(3)



第7図 グリッド出土縄文土器(4)

底部近くの大形破片。外面格子状、内面斜位の太い条痕文が深く施されている。72は内外面とも横位の細い条痕文。内面の施文は非常に浅い。73~76は条痕文と擦痕文が認められるもの。総じて胎土に繊維の含有は少なく、小石・砂粒を多量に含む。焼成は良い。70は2次加熱を受け脆い。68・70は赤褐色、他は茶褐色。77は丸底片。外面縦位、内面横位の粗い条痕文。78は平底片。外面底部まで横位の条痕文が認められる。繊維の含有は少なく、2次加熱を受け脆くなっている。赤褐色。

Ⅱ群 前期後半の諸磯a式(1類)、c式(2類)を本群とする。

1類(第9図79-81)

79は縄文RLを施文し、円形竹管が押捺されている。80・81はLRの縄文が施文され、綾線文が認められる。いずれも内面平滑。砂粒多量に含み、焼成良好堅緻。79は赤褐色、他は茶褐色。

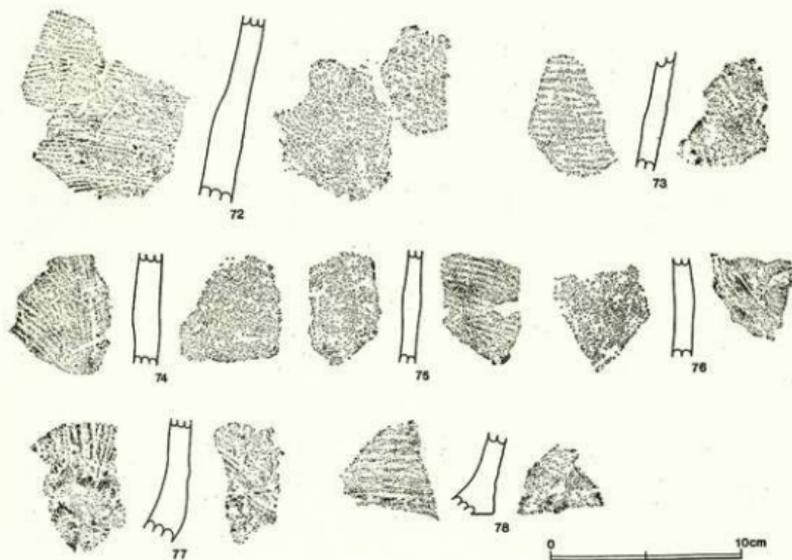
2類

集合条線を地文にボタン状貼付文をもつA種、結節浮線文をもつB種に分類される。

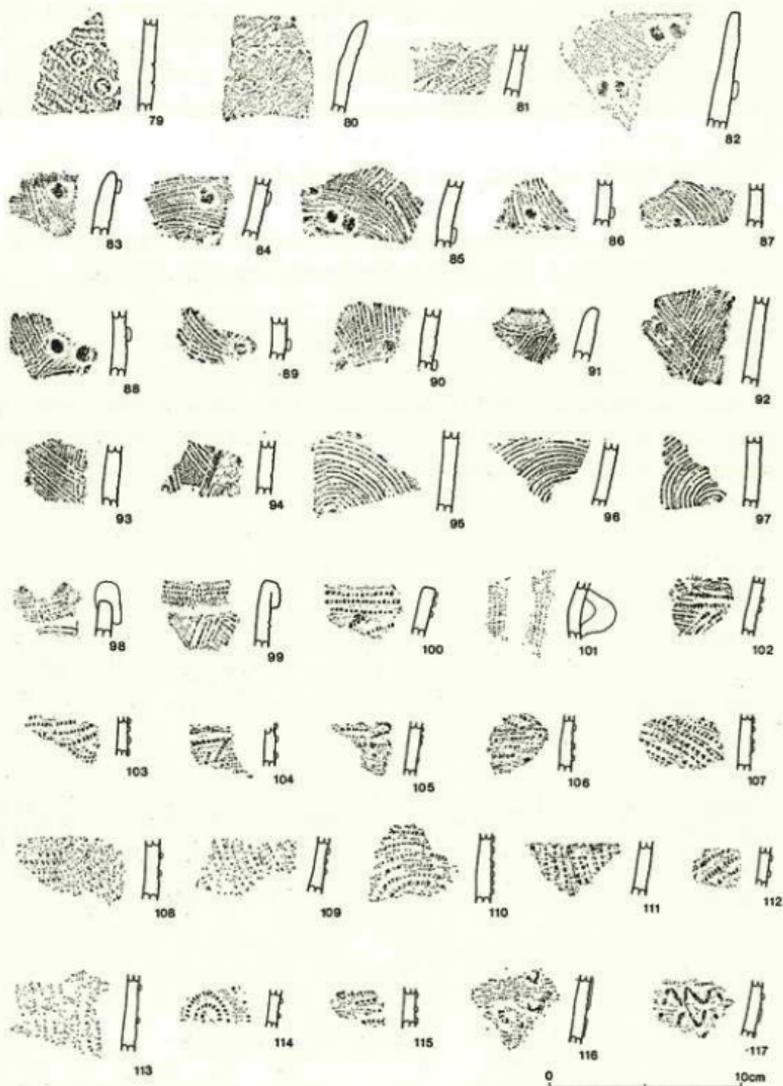
A種(第9図82-97)

竹管による集合沈線で、弧状と菱形の基本区画が施され、区画内や集合沈線の交点に、2個一対を単位とするボタン状貼付文が施されている。ボタン状貼付文には施文が無い。胎土は小石・砂粒を多量に含み、焼成良好で堅緻。赤褐色・茶褐色を呈する。

B種(第9図98-117)



第8図 グリッド出土縄文土器(5)



第9図 グリッド出土縄文土器(6)

浮線文を先端が細く鋭利な竹管によって刺突された結節浮線文で、渦巻状の文様が施されるもの。地文に集合沈線が施文されている。小石・砂粒を多量に含み、焼成良好で堅緻。茶褐色・赤褐色。

c グリッド出土石器（第10図、図版33）

屋田遺跡から出土した石器は、総数僅か9点にすぎない。いずれも調査の主体である古墳時代住居跡覆土、古墳々丘内より出土したものであり、本来帛属すべき包含層ではない。

時間的な幅もあると思われるが、一括して説明を加える。

打製石斧（第10図1～4）

それぞれ形態の異なる4点が出土している。1は片面に大きく未調整の自然面を残す。刃部が僅かに膨らむ短冊形の打製石器である。主剝離面は、側辺部より粗い成形剝離が加えられている。刃部は自然面側から調整剝離が加えられ、薄く仕上げられている。横断面が台形状を呈している。長11.7cm、幅5.6cm、厚2.1cm、重18.5g、粘板岩製。2は薄い横長の剝片を母材とし、刃部のやや上位で最大幅をもつ撥形を呈する。片面には粗い主剝離痕を残す。片面は側辺部からの調整剝離が加えられ、刃部は敲打が激しく潰れている。長10.2cm、幅5.1cm、厚1.5cm、重90g、粘板岩製。3は薄い板状の礫を母材とし、刃部側がやや湾曲する短冊形を呈する。両面とも側辺部より細かな調整剝離が加えられている。刃部は敲打され潰れている。長10.1cm、幅4.2cm、厚0.5cm、重38g、緑泥片岩製。4は一部欠損しているが、整った分銅形石斧。両面とも粗い成形剝離を残す。扱りは両面から調整剝離が施され、刃部は片面より集中して調整されている。長9.5cm、幅6.6cm、厚1.4cm、重142g、ホルンフェンス。

石匙（第10図5）

丁寧に作り上げられ、形態の整った横刃型の石匙である。両面とも成形・調整剝離が細かく施され、扱ひ・刃部の調整は特に細かい。長4.6cm、幅3.2cm、厚0.9cm、重25g、チャート製。

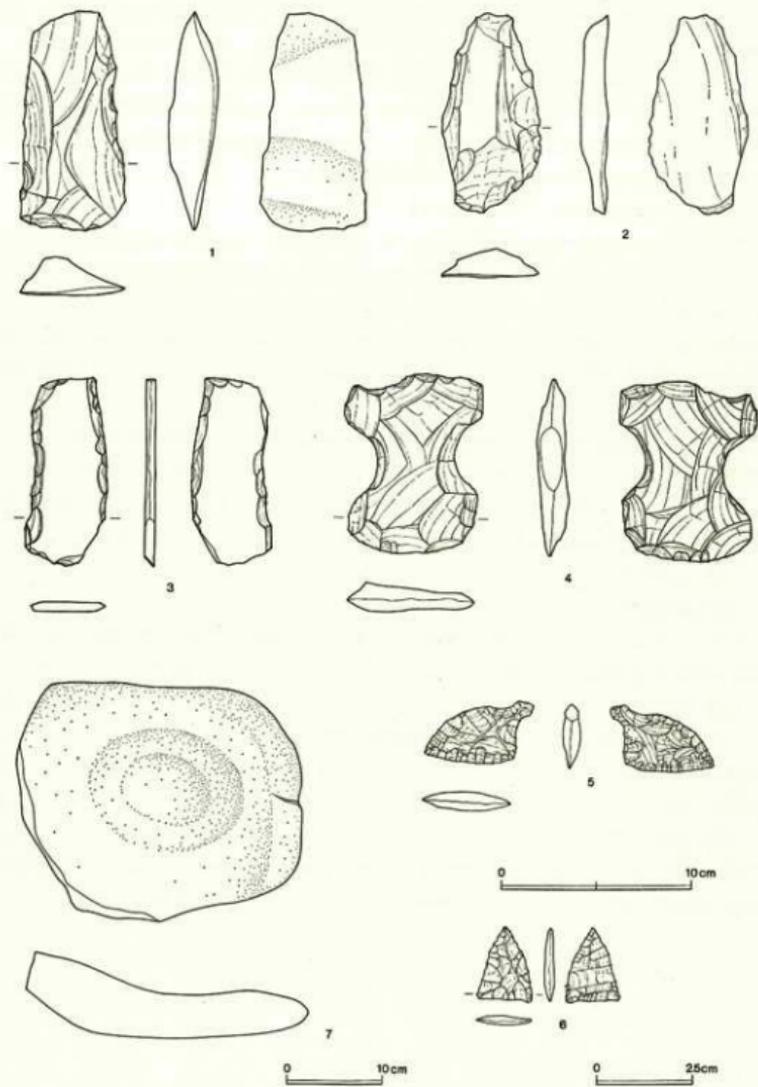
石鏃（第10図6）

二等辺三角形に近い形態のもので、片側辺部及び基部が僅かに湾曲している。成形剝離は両面に施され、調整剝離は特に片面に集中している。長1.9cm、幅1.4cm、厚0.3cm、重0.8g、チャート製。

石皿（第10図7）

側辺部を欠損しているが、隅丸方形を呈するもの。湾曲した扁平な礫を母材とし、片面に楕円形の浅い使用面が認められる。長28cm、幅25cm、厚4.4cm、重3.2kg、砂岩製。

（今井 宏）



第10図 グリッド出土石器

(2) 縄文時代晩期終末の土器

縄文時代晩期の遺物は土器だけで、1号墳とその周辺を中心として106片が出土し、接合によって最終的に87片となった。106片のうち約100片は1号墳の墳丘内と周溝の覆土及び1号墳の墳丘下で確認された16号・17号・18号・20号住居跡の覆土中より出土している。1号墳周辺以外では6号墳から数片出土しているだけである。このように、出土状態は住居や古墳の築造時に2次的な移動がなされているため不安定で、該期の遺構や包含層といったものは発見されなかった。しかし、大部分の土器が台地縁辺部の1号墳周辺から集中して出土していることから、本来的な出土位置も1号墳を中心とした標高49m～50mの台地肩部の狭い範囲と考えて差し支えないであろう。

出土土器は浮線網状文系の土器と条痕文系の土器に大別できるが、同一個体と思われる土器片も多く、底部は2個体分しか検出されていない。出土した土器片数はこの時期としては多いが、個体数自体は少なく、浮線網状文系のものが5～7個体、条痕文系のものは大部分が3個体のもので、他に数片あるだけである。

土器の出土範囲や個体数あるいは時期的なものから、長期間居住した集落とか住居ではなく、小集団が短期間使用したキャンプ的な性格をもった遺跡であると考えられる。

同一個体と思われるものが多いので図示したものは39片である。

浮線網状文系土器 (第11図、図版34)

14片検出されたが、うち9片が口縁部破片であり、その特徴から5種に分類した。

I類 (第11図1)

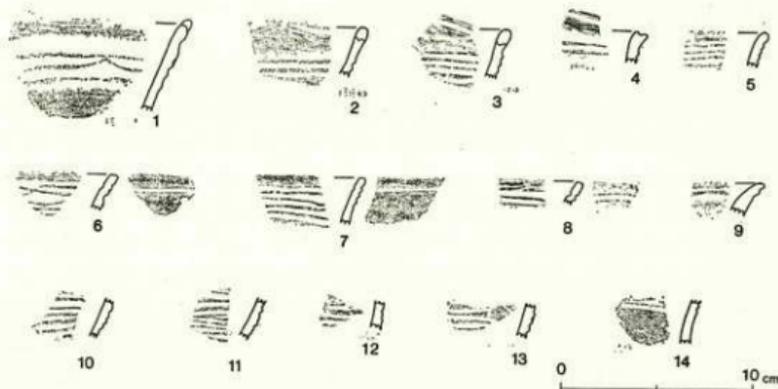
Iは色調・胎土とも他の土器とは異なり、明茶褐色を呈し、胎土中に砂粒を含み器面も浮線網の土器としては荒れている。口縁部に小突起を持つ浅鉢形土器で他のものに比し大形である。4本の浮線は沈線を引くことにより陽刻されたものであるが、沈線は幅が広く浅い為、特に下の2本は明瞭でない。元字状を呈す部分は浮線を下から押し上げて上の浮線と連結させたものである。内面は口唇部分以外、この手の土器としては、丁寧な磨きがされていない。

II類 (第11図2～4・10～14)

波状口縁の浅鉢形土器である。色調は灰褐色から黒褐色を呈し、胎土中に砂粒を若干含むが焼成は良好である。内外面とも良く磨かれている。口唇部に深い沈線を1条めぐらすのが、波状の頂部はそのまま残している。浮線はネガとしての沈線によって陽刻されたもので、下方から先端がくの字状の原体を突き上げるようにして平行沈線を巡らしている。3は3本目と4本目の浮線を縦方向の沈線で結び、工字状の文様を呈している。11は網状文を呈すかと思われるが、小破片である為明瞭ではない。13も平行沈線にはならない部分があり、磨滅しているが縷糸文(原体はLか)が施文されている。14は黄橙色を呈し、他のII類の土器と色調に差があるが、沈線の施文方法、胎土に差は見られない。

III類 (第11図5～8)

平縁の精製浅鉢形土器であり、III a類とIII b類に小分類できる。III a類は5の1片だけであり、黒褐色を呈し、よく研磨され胎土、焼成とも良好である。II類に比してやや小形の土器で、浮線部



第11図 グリッド出土縄文土器(7)

分も細く断面も三角形になっている。浮線の技法はやはり沈線による陽刻である。Ⅲ b類は6~8でおそらく同一個体であろう。色調・胎土・焼成についてはⅢ a類との差はないが、口縁部外面には燃糸文、内面には1条の沈線が施されている。浮線の作り方はⅡ類に比べると雑な感があり、沈線部も丸味もっている。6は1本目と2本目そして3本目と4本目の浮線を結び工字状文を2段作っている。1段目は2本の浮線をずらして連結しているが、形は崩れている。2段目は沈線を引く時に寄せられてきた粘土をそのまま連結部としたもので、これを見る限りでは沈線は左回りで施文されている。2段目の工字部分も形はしっかりしておらず崩れている。又3本目の沈線は幅も広く深く刻まれており、2段の工字文を区切っている。口縁部外面の燃糸文は原体はLであり、横位に施文されている。口縁部内面の沈線は1条であり、表面の沈線よりは細く、深さは一様でない。

Ⅳ類 (第11図9)

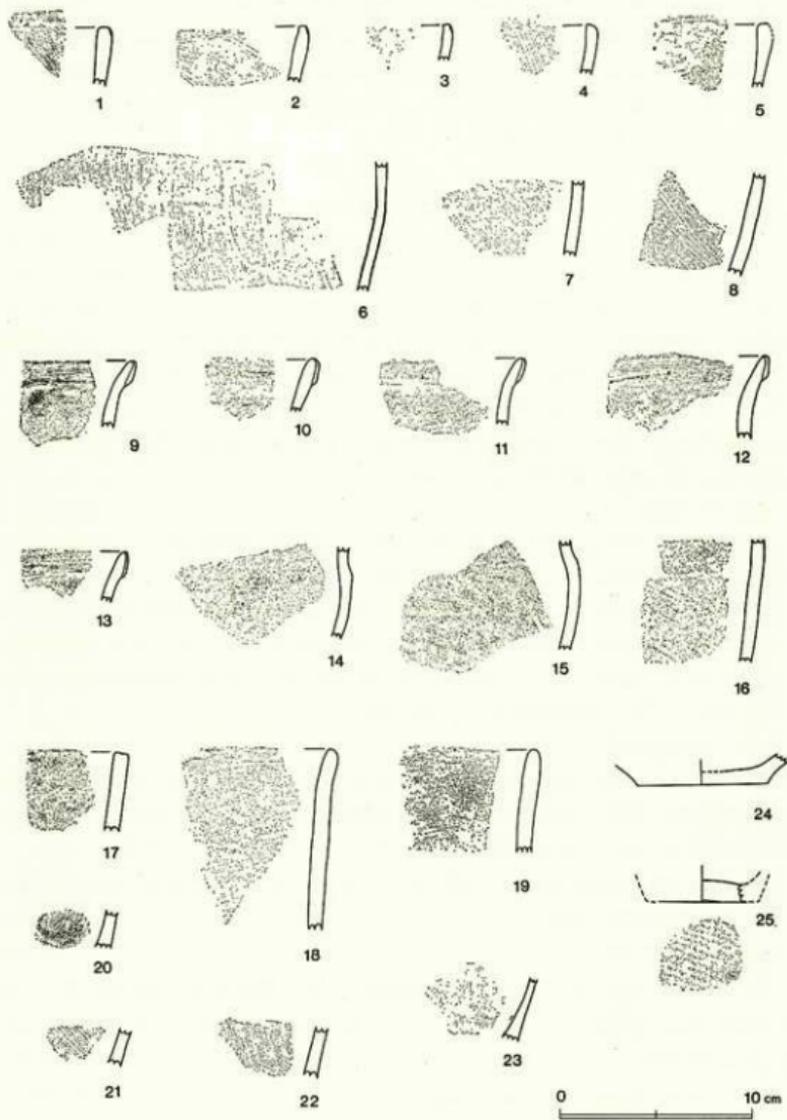
9の1片だけである。内外面とも黒褐色を呈し胎土中に砂粒を含んでいる。浅鉢であろう。口縁部外面に沈線を巡らしており、1本目は幅も細く深くしっかりしているが、2本目は沈線というよりは浮線文を浮き出たす為の浅い削りである。

条痕文系土器 (第12図、図版34)

この土器群は、条痕文、条線文、刷目文、擦痕文等と様々に呼ばれているが、ここではとりあえず条痕文系として一括して扱った。接合前は92片、接合後は70片となった。精製の工字文系土器群に対して粗製土器として取り扱われる場合が多いが、本遺跡の場合一概にそうとは言えず、いくつかのタイプに分けられる。

Ⅴ類 (第12図1~8)

この類の土器片数が最も多く、接合後は40片を数える。色調は暗褐色から黒褐色を呈し、胎土中に砂粒を含むが焼成は良好で、堅緻であり、内面も研磨されている。若干口縁部が内湾する深鉢形の土器であり、40片の破片も色調の違いはあるが1~2個体に集約できるであろう。



第12図 グリッド出土縄文土器(6)

1～5は口縁部破片である。口辺には1cm間隔で指頭による圧痕があり、口唇部にも条痕が横位に施されている。指頭圧痕直下に横～斜の条痕がありその下に斜～縦に条痕文が見られる。施文順位は、胴部→口縁→口唇と下方から上へ進み、最後に指頭により圧痕を残している。条痕は細く深く明瞭に施されており、櫛状の施文具を用いたものと思われる。本類の土器は、焼成や緻密さの点ではI～N類の土器群と比して何ら遜色はなく、むしろI類よりも精製のと言える。内面の研磨を見る限りでは精製土器そのものである。

Ⅳ類 (第12図9～16)

19片(接合後)が出土しており、うち5片が口縁部である。色調は灰白色を呈し、胎土中に砂粒を含む。焼成はそれほど良好ではない。複合口縁ないし、これに近い口縁部を持つ深鉢形土器、あるいは広口の壺形土器であろう。平縁の口縁部は外反し、直立する無文の頸部から肩部は若干張って条痕が施されている胴部に至る。口縁部は断面を見ると折り返しではなく、最初の口縁に粘土を帯状に回して両端を撫でつけたものである。その口縁部に条痕文を横位に施文している。頸部の無文帯はかなり幅が広く、丁寧ではないが研磨をしており胴部に比べてかなり薄く仕上がっている。胴部の条痕文は横位あるいは右下りの斜方向であるが、Ⅴ類程には明瞭ではなくやや雑な作りである。本類の土器もⅤ類よりはるその精製の度合いに差があるが、緻密な意味での粗製とは言えず、晩期前半頃の精製と粗製土器程の差は見られない。

Ⅴ類 (第12図17～19)

本類は8片(接合後)が出土し、うち3片が口縁部である。色調は黄褐色を呈し、胎土中に多くの砂粒と径1mm程の小石を含んでいる。焼成や整形も悪く器面は荒れてザラついて、小石が表面に点在している。厚手の土器である。平縁の深鉢形土器で、胴部から口縁部は直線的に立ち上がっている。18・19の口唇部は丸味を帯びているが、17は直線的で中央部が若干窪んでいる。外面は条痕と言うよりもむしろ擦痕ともいうべきもので、荒く雑で左下りである。内面は外面の粗雑さに比べて荒れてはいないが、それも口縁に近い部分だけである。

Ⅵ類 (第12図20～23)

上記のいずれの類にも属さないものを本類としたが、図示した4片のみである。いずれも条痕系のものであるが、あるいは縄文時代晩期終末の土器ではないものもあるかもしれない。いずれも褐色系の色調を呈し、胎土中に砂粒あるいは小石を含んでいる。条痕は斜めから縦方向で、21は太く明瞭である。23は底部に近い部分で縦方向の条痕が見られる。20・22は条痕が弱いので明確ではないが、浅い沈線か太目の条痕が入っている。

底部 (第12図24・25)

出土した底部は図示した2片のみである。24は黄褐色を呈し、胎土中に砂粒を含んでいる。外面は底部から胴部への立ち上がりが明瞭で、くの字状を呈している。底径約7cmで平底である。25は表面は赤褐色で胎土中に砂粒を含んでいる。底径は6cm程で平底であり、網代痕を有する。色調・胎土からⅥ類の土器の底部である可能性が高い。

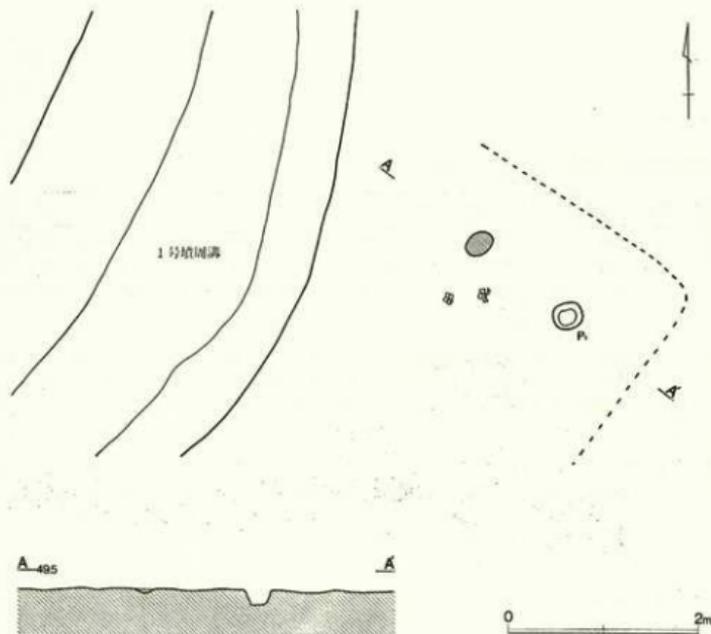
(井上尚明)

(3) 弥生時代の遺構と出土遺物

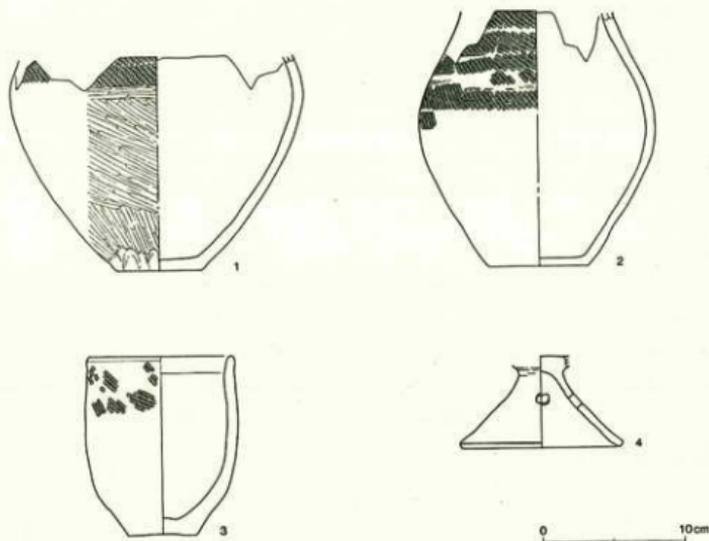
屋田遺跡からは、五領期の住居跡群に混在して第14・15・21・22号の4軒の弥生時代後期吉ヶ谷期の住居跡が検出されている。第22号住居跡を除く3軒は、遺跡の北辺部沖積地を臨む台地縁部に近在している。第14・22号住居跡は、民家や古墳などに破壊されて保存状態は不良であるが、第15号住居跡は、古墳の墳丘内にあるにもかかわらず保存状態が非常に良く、良好な資料が出土している。第22号住居跡は、3軒とは直線距離で約300m南の台地奥部より検出されている。

第14号住居跡 (第13図)

D-3グリッドに位置している。台地肩部から斜面部にかけて築造されている第1号墳の周溝外側から検出されている。保存状態が非常に悪く、床面の一部と柱穴1本及び炉跡が確認されたのみであり、規模や主軸方向は全く不明である。炉跡の周辺に残る床面は、凹凸が目立つが、固くしまっている。炉跡は長径30cmの楕円形を呈する地床炉で、厚さ10cmの焼土が認められた。柱穴は炉跡の東側1.2mに存在し、直径35cm、深さ18cmの不整形形を呈している。甕などの4点の遺物が、炉跡周辺の床面上より出土している。



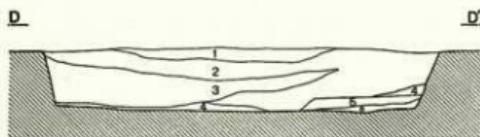
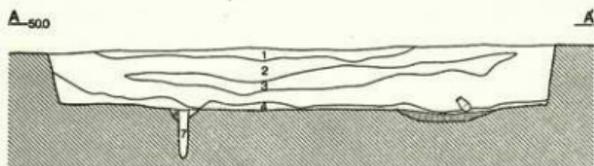
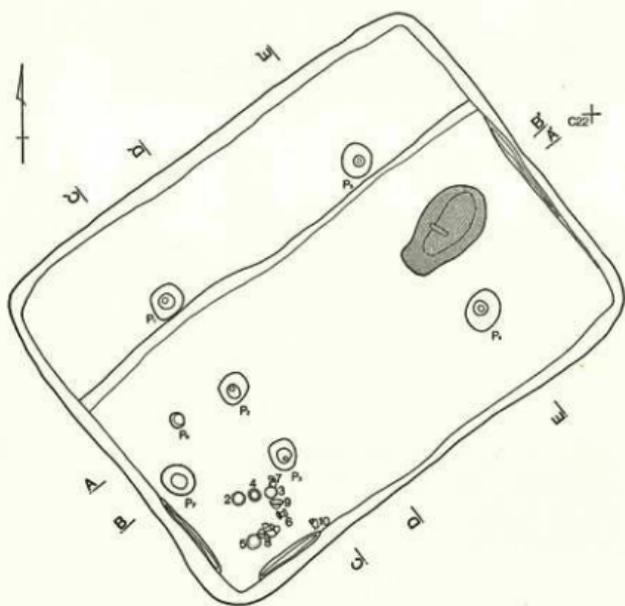
第13図 第14号住居跡



第14図 第14号住居跡出土遺物

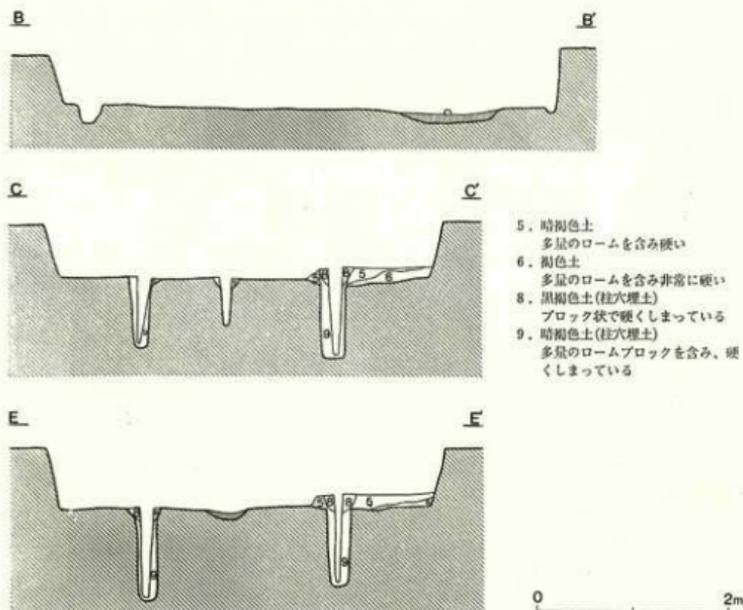
第14号住居跡出土遺物 (第14図、図版35)

器種	番号	大きさ (cm)	形態の特徴	外面整形	内面整形	備考
甕	1	胴径 20.8 底径 6.0 残高 15.3	胴中で大きく膨らむ大形甕。	胴上半捻細 RL の単節縄文横位施文。下半刷毛後横・斜・縦磨き丁寧平滑。底指頭圧痕。	荒れ激しく不明瞭、斜位の刷毛平滑。細砂粒多量、焼成良好。茶褐色。	床面 40%
甕	2	胴径 16.8 底径 7.0 残高 18.4	胴中位最大径。器厚均一。	胴上半刷毛後 RL の単節縄文粗く横位施文、輪痕痕残す。下半荒れ激しい、刷毛後縦磨き。	刷毛後底部・口縁への磨き丁寧平滑。細砂粒多量、焼成不良。濃茶褐色。	炉近 床直 35%
甕	3	口径 10.4 胴径 10.8 底径 4.9 器高 12.8	胴が直立する小形甕。口縁やや肥厚外傾。器厚胴均一、底厚い。	全体荒れ激しい。胴上半捻太 RL の単節縄文粗く横位施文。下半刷毛後磨き。底部やや上げ底。	横・斜位の磨き丁寧平滑。細砂粒多量、焼成良好。濃茶褐色一部黒色。	炉近 床直 40%
器台脚	4	接合径 3.2 底径 11.7 残高 6.5	緩くハ状に開く端部角張る。円孔4ヶ所。	全体荒れ激しい。接合部横ナゲ脚端部への斜位磨き丁寧平滑。	粗い磨き。細砂粒多量、焼成良好。茶褐色。	床直 25%



- | | |
|--|---|
| <p>1. 黒色土
砂質が強く軟らかい</p> <p>2. 茶褐色土
砂粒・ロームを多量に含む</p> <p>3. 黄褐色土
多量のロームブロックを含み硬い</p> <p>4. 黒色土
焼土・炭化物を多量に含み弱い粘性をもつ</p> | <p>5. 暗褐色土
多量のロームを含み硬い</p> <p>6. 褐色土
多量のロームを含み非常に硬い</p> <p>7. 黒色土(柱痕)
多量の炭化物を含み軟らかい</p> <p>8. 黒褐色土(柱穴埋土)
ブロック状で硬くしまっている</p> |
|--|---|

第15図 第15号住居跡(1)

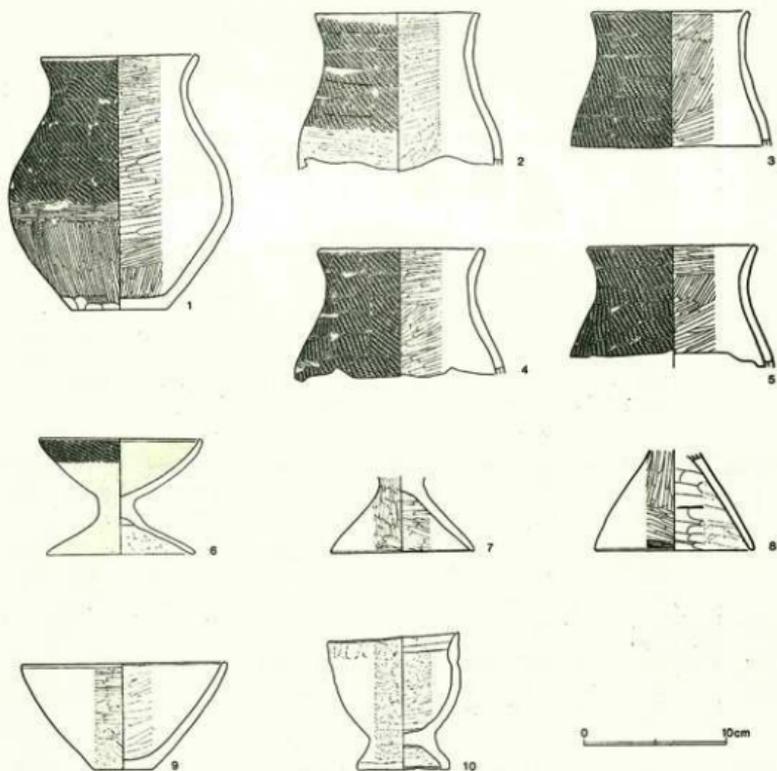


第16図 第15号住居跡2)

第15号住居跡(第15・16図、図版6～8)

台地斜面部から肩部にかけて築造された第9号墳々丘内中央から検出され、第21号住居跡と近接している。C-22グリッドに位置している。墳丘盛土に保護されていたためか、攪乱も受けず保存状態の非常に良好な住居跡である。規模は5.39×4.17mの長方形プランを呈し、N-40°-Eを主軸方向としている。確認面から床面まで55cmと掘り込みも深い。覆土は茶褐色土、黄褐色土、黒色土がレンズ状に堆積していた。壁は北壁のみやや緩く立ち上がるが、他壁は垂直に近く立ち上がる。床面は軟弱な部分が少しも無く、調査時に移植ゴテが刺さらない程堅く踏みしめられ、凹凸も無く水平である。また、北壁側には主軸方向に並行して、床面積の約 $\frac{1}{3}$ を占める幅1.2m、高さ15cmのベッド状遺構が検出されている。ベッド状遺構は、床面上に暗褐色土、褐色土を盛り上げて床面同様に堅く踏み固められ、上面は水平である。南コーナーを挟み西及び南壁と炉跡外側の東壁の一部に幅12cm、深さ6cmの浅い壁構が掘り込まれている。柱穴は床面上に3本、ベッド状遺構上に2本の主柱穴と西壁際に2本が検出された。P₁~P₃の主柱穴は、径35cm、深さ1mの掘り方をもち、堅くしまった暗褐色土を覆土とし、いずれも径15cm、深さ95cmと非常に深い柱痕が認められた。炉跡は主柱穴P₄・P₅間に存在し、1.1×0.6mの不整形円形を呈する地床炉である。中央に枕石が据え置かれ、厚さ10cm程ロームが焼土化していた。

遺物は南コーナーの床面上から据え置かれた状態で壘上半部4個体、高坏、鉢、台付鉢が出土し、炉跡内からも完形の甕が横倒しの状態で出土している。



第17図 第15号住居跡出土遺物

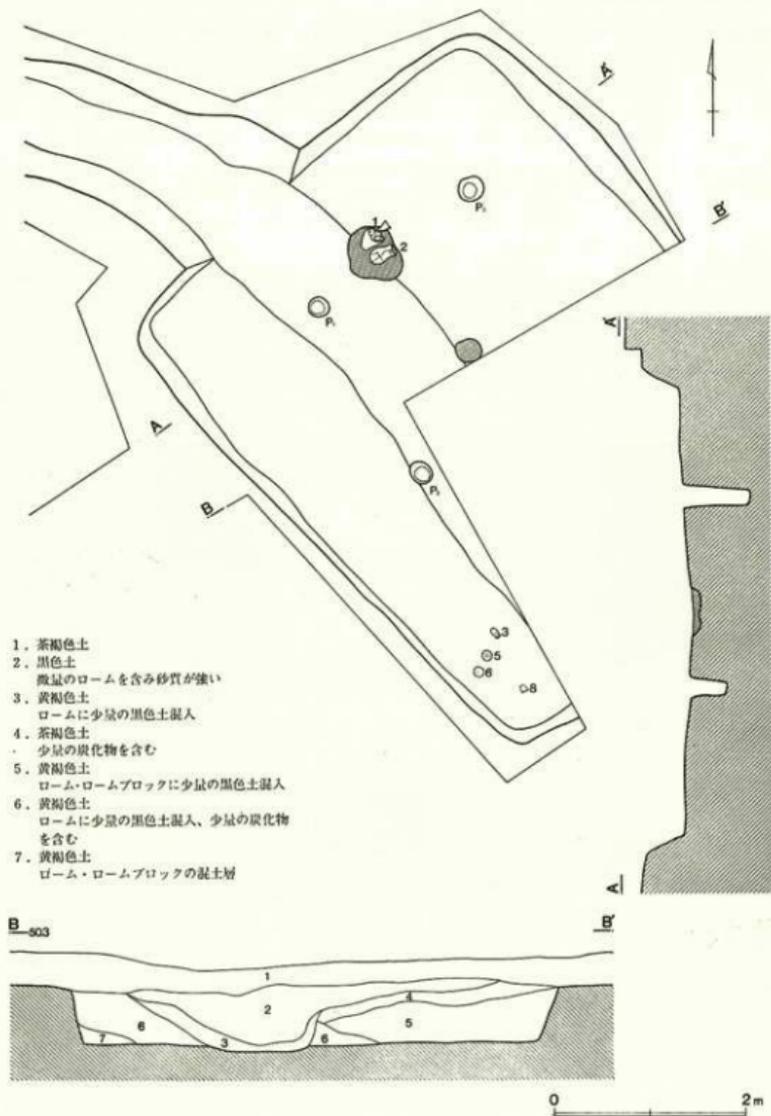
第15号住居跡出土遺物 (第17図、図版36)

器種	番号	大きさ (cm)	形態の特徴	外面整形	内面整形	備考	
甕	1	口径	11.2	頸部緩く括れる。口縁やや外傾。胴中位最大径。器厚上半薄い。	胴上半刷毛後撚細 RL の単節縄文横位施文。下半刷毛後横・縦位の寛磨き丁寧平滑。底粗い篋削り。口唇縄文施文。	刷毛後横・縦位の寛磨き丁寧平滑。きめ細かく、焼成良好。茶褐色。	炉跡内 完形
		胴径	15.9				
		底径	6.7				
		器高	18.3				
甕	2	口径	11.7	胴上半刷毛後撚細 RL の単節縄文粗く横位施文、輪痕残す。下半横位寛磨き。口唇縄文施文。	刷毛後横・斜位寛磨き丁寧平滑。砂粒多量、焼成良好。赤褐色。	床直 50%	
		胴径	14.5				
		残高	11.4				

器種	番号	大きさ (cm)	形態の特徴	外面整形	内面整形	備考
甕	3	口径 11.4 胴径 14.2 残高 9.8	頸部直立。口縁僅かに外傾。器厚均一。	撚細 RL の単節縄文密に横位施文。口唇縄文施文。	斜・横位寛磨き丁寧平滑。きめ細かく、焼成良好。赤褐色。	床直 50%
甕	4	口径 11.8 胴径 15.0 残高 9.6	頸部緩く括れる。口縁やや外傾。頸部器厚薄い。	胴上半刷毛後撚細 RL の単節縄文横位施文。口唇縄文施文。	刷毛後横・斜位の寛磨き丁寧平滑。きめ細かく、焼成良好。赤褐色。	床直 50%
甕	5	口径 12.1 胴径 14.5 残高 8.8	頸部緩く括れる。口縁やや外傾。	刷毛後撚細 RL の単節縄文横位施文。口唇縄文施文。	刷毛後横・斜位の寛磨き丁寧平滑。きめ細かく、焼成良好。黒褐色。	床直 50%
高杯	6	口径 11.6 接合径 2.5 脚径 10.6 器高 8.3	杯内外面、脚接合部外赤彩。杯内孤状に開く。脚低いハ字状。	杯上半撚細 RL の単節縄文横位一列施文。下半寛磨き丁寧平滑。接合・脚寛磨き丁寧平滑。口唇縄文施文。	杯斜位寛磨き丁寧平滑。脚縁削り凹凸目立つ。小石・砂粒多量、焼成良好。赤色。	床直 完形
高杯脚	7	接合径 3.1 底径 10.0 残高 5.4	ハ字状に緩く開く。端部丸味。	縦・横位の寛磨き丁寧平滑。	横位寛磨きやや凹凸目立つ。細砂粒多量、焼成良好。赤褐色。	床直 50%
高杯脚	8	接合径 3.6 底径 11.4 残高 7.2	ハ字状に緩く開く。端部角。器厚均一。	刷毛後縦・斜・横位寛磨き丁寧平滑。	粗い横位縁削り、輪積痕残す。細砂粒多量、焼成良好。赤褐色。	床直 50%
鉢	9	口径 14.7 底径 4.0 器高 7.7	底小さく胴縁く孤状に開く。器厚均一。	横・斜位の寛磨き丁寧平滑。口唇ナデ。底寛磨き。	斜位の寛磨き丁寧平滑。砂粒多量、焼成良好堅凹凸目立つ。茶褐色。	底直 完形
台付鉢	10	口径 9.3 接合径 4.7 脚径 6.6 器高 9.6	手捏ね状やや歪む。鉢深く脚低い。胴球状、口縁肥厚やや外傾。	鉢口縁指押え後横位寛磨き。胴横・斜位の寛磨き丁寧平滑。接合縦位、脚横位の寛磨き丁寧平滑。	鉢横位寛磨き丁寧平滑。脚横位寛磨きやや凹凸目立つ。砂粒多量、焼成良好。濃茶褐色。	床直 完形

第21号住居跡 (第18図)

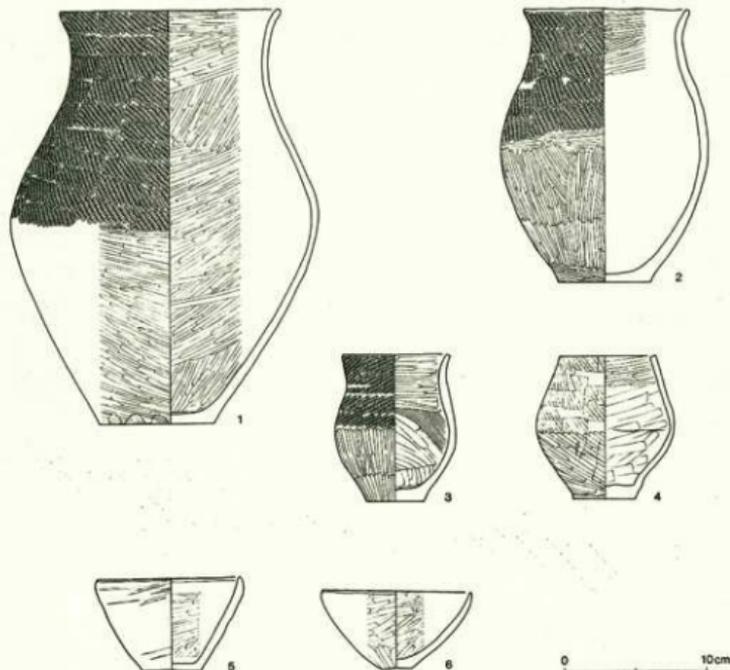
C-16グリッドに位置し、調査区外のため $\frac{1}{2}$ 程度未調査である。第15号住居跡の東5mに近接し住居跡中央を第9号墳の周溝に床面下まで切られている。6.18×5.21mの長方形を呈するものと思われる大形住居跡である。主軸方向はN-42°-Wで第15号住居跡と直交している。確認面から床面まで60cmと深く、壁は垂直に近く立ち上がる。床面は凹凸も無く良く踏み固められている。柱穴は、径25cm、深さ50~70cmの柱穴が3本検出されている。炉跡は北壁側のP₁・P₂間に存在し、長径面から不整形円形の地床炉である。遺物は炉跡内から倒れた状態の甕2点と無頸壺、南コーナー床70cmの小形壺と鉢2点が出土し、覆土中からは皆無であった。



第18図 第21号住居跡

第21号住居跡出土遺物 (第19図、図版35)

器種	番号	大きさ (cm)	形態の特徴	外面整形	内面整形	備考
甕	1	口径 15.8 胴径 22.0 底径 8.2 器高 29.8	胴中位最大径。頸部緩く括れ。口縁緩く外傾。	胴上半刷毛後撻細LRの単節縄文横位密施文。下半刷毛後斜位篋磨き丁寧平滑。口唇縄文施文。底磨削。	刷毛後横・斜位の篋磨き丁寧平滑。底部炭化物付着。小石・砂粒多量、焼成良好。茶褐色。	床直 完形
甕	2	口径 11.8 胴径 14.8 底径 6.5 器高 19.7	頸部緩く括れる。口縁緩く外傾。胴中位最大径。	胴上半刷毛後撻細LRの単節縄文横位粗施文。下半横・斜位の篋磨き丁寧平滑。口唇縄文施文。	荒れ激しく不明瞭。横・斜位の篋磨き。砂粒多量、焼成良好。上半茶褐色、下半黒色。	床直 完形
小形甕	3	口径 7.6 胴径 8.6 底径 4.0 器高 10.6	頸部緩く括れる。口縁僅かに外傾。胴中位最大径。	胴上半刷毛後LRの単節縄文横位粗施文。輪積痕残る。下半縦位篋磨き丁寧平滑。口唇縄文施文。	斜位刷毛後横・斜位の篋磨き丁寧平滑。砂粒少量、焼成良好堅緻。黒褐色。	床直 完形

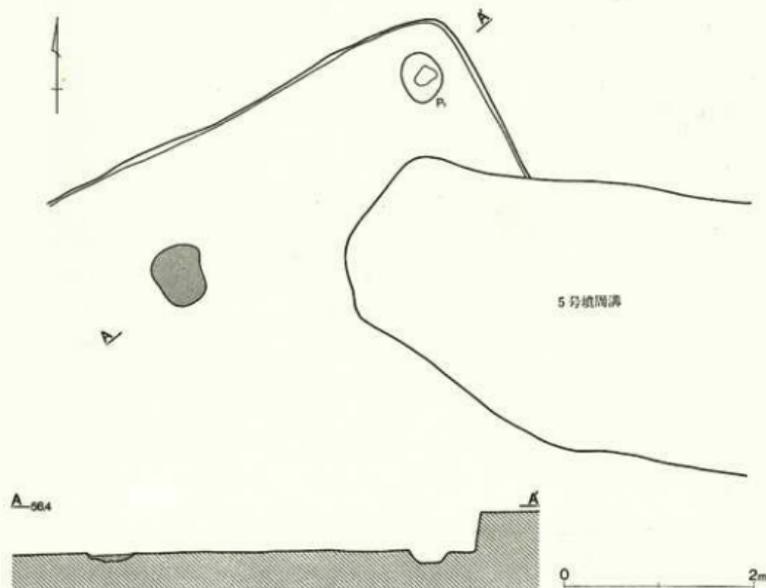


第19図 第21号住居跡出土遺物

器種	番号	大きさ (cm)	形態の特徴	外面整形	内面整形	備考	
無類壺	4	口径	9.8	胴中位最大径。口縁内傾。口唇角無施文。底部厚い。	胴上半 Rf の無節縄文横位粗施文。下半胴毛後斜位の寛磨き丁寧平滑。底部粗い。寛削り。	胴上半横位の寛磨き。下半粗い横位の寛削り。中に輪横凹凸縦線残す。砂粒多量、焼成良好。堅緻。茶褐色、一部黒色。	床直 完形
		胴径	9.8				
		底径	4.5				
		器高	10.2				
鉢	5	口径	10.6	胴直線的に開き口縁直立。僅かに上底。	胴胴毛後斜位の寛磨き凹凸目立つ。口縁横ナゲ後一部寛磨き。底寛削り。	口縁横ナゲ、胴、底斜・横位の寛磨き丁寧平滑。砂粒多量、焼成良好。黒色、一部茶褐色。	床直 完形
		底径	4.2				
		器高	6.6				
鉢	6	口径	10.2	胴弧状に緩く開く。底僅かに上底。器厚均一。	口縁横ナゲ。胴斜・縦位の寛磨き丁寧平滑。底寛削り。	横・斜位の寛磨き丁寧平滑。砂粒少量、焼成良好。堅緻。茶褐色。	床直 完形
		底径	2.2				
		器高	5.5				

第22号住居跡 (第20図)

第5号墳石室前庭部に存在し、T-23グリッドに位置する。古墳築造時に大半が破壊され、北・東壁の一部、炉跡及び1本の柱穴が検出された。規模やプランは不明である。最も良く残る東壁で深さ45cmを測り、垂直に立ち上がる。床面は水平で堅く、柱穴は15cmと浅い。北壁際に径0.6mの不整形円形の地床炉が存在する。炉跡周辺の床面より甕の細片が数点出土している。(今井 宏)



第20図 第22号住居跡

(4) 古墳時代の遺構と出土遺物

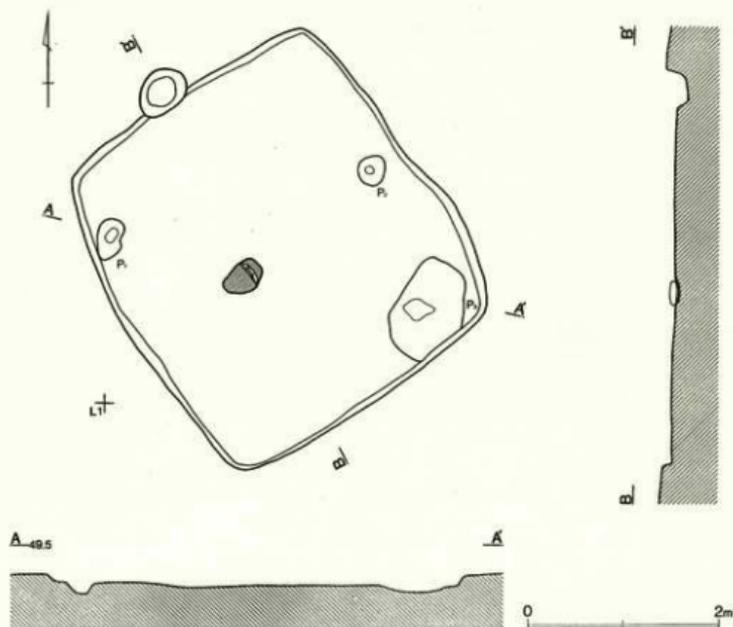
屋田遺跡の主体をなす古墳時代の遺構としては、18軒の住居跡と9基の古墳が調査されている。

a 住居跡

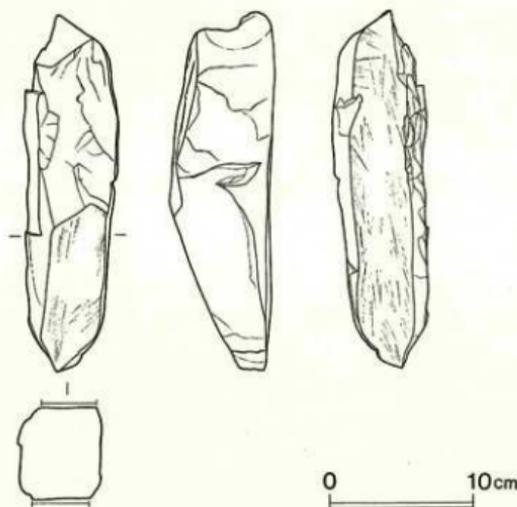
古墳群と重複し、台地肩部から平坦面にかけて五領期16軒、和泉期2軒の住居跡が検出された。

第1号住居跡（第21図、図版1）

住居跡群の最奥に存在し、G-25・K-21グリッドに位置している。住居跡群の南端を占めるものと思われる。3.9×3.5mの小形でやや不整な正方形を呈する住居跡である。N-33°-Wを主軸方向としている。確認面から床面まで10cmと浅く、北壁中央には攪乱も認められ、保存状態の不良な住居跡である。壁は緩く立ち上がり、2本の柱穴は、いずれも浅い。東コーナーには、浅い皿状の貯蔵穴が検出された。楕円形の地床炉が住居跡中央に存在し、砥石を利用した枕石が据え置かれていた。遺物は、五領期の麩細片が覆土中より出土している。



第21図 第1号住居跡



第22図 第1号住居跡出土遺物

砥石 (第22図)

断面方形、平面は上下の尖った方形を呈する碌で、最大値は縦25.1cm、横6.6cm、厚さ6.4cm、重さ1270gを測る。

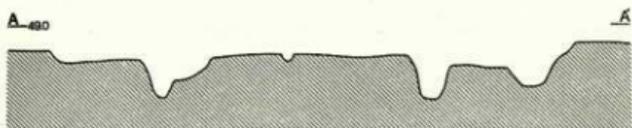
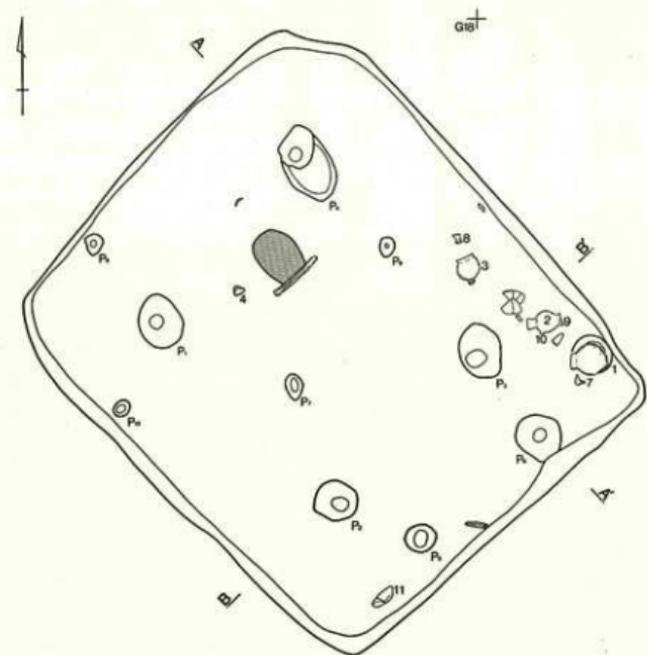
砥ぎ面には2面が使用されている。そのうちの1面は断面山形をなし、片側の傾斜面だけが使用されている。細かな溝状擦痕が数条走る。他の1面は全面がよく使用されており、溝状擦痕が多数走っている。石質は凝灰質シルトである。

第2号住居跡 (第23図、図版2)

調査区中央の第3・12号住居跡間に単独で存在している。G-18グリッドに位置している。5.53×4.74m、北コーナーが丸味をおびる長方形を呈する住居跡である。主軸方向はN-45°-Wである。畑地に利用されていたため上部が失なわれ、確認面から床面まで10cmと浅い。覆土は炭火物を少量含む砂質の強い茶褐色土が堆積していた。壁は緩やかに立ち上がり、床面は軟弱で凹凸が目立つ。柱穴は径50~70cm、深さ50cmの主柱穴4本が対角線上に配置され掘り込まれている。P₃・P₄は入口部の柱穴と思われ、他に4本の小柱穴が視られる。炉跡はP₁・P₄間に存在し、長径55cmの楕円形を呈している。ルームが厚さ8cm程堅く焼けしまり、南端部には棒状自然礫が枕石に据え置かれていた。遺物は東コーナー寄りの東壁下床面上に集中して出土している。壺、台付甕2点、高杯2点、器台2点、鉢、手捏ねがみられ、壺と鉢は重なった状態で出土している。また南コーナーからは、砥石が出土している。

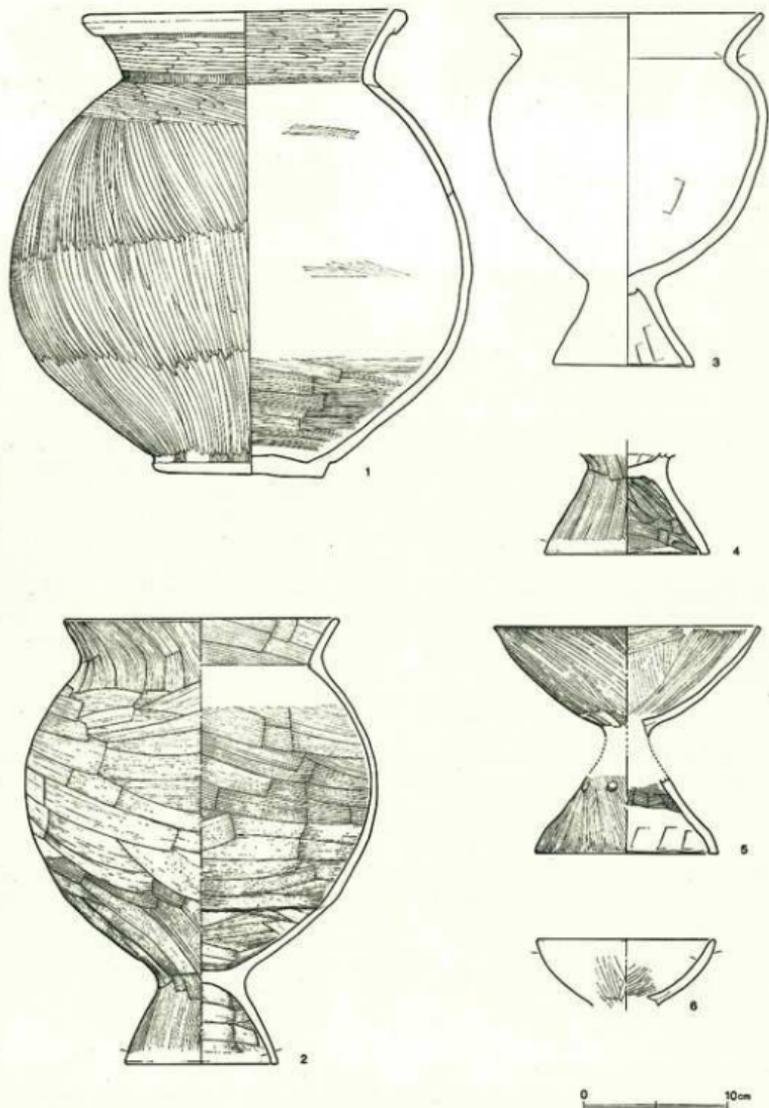
第2号住居跡出土遺物 (第24・25図、図版37)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	口径 21.5 胴径 32.7 底径 11.8 器高 32.9		口縁部刷毛目の後笠磨き。胴部外面刷毛目の後笠磨き、内面刷毛目の後上・中位とナデ。赤褐色。A~E+細砂粒。焼成良好。胴部外面に黒斑。	口縁部・胴部70%、底部100%現存。底部に木葉

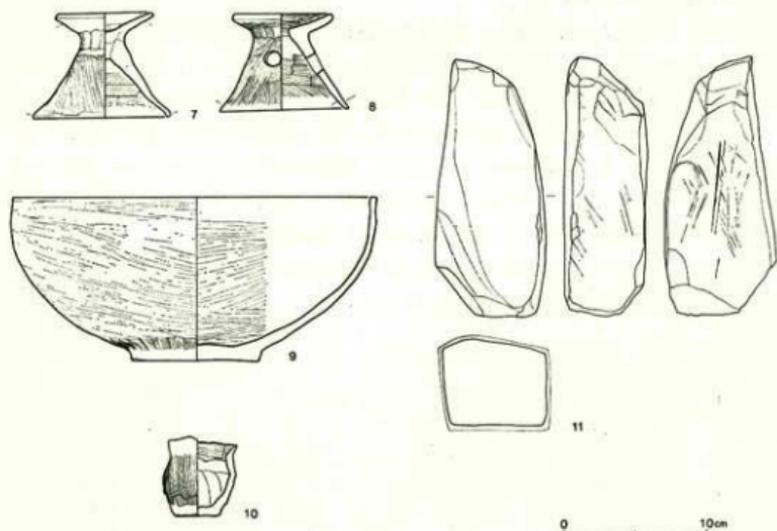


第23图 第2号住居跡

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
台付甕	2	口径(19.0) 胴径(24.8) 底径 10.5 器高 31.3		口縁部内外面刷毛目。胴部外面刷毛目、内面刷毛目、上端のみ後にナデ。脚台部内外面刷毛目の後端部周辺横ナデ。 茶褐色(褐色)。A~E+細砂粒。胴部外面に煤付着。脚台部には煤の付着は観察されない。焼成良好。	痕あり。 口縁部10% 胴部40%、 脚台部100% 現存。
台付甕	3	口径 18.6 胴径 19.6 底径 9.9 器高 24.9	胴部最大径を胴部上位にもち、肩が張る。	口縁部横ナデ。胴部内外面ナデ。脚台部外面ナデ、内面上半ナデ、下半木口状工具によるナデ。 褐色。A~D+F+細砂粒。焼成普通。	口縁部60% 胴部70%、 底部90% 現存。
台付甕	4	底径 11.5 現存高 7.1	脚台部が僅かに内彎している。	脚台部内外面刷毛目。底部内面指ナデ、外面ナデの後周辺部のみ刷毛目。脚端部周辺横ナデ。 淡褐色(赤褐色)。A~D+F+細砂粒。焼成良好。	脚台部100% 現存。
高 杯	5	口径(18.5) 底径(12.9) 器高(15.9)	口縁部、脚端部とも平坦に仕上げている。孔は3孔確認できるが配置から3孔以上存在するものと思われる。	口縁部外面刷毛目の後底磨き、内面底磨き。脚部外面刷毛目の後底磨き、内面上半刷毛目、下半木口状工具によるナデ。 橙褐色。A~D+F+細砂粒。焼成良好。	口縁部30% 脚部70% 現存。
高 杯	6	口径(12.4)		口縁部内外面とも横ナデの後底磨きか。 橙褐色。A~D+細砂粒。焼成良好。	口縁部30% 現存。 南土墳
器 台	7	受部径(6.6) 底径 (9.5) 器高 7.4	受部先端を平坦に仕上げようとしている。脚端部近くで小さく内彎する。	受部先端周辺横ナデ。受部と脚部の接合部分是指ナデか。脚部外面目の細かい刷毛目の後粗い底磨き、端部周辺は横位の底磨き、内面刷毛目。脚端部と内面縁辺は横ナデ。 黄褐色。A~E+細砂粒。焼成良好。	器受部・脚部40% 現存。
器 台	8	受部径 6.8 底径 9.1 器高 6.9	受部先端を丸くおさめる。脚端部は平坦である。脚部に三孔穿つが孔の配置は不均等で、均等	受部内外面横位の底磨き。脚部外面刷毛目の後斜位の底磨き、内面刷毛目。脚端部弱い横ナ	受部100%、 脚部80% 現存。



第24图 第2号住居跡出土遺物(1)



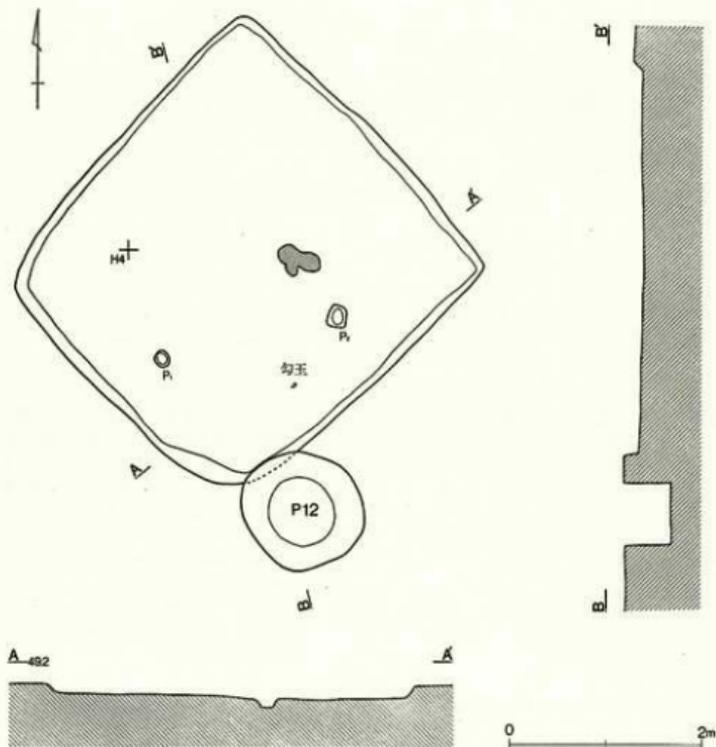
第25図 第2号住居跡出土遺物(2)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
鉢	9	口径 25.8 底径 9.1 器高 11.6	な4孔のうち1孔が欠けている。 口縁端部平坦に仕上げている。	デ。橙褐色。A~E+細砂粒。 焼成良好。 口縁部外面荒磨き、内面ナデ。 胴部内外面荒磨き、下端に刷毛目を残す。底部ナデ。 赤褐色。A~D+F+細砂粒。 焼成良好。胴部内外面に黒斑。	口縁部 70% 胴部 80% 底部 100%現存。
手捏ね	10	口径 4.8 胴径 5.1 底径 3.2 器高 5.6		口縁部外面刷毛目の後ナデ、内面刷毛目。胴部外面刷毛目、下端のみナデ、内面指ナデ。底部指ナデ。淡褐色。A~D+細砂粒。焼成良好。	完存。
砥石	11	18.2 × 7.8 1060 g	断面は方形を呈する、長形の礫である。四面すべてが砥ぎ面として使用されている。そのうちの2面には数条の溝状の擦痕が明瞭に残る。	凝灰質シルト	

第3号住居跡 (第26図、図版3)

G-23・24 グリッドに位置している。第7号墳の南側、第4号住居跡東側5mに近接して検出されている。南壁の南コーナー近くが近世の樽埋設遺構によって切られている。3.95×3.7mのほぼ正方形を呈する住居跡で、主軸方向はN-45°-Eである。確認面から床面までの深さは12cmと浅く、保存状態の不良なものである。覆土は砂質の強い茶褐色と少量の炭化物を含む弱い粘性をもつ黄褐色土が堆積していた。壁は緩やかに立ち上がり、床面は踏み固められていないが、凹凸も無く水平である。検出された2本の柱穴は、いずれも細く浅いものである。P₁に近接して長径55cmの不整形円形を呈する地床炉が存在しているが、焼土が厚さ2cmと薄いものである。

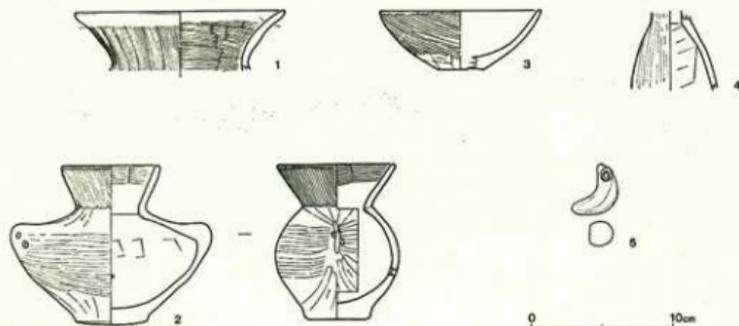
遺物は床面より僅かに浮いた状態で、類例のあまり知られない特殊な両耳壺を含め、壺、甕、高坏、また床面直上より土製の勾玉が出土している。



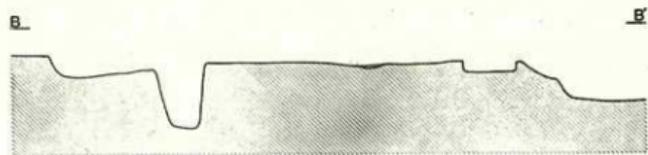
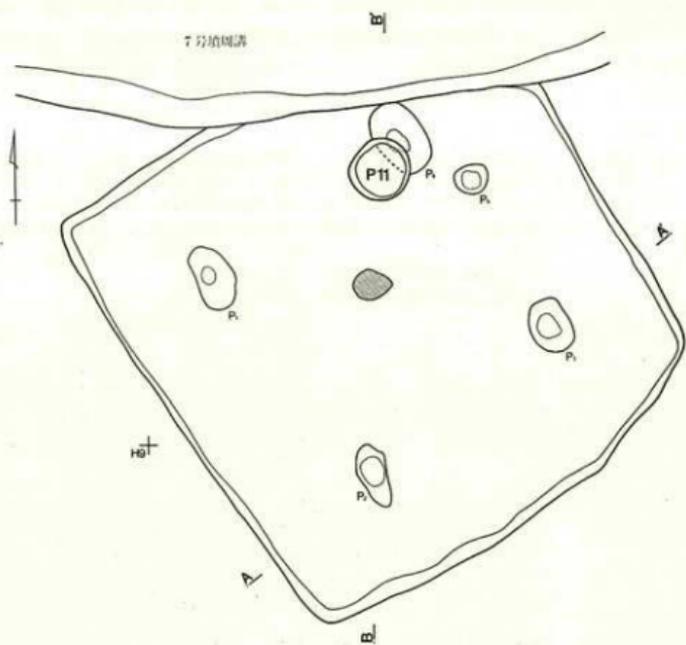
第26図 第3号住居跡

第3号住居跡出土遺物 (第27図、図版38)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	口径(15.0)	大きく外反する口縁部である。口唇部は丸く尖る。	口唇部内外面とも刷毛調整後横ナデ。口唇部以下は縦位刷毛目、内面横位刷毛目。 茶褐色。A~D。焼成良好。	口縁部25%現存。
壺	2	口径 7.0 胴径 4.3 底径 5.1 器高 11.4	口縁部はほぼ直線的に広がり、肩部が緩やかになり胴部上半の左右に耳を作り出す。耳部には未貫通の孔(焼成前)が2箇所ある。 また、胴部下半内面にも相対する位置に2箇所未貫通孔がある。	口縁部外面刷毛調整後、斜位の筥磨き、内面刷毛調整後雑な筥磨き。肩部外面縦位ナデ。胴部中位横位に丁寧な筥磨き、下半縦位ナデ、内面は雑なナデで木口状工具痕を残す。 淡橙褐色(暗赤褐色)。モンモリロナイト+石英+斜長石。焼成良好。	口縁部50%、胴部70%現存。 胎土分析試料。
鉢	3	口径(11.5)	体部から口縁部にかけて、若干内彎しながら大きく開く。口唇部は丸く尖る。	口唇部から体部中位にかけて、斜位に雑な筥磨き、体部下半は筥磨りの後ナデ。 暗橙褐色。A~D。焼成良好。	口縁部25%現存。
高杯	4	現存高 5.5	高杯の脚部と思われるが著しく扁平に変形する。接合部が小さく折れ、やや脹らみをもちながら広がる。	横位ナデおよび一部縦位筥磨りの後、縦位に丁寧な筥磨き。内面木口状工具によるナデ、一部に絞り痕を残す。黄茶褐色。A~D+細砂粒。焼成良好。	脚部70%現存。
土製勾玉	5	3.6×1.6 20g	粘土紐を成形した後、筥磨りで形を整えている。孔は焼成前穿孔。	茶褐色。焼成良好。	完存。



第27図 第3号住居跡出土遺物

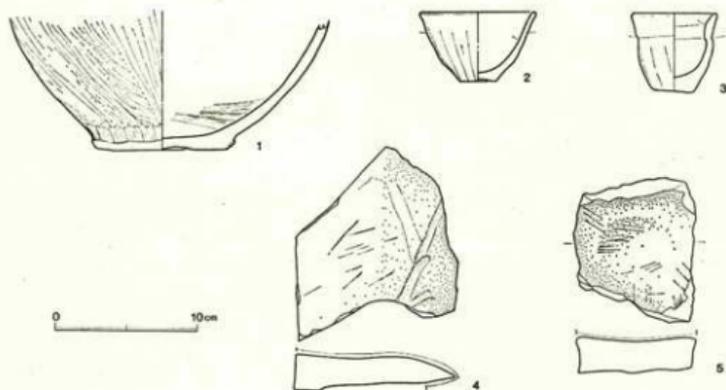


0 2m

第28图 第4号住居跡

第4号住居跡（第28図、図版3）

H-3・4グリッドに位置し、第3号住居跡の西側に存在している。第7号墳周溝に北壁の一部と北コーナーを切られている。N-35°-Wを主軸方向とし、5.47×5.22m規模の東コーナーが僅かに内曲する正方形を呈している。確認面から床面まで浅く10cmを測る程度であり、保存状態は不良である。壁は非常に緩く立ち上がる。床面は良く踏め固められているが、凹凸が激しく、南コーナー側へ緩く傾斜している。柱穴は長径50cm、深さ60cmの主柱穴4本と小柱穴1本が検出されている。P₄が埋設遺構11に切られているが、対角線上に配置され掘り込まれている。炉は住居跡中央のP₂・P₄を結ぶ線上に存在し、長径43cmの楕円形を呈する地床炉である。厚さ3cmのロームが堅く焼けしまっていた。針1点、手捏ね2点、砥石2点が東コーナー周辺の床面より僅かに浮いた状態で出土している。



第29図 第4号住居跡出土遺物

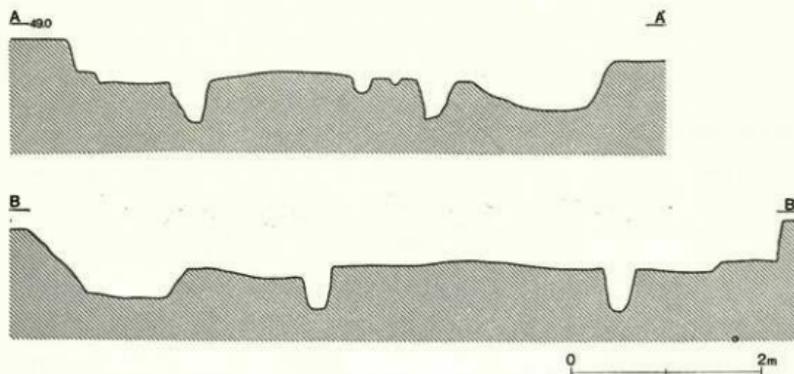
第4号住居跡出土遺物（第29図、図版38）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
鉢	1	底径 9.5 現存高 9.5	底部にドーナツ状に粘土を貼り付け、弱い上げ底を呈す。壺の可能性あり。	胴部外面刷毛目の後、荒磨き、内面刷毛目か。磨減が著しい。橙褐色。A~E+粗砂粒。焼成良好。	胴部60%、底部100%現存。
手捏ね	2	口径 (8.1) 底径 (2.6) 器高 (5.0)	上げ底を呈す。	口縁部横ナデ。体部外面木口状工具によるナデ、内面ナデ。底部ナデ。淡褐色。A~F+細砂粒。焼成良好。	口縁部 10%、体部40%、底部30%現存。

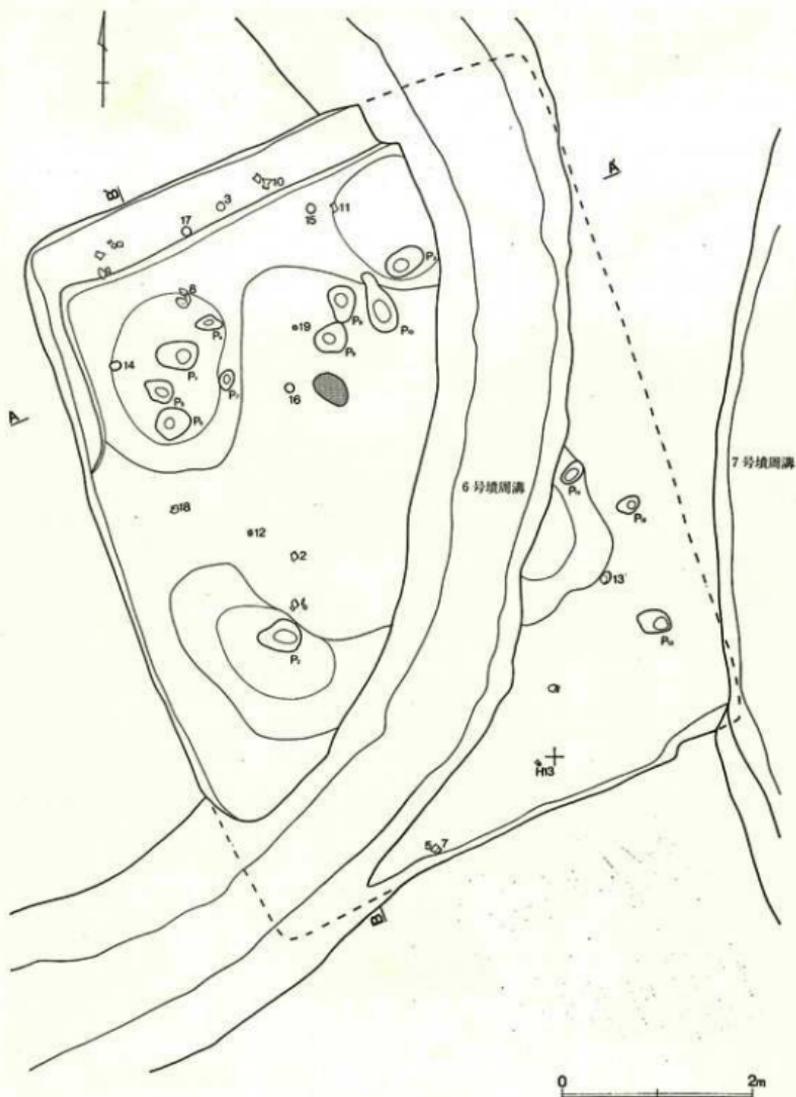
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
手捏ね	3	口径 5.7 底径 2.9 器高 5.9	粘土接合痕をそのまま残して口縁部と胴部の境目を作っている。	口縁部横ナデ。胴部外面上位ナデ、中・下位木口状工具によるナデ、内面ナデ。 茶褐色。A~F+粗砂粒。焼成良好。胴部外面に黒斑。	口縁部 90%、胴部・底部 100% 現存。
砥石	4	10.1×11.5 ×2.7 450g	断面は長方形であるが、短辺の一方が尖り、三角形をなす。砥ぎ面は、上面全面と、端部の磨り減った三角形を経て、下面の一部に及ぶ。上面の中央はやや窪み数条の溝状の擦痕が認められる。使用頻度は端部で著しい。	砂岩	
砥石	5	10.4×8.6 ×2.6 320g	断面は、長方形を呈する礫。砥ぎ面は一面で、中央部が窪む。数条の溝状の擦痕が残る。	砂岩	

第5号住居跡(第30・31図、図版4)

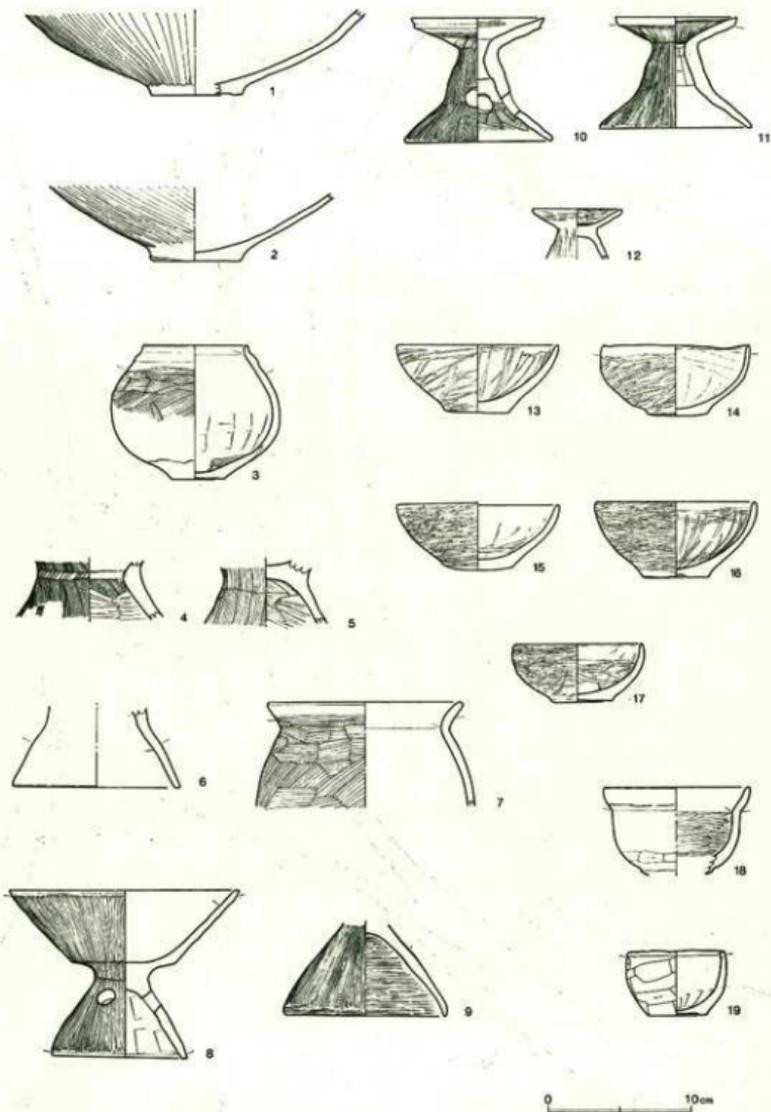
H-12グリッドに位置し、住居跡を半截するように北から南コーナーにかけて、第6号墳周溝に床面下まで切られている。推定7.85×5.8cmの長方形を呈し、主軸方向をN-21°-Wとする大形のものである。保存状態の良好な北壁で、確認面より床面まで55cmの深さをもつ。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面は軟弱で凹凸が目立つ。北壁から西壁の一部にかけて幅60cm、高さ10cmの作り出されたベッド状遺構が存在する。上面は良く踏み固められている。45cm前後の深さをもつ主柱穴3本と浅い小柱穴9本が検出され、小柱穴はP₁・P₃の周辺に集中している。P₂・P₃を結ぶ対角線中央



第30図 第5号住居跡(1)



第31图 第5号住居跡(2)



第32图 第5号住居跡出土遺物

第5号住居跡出土遺物(第32図、図版39)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	底径 6.5 現存高 6.0		胴部外面寛磨き、内面ナデ。底部寛削り。 淡褐色。A~F+細砂粒。焼成良好。内外面に黒斑。	胴部40%、 底部50%現存。
壺	2	底径(6.4) 現存高 5.2	平底を呈す。	胴部外面寛削りの後寛磨き、内面ナデ。底部ナデ。 黄褐色。A~F+細砂粒。焼成良好。内外面に黒斑。	胴部30%、 底部90%現存。
壺	3	口径 7.3 胴径 11.9 底径 3.7 器高 9.4	弱い上げ底か。	口縁部横ナデ。胴部外面刷毛目の後ナデ。内面上半ナデ、下半木口状工具によるナデ。底部外面ナデ、内面刷毛目。 淡褐色。A~F+細砂粒。焼成良好。胴部外面に黒斑。	完存。
台付甕	4	最小径 7.3 現存高 4.2		脚台部外面目の細かい刷毛目、内面目の細かい刷毛目の後、横位の寛磨き。 赤褐色。A~G+細砂粒。焼成良好。	脚部30%現存。
台付甕	5	最小径 5.9 現存高 4.4	接合部からはほぼ直線的に広がる。	外面縦位の刷毛目、脚部と甕部の接合部は刷毛調整の後、さらに粘土を貼り付け再度刷毛調整。内面は幅の狭い原体により放射状に刷毛目。 茶褐色。A~E+細砂粒。焼成良好。	脚部70%現存。
台付甕	6	脚部径11.9 現存高 5.6	やや彎曲しながら広がる脚部で、接合部で直立する。	外面上半斜位のナデ、下半は横位のナデ、内面横位のナデ、接合部に絞り痕を残す。 淡黄褐色(茶褐色)。A~D+細砂粒。焼成良好。	脚部40%現存。
台付甕	7	口径(13.8) 現存高 7.5	肩部に張りがなく、口縁部は外反しながら「く」の字状に開く。口唇部は丸い。	口縁部は横位刷毛調整後、横ナデ、内面は丁寧な横ナデ。肩部は横位刷毛目内面ナデ。胴部は斜位の刷毛目、内面ナデ。 赤褐色。A~G+細砂粒。焼成良好。	口縁部から 胴部25%現存。
高 杯	8	口径 16.2 底径 9.6 器高 11.9	口縁部、脚部とも平坦。杯部に稜をもつ。	口縁部周辺横ナデ。杯部外面寛磨き、内面ナデ。脚部外面寛磨き、内面木口状工具によるナ	杯部・脚部 90%現存。

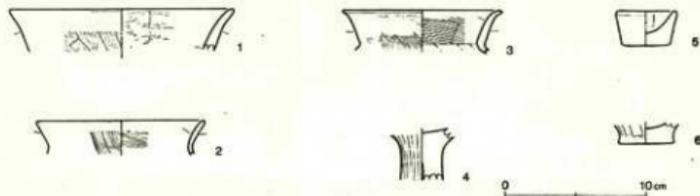
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
高坏	9	脚部径11.5 現存高 6.5	若干の脹らみを持ち広がる。端部は丸く尖る。	デ。 橙褐色。A~F+細砂粒。焼成良好。 外面は縦位に丁寧な寛磨き、端部は横位に寛磨き、内面は全体的に横位に寛磨き。 橙褐色。A~E+細砂粒。焼成良好。	脚部60%現存。
器台	10	受部径 9.3 底径 10.3 器高 9.7	脚部は僅かに内彎し、三孔を有す。	受部外面寛磨き、内面刷毛目の後ナデ(光沢がある)。脚部外面寛磨き、内面上半ナデ、下半刷毛目の後端部付近のみナデ。 茶褐色。A~F+細砂粒。焼成良好。	現存。
器台	11	受部径 8.5 底径 10.7 器高 7.8	受部先端が僅かに立ち上がる。脚端部は平坦。	受部内外面丁寧な寛磨き、先端のみ横ナデ。脚部外面丁寧な寛磨き、内面上半寛削り、下半ナデ。茶褐色。A~F+細砂粒。焼成良好。	現存。
器台	12	受部径(6.2) 現存高 3.5		受部外面寛磨きの密度粗、内面寛磨き密。脚部外面寛磨きの密度粗、内面ナデ。 黒褐色。A~E+細砂粒。焼成良好。	受部30%現存。
鉢	13	口径 11.3 底径 4.5 器高 4.8		口縁部・体部外面粗い寛磨き、内面も同様。底部寛削り。 黄褐色。モンモリロナイト+雲母+砂粒。焼成良好。口縁部外面から底部にかけて黒斑。	口縁部 80%、体部90%、底部100%現存。 胎土分析試料。
鉢	14	口径 10.3 底径 4.3 器高 5.0	平底を呈し、体部からそのまま開いて口縁部をなす。作りは粗い。	口縁部外面弱い横ナデ。口縁部内面、体部内外面粗い寛磨き。底部寛磨き。 黄褐色。A~E+細砂粒。焼成良好。体部外面に黒斑。	現存。
鉢	15	口径 11.4 底径 4.9 器高 4.8		口縁部・体部外面寛磨き、内面ナデの後部分的に寛磨きか。底部ナデ。 黄褐色。A~E+細砂粒。焼成良好。口縁部に黒斑。	現存。
鉢	16	口径 11.1	上げ底を呈す。	口縁部・体部外面寛磨き、内面	現存。

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
鉢	17	底径 4.6 器高 5.3	僅かに上げ底気味。	も同様。底部外辺削り。中央窪みナデ。 淡赤褐色。A~E+細砂粒。焼成良好。	完存。
		口径 9.0 底径 4.2 器高 5.1			
鉢	18	口径 10.4 胴径 8.8 現存高 6.0	胴下半は丸味をもち、上半は垂直に立ち上る。口縁部は内彎しやや外傾し受け口状になる。口唇部は丸く尖る。	口縁部内外面横ナデ。胴部上半横位・縦位ナデ、下半横位のナデツケ、内面は全体に横位荒磨き。 黄茶褐色。A~E+細砂粒。焼成良好。	口縁部から胴部40%現存。
手捏ね	19	口径 6.7 底径 4.1 器高 4.6	口縁端部平坦に仕上げる。上げ底を呈す。	口縁端部横ナデ。体部外面荒削り、内面上半横ナデ、下半木口状工具によるナデ。底部ナデ。 黄褐色。A~F+細砂粒。焼成良好。	完存。

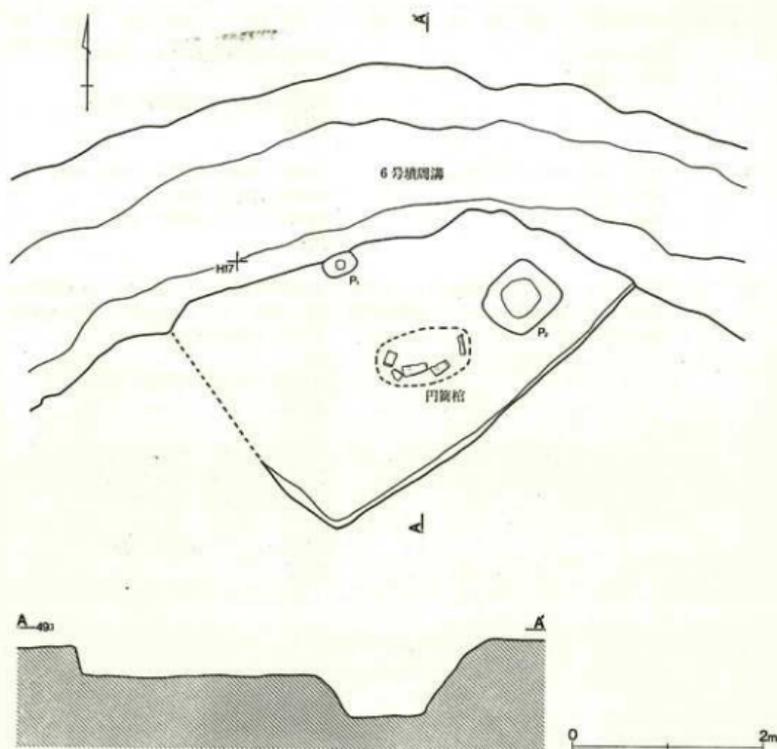
より僅かに北側にずれて、長径40cmの楕円形地床が存在する。ロームが7cmの厚さに堅く焼けしまっている。遺物は床面やベッド状遺構から5~15cm浮いた状態で、壺、台付甕、高坏、器台、鉢等が出土している。

第6号住居跡(第34図)

H-12グリッドに位置し、第5号住居跡同様に第6号墳周溝に大半が切られている。古墳盛土と覆土が酷似していたために、周溝断面より確認された住居跡である。南コーナーと東壁の一部が確認されたもので、規模や形態は不明である。確認面から床面まで22cm、壁は垂直に立ち上がる。床



第33図 第6号住居跡出土遺物



第34図 第6号住居跡

第6号住居跡出土遺物 (第33図)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
台付甕	1	口径(15.9) 現存高 3.1		口縁部内外面刷毛目の後横ナデ。赤褐色。A~E+細砂粒。焼成普通。	口縁部10% 現存。
台付甕	2	口径(11.8) 現存高 2.5		口縁部上半横ナデ。赤褐色。A~E+細砂粒。焼成良好。	口縁部10% 現存。
台付甕	3	口径(11.3) 現存高 3.1	口縁端部近くで短く外反する。	口縁部刷毛目の後横ナデ。褐色。A~E+細砂粒。焼成良好。	口縁部10% 現存。

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
高坏	4	現存高 3.7		脚部外面寛削りの後ナデ。坏部底面ナデ。赤褐色。A~G+細砂粒。焼成良好。	脚部20%現存。
手摺ね	5	口径 (4.0) 底径 (3.4) 器高 2.5		口縁部・体部外面ナデ、内面木口状工具によるナデ。淡褐色。A~F+細砂粒。焼成良好。	口縁部・体部20%、底部80%現存。
鉢	6	底径 4.0 現存高 1.5		胴部外面下端寛削り。底部内外面ナデ。橙褐色。A~G+細砂粒。焼成良好。	底部100%現存。

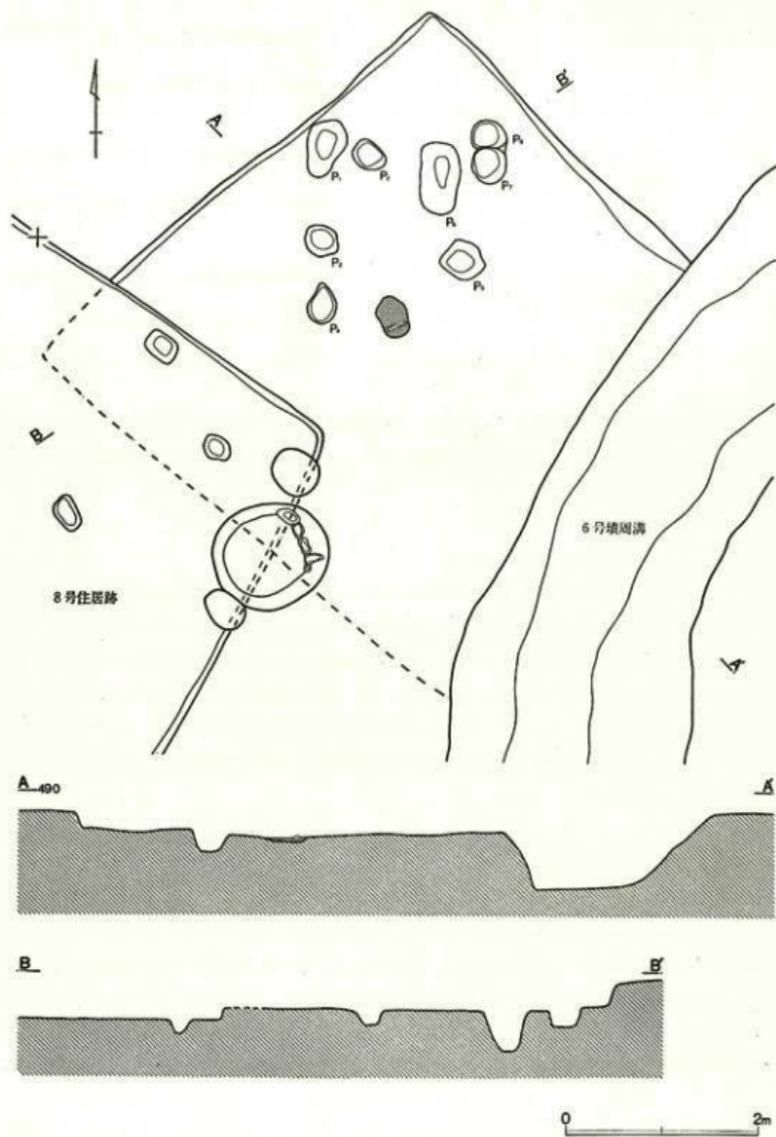
面は堅く踏み固められ水平である。周溝際に1本の柱穴と貯蔵穴と思われる掘り込みが検出されている。遺物はすべて床面より浮いた状態で出土している。また円筒埴輪棺が覆土を掘り込んで設置されている。

第7号住居跡（第35図、図版4）

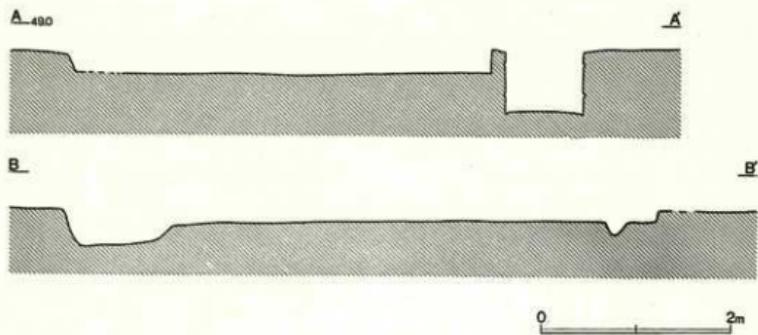
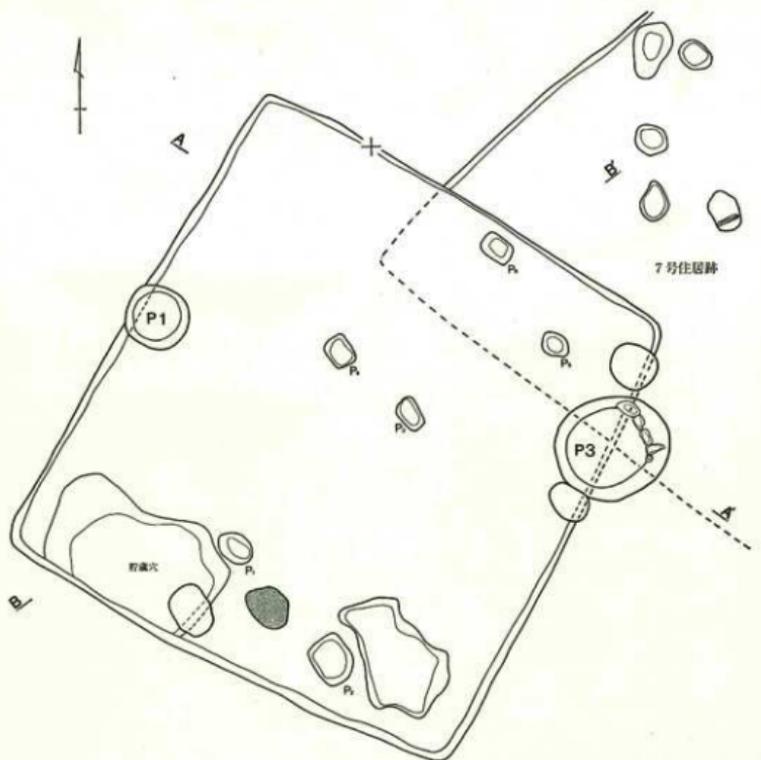
調査区内で最も遺構が集中するH-16・17グリッドに位置している。第6号埴輪周溝及び第8号住居跡に切られ、住居跡の大半が失われている。北・東壁の一部が確認されたに過ぎず、規模や形態は不明である。確認面から床面まで18cm、覆土は炭化物を僅かに含み砂質が強い茶褐色土、弱い粘性をもつ黄褐色土が堆積していた。壁は垂直に立ち上がり、床面は踏み固められ堅緻である。主柱穴と思われるP₁を含め、北コーナー付近に8本の浅い柱穴が検出されている。炉はP₁・P₂間に存在する。長径46cmの不整楕円形を呈する地床炉で中央に扁平な自然礫の枕石が据え置かれている。遺物は出土しなかった。

第8号住居跡（第36図、図版4）

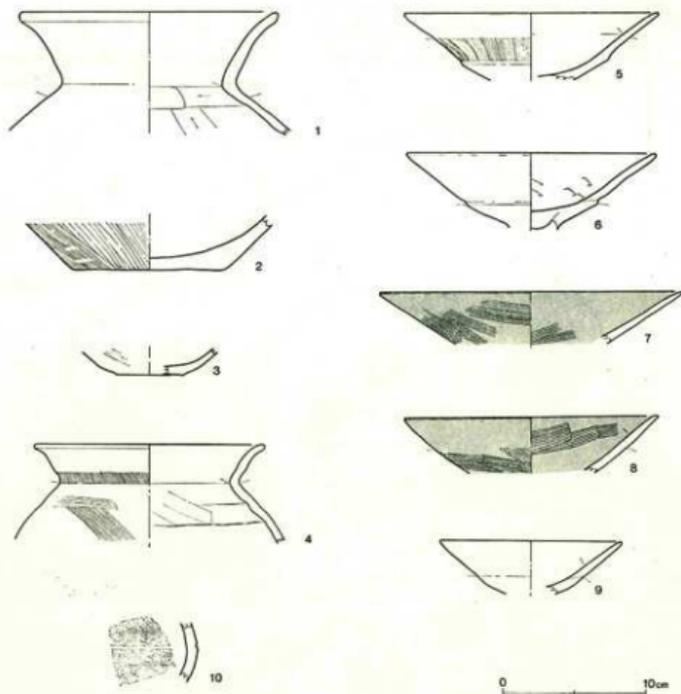
調査区最西端のH-17・22グリッドに位置している。第7号住居跡を切っているが、第8号住居跡や近世の屋敷跡や埋設遺構に切られている。5.69×5.3mの正方形を呈し、N-30°-Eを主軸方向としている。確認面から床面まで18cm、覆土は少量のロームが混入する濃茶褐色土が堆積していた。壁は垂直に立ち上がり、床面は踏み固められ堅緻である。柱穴は主柱穴2本、小柱穴3本が検出され、西コーナーには、深さ20cmの皿状の貯蔵穴が存在する。P₁・P₂間の南壁下に、長径48cmの楕円形を呈する地床炉が存在する。遺物は貯蔵穴内より壺、甕、高坏などが出土している。



第35图 第7号住居跡



第36图 第8号住居跡



第37図 第8号住居跡出土遺物

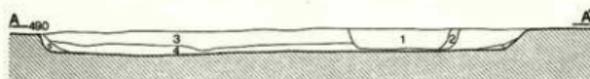
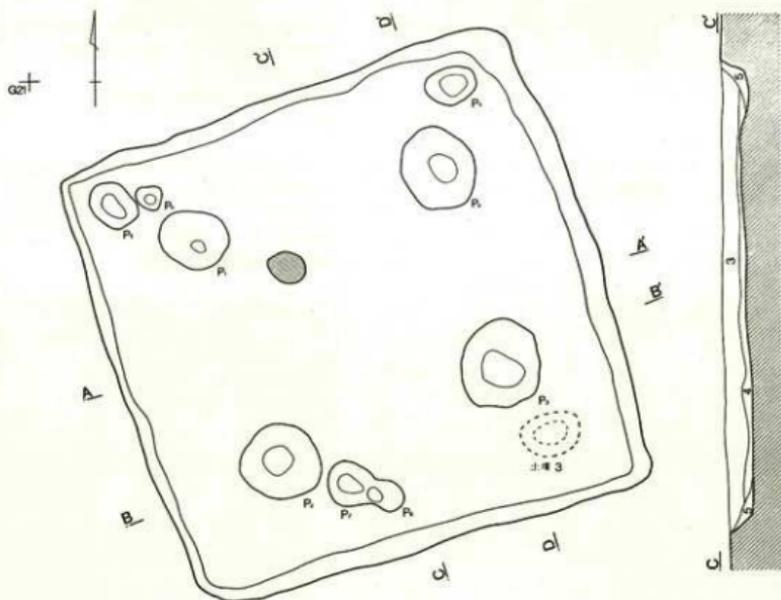
第8号住居跡出土遺物（第37図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	口径(18.0) 現存高 8.9	口縁端部に面をもつが、やや甘い。	口縁部横ナデ。胴部外面ナデ、上端のみ横ナデ、内面寛削り。赤褐色。A~F+細砂粒。焼成良好。	口縁部40%現存。貯蔵穴。
壺	2	底径(10.7) 現存高 3.9	平底を呈す。	胴部外面荒磨き、内面ナデ。底部ナデ。淡褐色。A~G+細砂粒。焼成良好。	底部30%現存。
壺	3	底径 4.6 現存高 1.9		胴部外面刷毛目の後荒磨き。内面ナデ。底部内外の一部荒磨き。黄褐色。A~F+細砂粒。焼成良好。	底部30%現存。

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	4	口径(16.2) 現存高 7.1	口唇部近くで短く外反する。	口唇部刷毛目の後横ナデ。胴部外面刷毛目の後ナデ、内面木口状工具によるナデか。 褐色。A~F+細砂粒。焼成良好。	口縁部20%現存。
高杯	5	口径 17.8 現存高 4.9		杯口縁部外面目の細かい刷毛目の後内外面とも横ナデ。杯底部内外面ナデ。 赤褐色。A~F+細砂粒。焼成良好。杯底部内外面に黒斑。	杯口縁部100%、杯底部90%現存。
高杯	6	口径 17.4 現存高 5.4		杯口縁部外面横ナデ、内面木口状工具によるナデの後横ナデか。杯底部内外面ナデ。 赤褐色。A~G+(細砂粒多量)。焼成良好。口縁部内外面に黒斑。	杯部100%現存。
高杯	7	口径(11.7) 現存高 4.7	杯口縁部が直線的に開く。	杯口縁部内外面とも刷毛目の後横ナデ。 赤褐色(赤彩)。モンモリロナイト+雲母類+角閃石+緑泥石+紫蘇輝石+石英+斜長石。焼成良好。	杯口縁部20%現存。
高杯	8	口径(18.0) 現在高 4.0			
高杯	9	口径(12.6) 現存高 4.8	杯口縁部と杯底部の境目が粘土の接合部である。	杯口縁部内外面横ナデ。杯底部ナデ。 黄褐色。A~F+細砂粒。焼成良好。	杯部30%現存。
須恵器 破片	10		10本1条の櫛歯波状文が廻り、その下には細い沈線が走る。	ロクロ左回転成形。沈線の下は筥削り。 内外面暗灰色。断面セピア色に近い。胎土に砂粒をほとんど含まない。焼成良好。	大形逸あるいは壺の胴中位破片。

第9号住居跡(第38図、図版5)

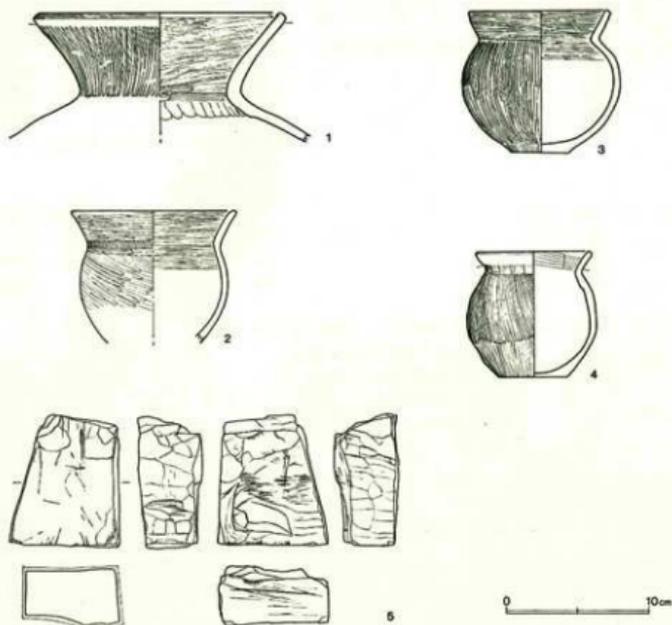
G-16グリッドに位置し、第10号住居跡と近接している。確認面から床面まで22cm、黒褐色土、茶褐色土が堆積していた。5.1×5.0mの正方形を呈し、N-20°-Eを主軸方向としている。壁は緩やかに立ち上がり、床面は凹凸が目立つが堅く踏み固められている。柱穴は対角線上に配置された4本の主柱穴と5本の小柱穴が検出された。P₁に近接して長径42cmの楕円形を呈する地床炉が存在している。P₂の南側には近世の土壌が床面まで掘り込まれている。遺物は壺、小形壺、磁石が炉跡周辺の床面直上より出土している。



1. 茶褐色土
茶褐色粘土・ロームプロ
ック混入
2. 黒色土
3. 黒褐色土
少量の炭化物を含み砂質
が強い
4. 茶褐色土
少量の黒褐色土混入、潤
い粘性をもつ
5. 黄褐色土
多量のソフトローム混入

0 2m

第38図 第9号住居跡



第39図 第9号住居跡出土遺物

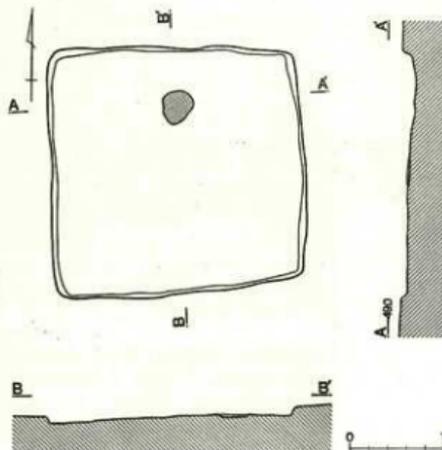
第9号住居跡出土遺物 (第39図、図版38)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	口径 17.0 現存高 9.3	口縁端部に粘土を貼付して小さく立ち上がる。	口縁部刷毛目の後笥磨き。胴部内外面ともナダ、内面上端のみ指頭押え。 茶褐色。モンモリロナイト+緑泥石+普通輝石+紫蘇輝石+石英+斜長石。焼成良好。	口縁部50%現存。 胎土分析試料。
小型壺	2	口径 11.5 胴径 10.5 現存高 9.5		口縁部刷毛目の後笥磨き。胴部外面上半笥磨き、下半不明、内面上位笥磨き、中位・下位不明。 淡褐色。A~G+細砂粒。焼成良好。	口縁部80%、胴部40%現存。

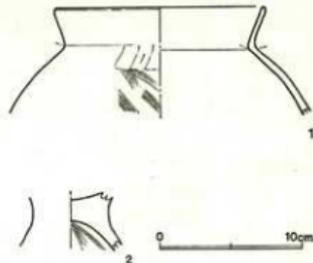
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
小型壺	3	口径 9.7 胴径 11.2 底径 4.1 器高 10.3	口縁端部を平坦に仕上げる。	口縁部刷毛目の後寛磨きか。胴部外面刷毛目の後寛磨き、内面上位は寛磨き、中位・下位は不明。底部刷毛目。 褐色。A~G+細砂粒。焼成良好。	口縁部90%、胴部80%、底部100%現存。
小型壺	4	口径 3.9 胴径 8.7 底径 4.8 器高 8.5		口縁部刷毛目の後横ナデ。胴部外面寛磨き、内面ナデ。底部寛磨き。赤褐色。A~E+細砂粒。焼成良好。	口縁部100%、胴部90%、底部100%現存。
砥石	5	9.4×7.9×4.0 410g	平面形は台形に近く、断面は不整形を呈する礫である。砥ぎ面には5面が使用されている。面としての砥ぎ減りと、溝状の擦痕の二種が認められる。	凝灰質シルト	

第10号住居跡（第40図）

G-21グリッドに位置し、第9号住居跡西側に近接して存在している。保存状態が悪く、確認面から床面まで8cmと非常に浅い。2.69×2.67mの正方形を呈する小形住居跡で、主軸方向をN-2°-Wとしている。覆土は少量の炭化物を含む砂質の強い茶褐色土が堆積していた。壁は緩やかに立ち上がり、床面は軟弱で、緩く南壁側へ傾斜している。柱穴は検出されず、径40cmの不整形円形を呈する地床炉が住居跡中央の北壁寄りに存在している。2点の台付甕が床面直上より出土している。



第40図 第10号住居跡



第41図 第10号住居跡出土遺物

第10号住居跡出土遺物 (第41図)

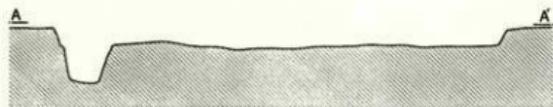
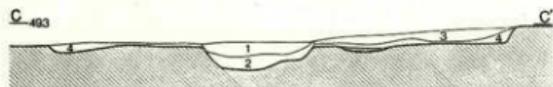
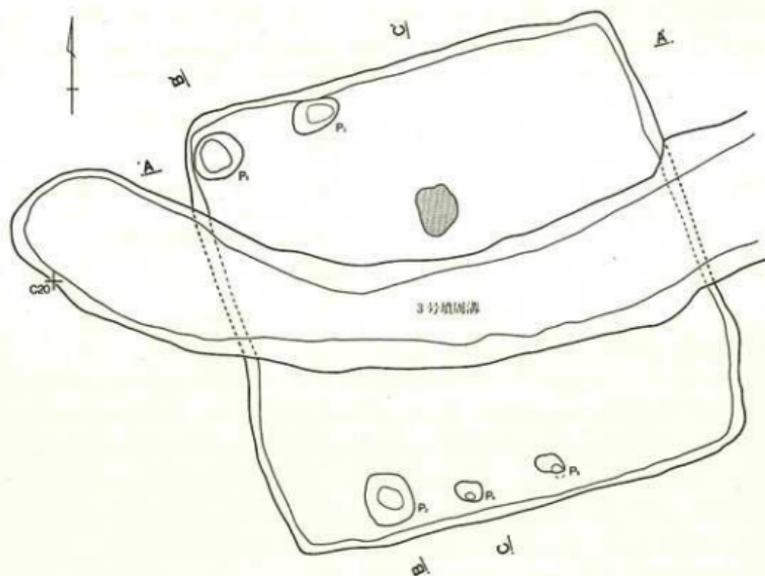
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
台付甕	1	口径 17.8 現存高 7.5	口縁端部近くで小さく内彎する。	口縁部横ナデ。胴部外面上端篋削りの後ナデ、以下は目の細かい刷毛目の後ナデか。 褐色。A~E+細砂粒。焼成普通。	口縁部20% 現存。
台付甕	2	最小径 5.5 現存高 4.2		脚台部外面ナデ、内面ナデ、部分的に篋磨き。 淡褐色。A~E+細砂粒。焼成普通。	脚台部30% 現存。

第11号住居跡 (第42図、図版5)

C-13・14グリッドに位置している。第13号住居跡とコーナーを接するように存在し、中央部を弧状に第3号墳周溝によって切られている。N-19°-Wを主軸方向とし、5.0×4.9mの正方形を呈するものである。表土が薄く、また深耕されたために、確認面から床面まで12cmと浅い。覆土は炭化物・焼土を少量含む黒褐色土、黄褐色土が堆積していた。壁は緩やかに立ち上がり、床面は堅く踏み固められているが、凹凸が激しくあばた状である。柱穴は径55cmの円形、深さ40cm前後の主柱穴2本と小柱穴2本が北・南壁下に並行して検出されている。炉跡は中央部に存在し、60×50cmの不整形円形を呈する地床炉である。遺物は壺、台付甕、手捏ねがP₁・P₂付近の床面直上より出土している。

第11号住居跡出土遺物 (第43図、図版40)

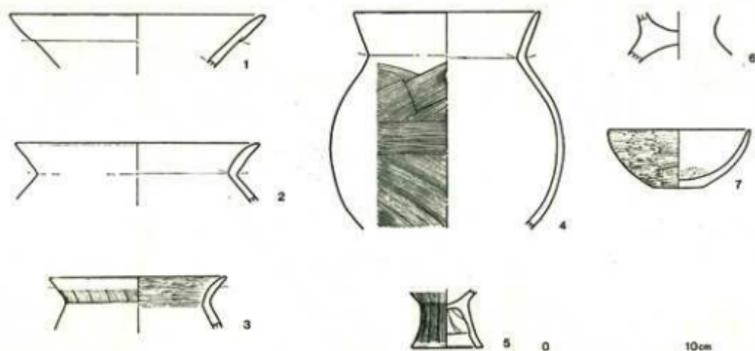
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	口径(18.0) 現存高 4.0	複合口縁を呈す。	口縁部横ナデ。頸部外面木口状工具によるナデ。 茶褐色。A~E+細砂粒。焼成良好。	口縁部20% 現存。
台付甕	2	口径 17.4 現存高 4.3	頸部の屈曲は強い。	口縁部横ナデ。胴部上位内外面ナデ。 淡褐色。A~F+細砂粒。焼成良好。	口縁部30% 現存。
台付甕	3	口径 12.4 現存高 3.7		口縁部外面刷毛目の後上半のみ横ナデ、内面篋磨き。胴部上位内外面ナデ。 赤褐色。A~F+細砂粒。焼成普通。	口縁部10% 現存。



1. 淡茶褐色土
少量のロームブロック混入
2. 茶褐色土
多量のロームブロック混入
3. 黒褐色土
少量の炭化物・焼土を含む
4. 茶褐色土
少量の炭化物・焼土を含む



第42図 第11号住居跡



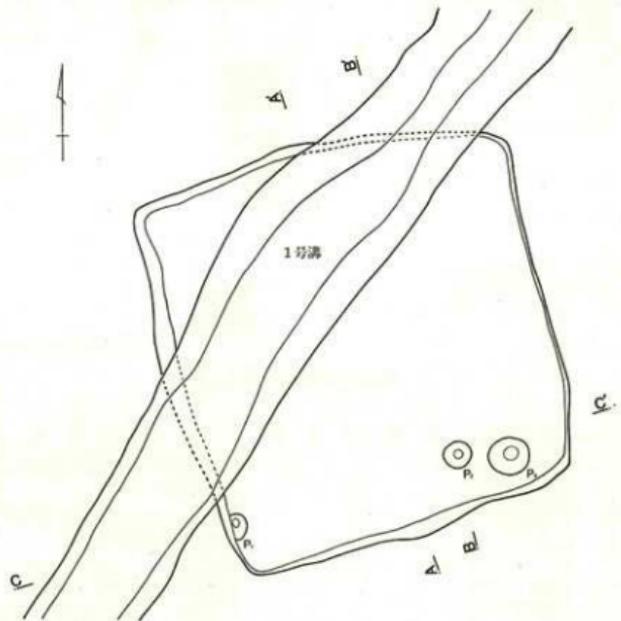
第43図 第11号住居跡出土遺物

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
台付甕	4	口径(13.2) 胴径(16.8) 現存高15.6		口縁部横ナデ。胴部外面刷毛目、内面ナデ。褐色。A~F+細砂粒。焼成普通。胴部外面に炭附着。	口縁部・胴部10%現存。西南Pit。
手捏ね	5	底径 5.1 現存高 4.1		脚台部外面目の細かい刷毛目、内面上・中位指ナデ、下位ナデ。黄褐色。A~F+細砂粒。焼成良好。	脚台部90%現存。溝内。
台付甕	6	最小径 5.3 現存高 3.6		内面底部ナデ。脚台部内面ナデ。淡褐色。A~F+細砂粒。焼成不良。	脚台部50%現存。西北Pit。
鉢	7	口径 10.0 底径 3.6 器高 4.2		口縁・体部外面荒磨き。内面底部荒磨き、他は横ナデ。底部ナデ。赤褐色。A~F+細砂粒。焼成良好。	口縁部60%、体部80%、底部100%現存。

第12号住居跡(第44図、図版6)

G-8グリッドに位置し、調査区内で検出された住居跡群の最東端に存在している。北壁から西壁にかけて1/2程度対角線状に近世の溝に床面下まで切られている。4.4×4.12mの正方形を呈し、N-17°-Wを主軸方向としている。覆土は少量の炭化物を含む黒色土、ローム混入の濃茶褐色土が堆積していた。壁は緩やかに立ち上がり、床面は堅く踏み固められているが、かなり凹凸が目立つ。柱穴は南壁下に並行して3本検出されているが、いずれも浅い。床面を精査したが、伊跡は検出し得なかった。遺物は東壁寄りの床面直上より小型壺、台付甕、高杯が出土している。

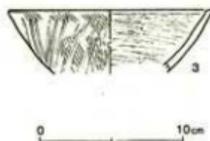
gg+



1. 黒色土
少量の砂粒を含む
2. 灰色粘土
赤褐色鉄分を含む
3. 茶褐色土
灰色粘土ブロック混入
4. 黒色土
少量の炭化物を含む
5. 濃茶褐色土
少量の黒色土・ローム混入
6. 黄褐色土
多量のローム混入



第44図 第12号住居跡



第45図 第12号住居跡出土遺物

第12号住居跡出土遺物 (第45図、図版40)

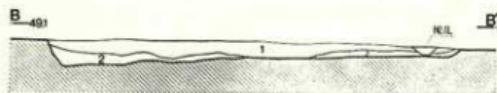
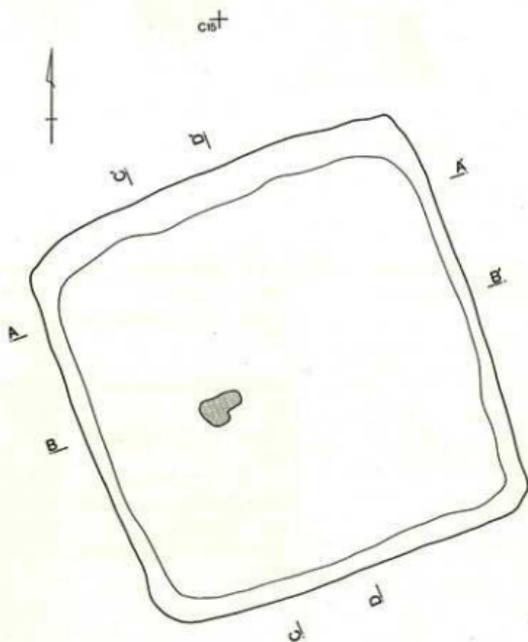
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
小型壺	1	口径 (5.9) 胴径 8.3 底径 4.8 器高 8.8	底部中央が僅かに窪む。口縁部は平坦に仕上げる。	口縁部・胴部外面刷毛目。胴部内面ナデ。底部ナデ。黄褐色。A~F+細砂粒。焼成良好。	口縁部30%、胴部70%、底部100%現存。
台付甕	2	底径 (9.6) 現存高 5.6		脚台部外面刷毛目の後ナデ、内面ナデ。淡褐色。A~F+細砂粒。焼成普通。	脚台部40%現存。
高杯	3	口径(14.5) 現存高 4.4		杯口縁部外面粗い刷毛目の後笥磨き、内面笥磨き。赤褐色。A~F+細砂粒。焼成良好。	口縁部20%現存。

第13号住居跡 (第46図)

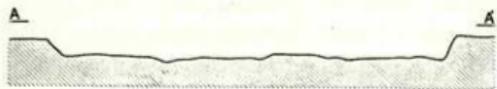
C-10・15グリッドにかけて位置している。第3号墳南側、第11号住居跡の東1mに軒を接する状態で隣接している。桑畑に利用されていたために床面まで桑根が食い込み、保存状態の悪い住居跡である。確認面から床面まで、最も深い西壁で26cm。覆土は炭化物を少量含み砂質が強い茶褐色土、ローム混入の黄褐色土が堆積していた。4.58×4.41mの正方形を呈し、N-79°-Wを主軸方向としている。壁は非常に緩やかに立ち上がる。床面は軟弱で凹凸が激しく、なだらかに西壁側へ傾斜している。長径46cmの不整楕円形を呈する地床炉が中央部西壁寄りに存在している。柱穴は検出し得なかった。壺、台付甕が南壁下の床面よりやや浮き、焼けた粘土削り屑塊が炉跡内より出土している。

第13号住居跡出土遺物 (第47図)

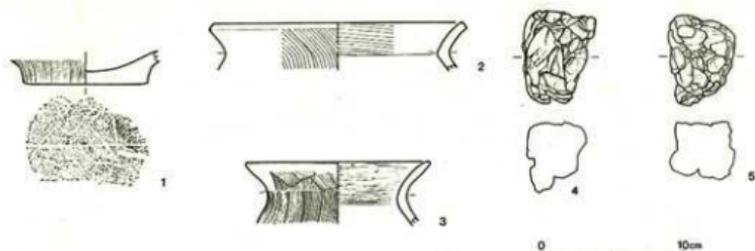
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	底径 8.8 現存高 2.4		外面刷毛目、内面ナデ。橙褐色。A~F+細砂粒。焼成良好。	底部70%現存。底部に木葉痕あり。



1. 茶褐色土
炭化物を多量に含み砂質が強い
2. 黄褐色土
茶褐色土とロームの混土層



第46図 第13号住居跡

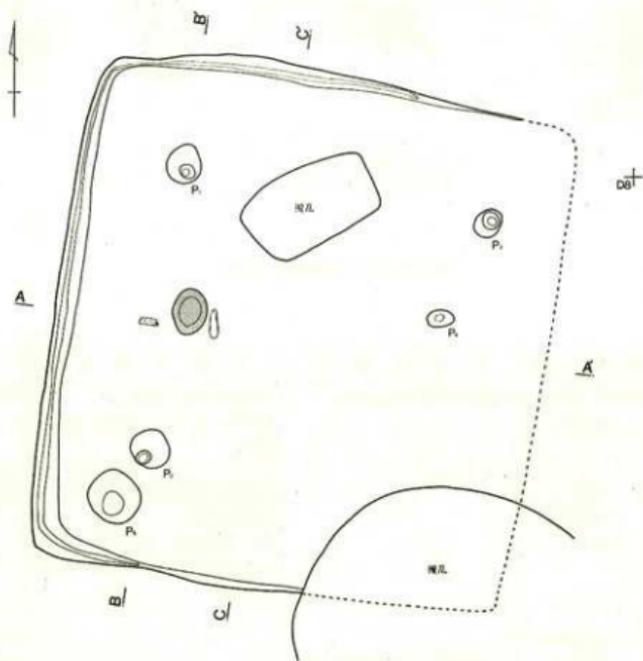


第47図 第13号住居跡出土遺物

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
台付甕	2	口径 17.6 現存高 3.4	口縁端を平坦に仕上げる。	口縁部刷毛目の後横ナデ。 橙褐色。A～F+細砂粒。焼成良好。	口縁部10% 現存。
台付甕	3	口径 13.2 現存高 4.6		口縁部外面刷毛目の後横ナデ。 内面磨き。 褐色(赤褐色)。モンモリロナイト+角閃石+石英+斜長石。 焼成良好。	胎土分析試料。
粘土削り屑塊	4	6.7×5.0× 5.0 135g	土器成形および調整時に削り落とした粘土屑を寄せ集め、塊りにして焼成したもの。ところどころ、棒状工具による圧痕が認められる。	茶褐色を呈し、石英、斜長石、モンモリロナイトを含む。	胎土分析試料。
粘土削り屑塊	5	6.5×4.7× 4.2 110g			

第16号住居跡 (第48図、図版9)

D-8 グリッドに位置し、第1号墳々丘下より検出されている。東壁から南壁中央にかけて、墳丘築造時に削平され失なわれている。規模・形態は、西壁、柱穴の位置や床面状態から想定して、保存状態良好な西壁と同規模な5.66m前後の方形を呈するものと思われる。堆積していた覆土にはいずれも炭化物や焼土を含み、また床面上には炭化物層も認められ、火災を受けているものと思われる。壁は垂直に立ち上がり、北壁から南壁にかけて、幅12cm、深さ3cmの浅い壁溝が巡る。柱穴は柱痕の残る3本の主柱穴が、対角線上に配置され検出されている。P₁・P₂間に長径50cmの楕円形を呈する堅く焼けた地床炉が存在する。P₂脇には浅い貯蔵穴が存在する。遺物は伊跡内より小型壺、炉跡付近の床面上より鉢、台付甕が出土している。



1. 黒色土
少量の焼土・炭化物
を含み、軟らかい
2. 黒褐色土
多量の焼土・炭化物
を含み、軟らかい
3. 酒茶褐色土
少量の焼土・炭化物を
含む
4. 炭化物
(柱穴埋土)
5. 酒褐色土(柱穴埋土)
多量のロームブロック
を含み硬くしまっている

0 2m

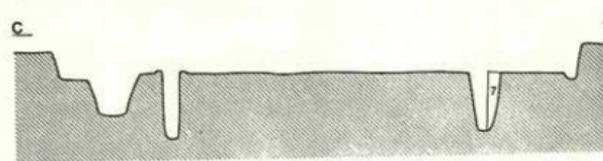
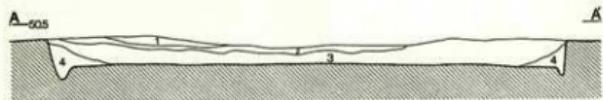
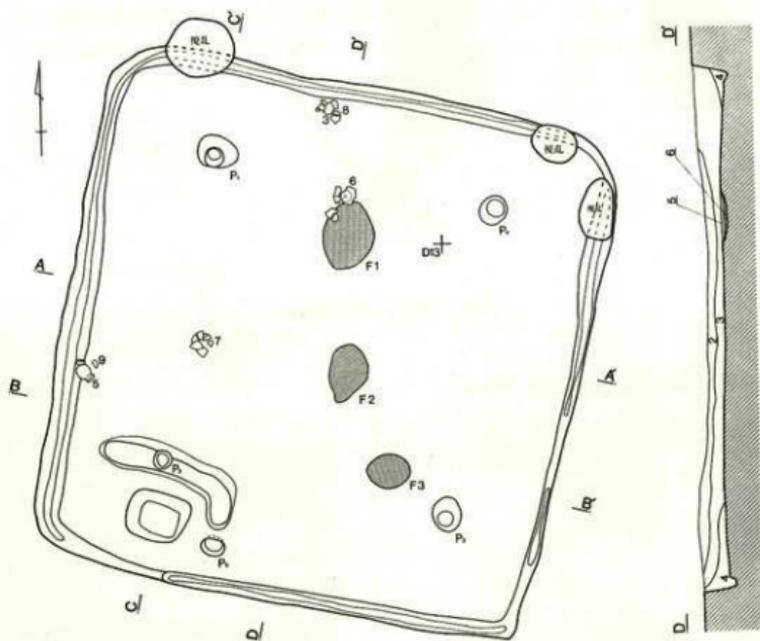
第48図 第16号住居跡



第49図 第16号住居跡出土遺物

第16号住居跡出土遺物 (第49図、図版41)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
小型壺	1	口径 10.0 胴径 14.1 底径 3.8 器高 19.8	平底を意識している。	口縁部外面、胴部外面上半は目の細かい丁寧な荒磨き。胴部内面ナゲ、下位に一部刷毛目を残す。 橙褐色。A~F+細砂粒。焼成良好。	口縁部・胴部90%、底部100%現存。
台付甕	2	口径 12.8 胴径 14.3 底径 7.4 器高 18.5		口縁部刷毛目の後上半横ナゲ、内面刷毛目の後横ナゲ。胴部外面刷毛目、内面ナゲ。胴台部外面刷毛目、内面上半ナゲ、下半刷毛目。 赤褐色。A~E+細砂粒。焼成良好。	口縁部50%、胴部80%、底部100%現存。
埴	3	口径 8.4 底径 4.2 器高 4.9	口縁部と体部の境目を刷毛状工具で整形している。	口縁部外面刷毛目の後横ナゲ、内面横ナゲ。体部外面荒削りの後ナゲか。内面ナゲで木口状工具によるナゲ。底部不明。 橙褐色。A~E+細砂粒。焼成良好。作り極めて雑。	口縁部80%、体部90%、底部100%現存。
鉢	4	口径 14.6 底径 4.4 器高 5.4	複合口縁を呈す。	口縁部内外面刷毛目の後上半を弱い横ナゲ。体部外面刷毛目の後下半をナゲ、内面ナゲ。底部刷毛目。 橙褐色。モンモリロナイト+石英+斜長石。焼成良好。	口縁部・体部90%、底部100%現存。 胎土分析試料。



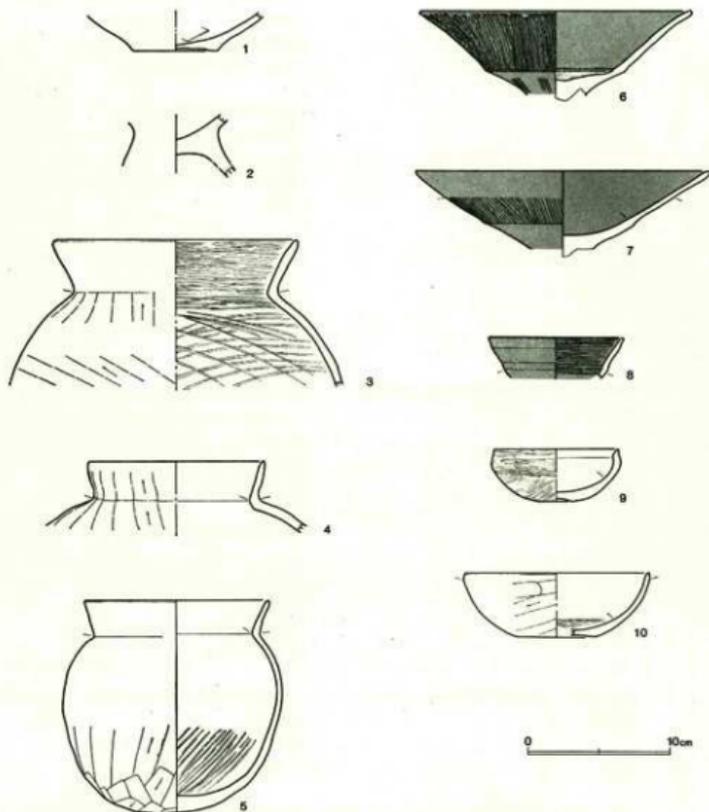
1. 褐色土
少量のローム混入
2. 黒色土
少量の炭化物含む
砂質が強い
3. 黒褐色土
少量の炭化物を含む
4. 黒色土
少量の炭化物・焼土
を含む
5. 黒色土
少量の焼土を含む
6. 焼土
硬く焼けしまっている
7. 暗褐色土(柱穴埋土)
多量のロームブロック
混入、硬くしまっ
ている

0 2m

第50図 第17号住居跡

第17号住居跡（第50図、図版10）

台地肩部のD-8・13グリッドに位置している。第16号住居跡に近接し、第1号墳々丘内に存在している。北壁が2ヶ所攪乱されているが、床面まで22cmを測る保存状態の良好な住居跡である。覆土は黒色土、黒褐色土が堆積していた。5.75×5.63mの方形を呈し、主軸方向はN-12°-Eである。床面は水平で、堅く踏み固められている。深さ75cm前後の主柱穴4本が、対角線上に検出され、P₁には柱痕が残る。地床炉が3基存在しているが、P₁・P₄間の炉跡が最も焼土の堆積が厚い。西コーナーには、64×48cm、深さ40cmの方形を呈する貯藏穴と幅34cm、高さ4cmの貯藏穴をL字形に囲む突堤が設けられている。遺物は伊跡内より高坏と甕、北壁下床面より甕、西壁下壁溝より甕と杯が出土している。



第51図 第17号住居跡出土遺物

第17号住居跡出土遺物 (第51図、図版40)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	底径 6.0 現存高 2.8	底部を篋削りにより上げ底状にしている。	胴部外面ナデ、内面木口状工具によるナデ。 橙褐色。A~E+細砂粒。焼成良好。	底部70%現存。
台付甕	2	最小径 6.0 現存高 4.5		脚台部内外面ナデ。 赤褐色。A~F+細砂粒。焼成良好。	脚台部50%現存。 3区。
甕	3	口径 7.2 現存高10.5		口縁部内外面横ナデの後内面のみ篋磨き。胴部外面篋削りの後上位のみナデ、内面篋磨き。 赤褐色。A~F+細砂粒。焼成普通。外面全体に煤付着。	口縁部90%現存。
甕	4	口径(12.4) 現存高 5.1		口縁部外面篋削りの後横ナデ、内面横ナデ。胴部外面篋削りの後ナデ、内面ナデ。 茶褐色。A~E+細砂粒。焼成普通。	口縁部10%現存。
甕	5	口径 12.9 胴径 15.5 器高 15.4	丸底を呈す。	口縁部横ナデ。胴部外面篋削りの後上半ナデ、内面上半ナデ、下半篋磨き。底部篋削り。 赤褐色。A~E+細砂粒。焼成普通。作り雑。	口縁部・胴部90%、底部100%現存。
高 杯	6	口径 19.2 現存高 6.5	口縁端部を平坦に仕上げる。	杯口縁部外面目の細かい篋磨き、内面ナデ。杯底部外面刷毛目の後ナデ、内面篋磨き。 赤褐色(赤彩)。A~E+細砂粒。焼成良好。	杯口縁部30%、杯底部70%現存。
高 杯	7	口径 20.9 現存高 6.1		杯口縁部外面刷毛目の後上半を横ナデ、内面横ナデ。杯底部外面刷毛目の後ナデ、内面粗い刷毛目の後ナデ。 赤褐色(赤彩)。A~D+細砂粒。焼成良好。	杯部100%現存。
甕	8	口径 (9.4) 現存高2.9	口縁部に弱い段を二つもつ。	口縁部内外面横ナデの後内面のみ篋磨き。 赤褐色(赤彩)。A~F+細砂粒。焼成良好。	口縁部20%現存。
杯	9	口径 8.8 底径 2.2	口縁部で短く立ち上がり、内面に稜をもつ。上げ底を呈す。	口縁部外面篋磨き、内面横ナデ。体部外面篋磨き、内面上半	口縁部・体部・底部30

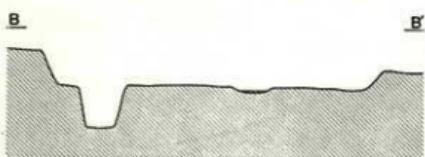
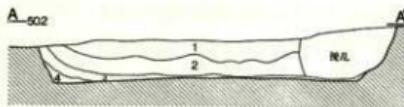
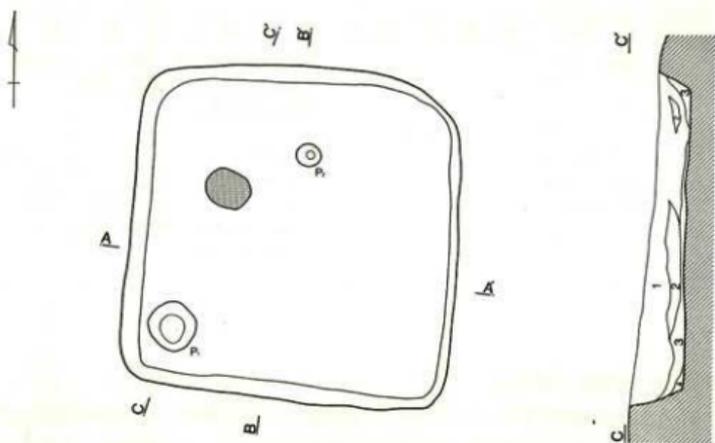
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	10	器高 3.7		横ナデ、下半ナデ。底部ナデ。茶褐色。A~E+細砂粒。焼成普通。作り雑。	%現存。
		口径(13.0) 底径(5.5) 現存高 4.6		口縁部内外面上端のみ横ナデ。体部外面笕削りの後ナデ、内面横ナデ、下位のみ後に笕磨き。赤褐色。A~F+細砂粒。焼成良好。作り雑。	口縁部・体部・底部20%現存。

第18号住居跡 (第52図、図版11)

調査区の最北端に相当するD-7・12グリッドに位置している。第16・17号住居跡同様に、第1号墳々丘下から検出され、台地肩部から斜面にかけて掘り込まれている。確認面から床面まで32~46cmと比較的深いが、傾斜に沿って北壁側が浅くなっている。覆土は茶褐色土、褐色土が主体に堆積していた。3.6×3.46m、N-2°-Eを主軸方向とする方形の小形住居跡である。壁は緩やかに立ち上がり、床面は踏み固められ堅い。径26cmの円形を呈する柱穴が1本検出されているが、深さ12cmと浅い。炉跡は48×38cmの隅丸方形を呈する皿状の地床炉であり、焼土の堆積は2cmと薄い。南コーナーには、52×48cm、深さ44cmの隅丸方形の貯蔵穴が設置されている。炉跡北側の床面直上から小型壺、高杯が出土している。

第18号住居跡出土遺物 (第53図)

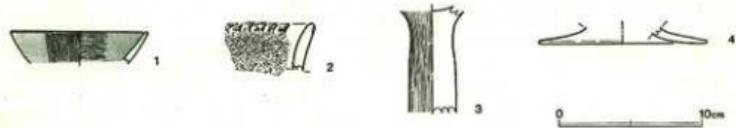
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
小型壺	1	口径(9.6) 現存高 2.3	口縁端部に→方向の刻目をもつ。	口縁部内外面笕磨き。赤褐色(赤彩)。A~E+細砂粒。胎土緻密。焼成良好。	口縁部10%現存。
台付甕	2	現存高 3.4		口縁部内外面刷毛目の後横ナデ。黄褐色。A~E+細砂粒。焼成良好。	口縁部10%現存。
高杯	3	現存高 7.9		柱状部外面笕磨き。赤褐色。A~E+細砂粒。焼成良好。	柱状部100%現存。
高杯	4	底径(12.0)		裾部内外面横ナデ。赤褐色。A~E+細砂粒。焼成良好。	裾部20%現存。



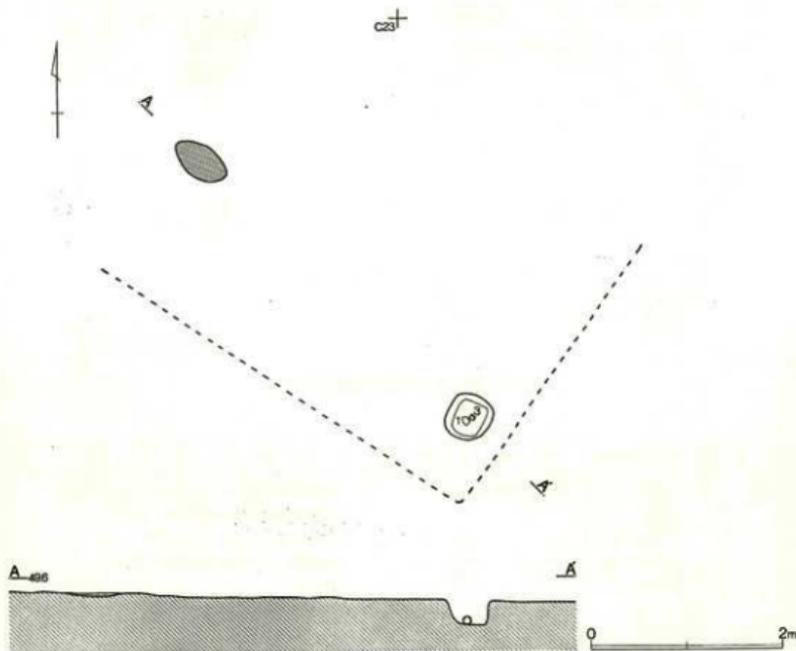
1. 茶褐色土
少量のローム混入、砂質が強い
2. 褐色土
ロームブロック少量混入
3. 黒褐色土
少量の炭化物・焼土を含み硬くしまっている
4. 褐色土
多量のローム混入



第52図 第18号住居跡



第53図 第18号住居跡出土遺物



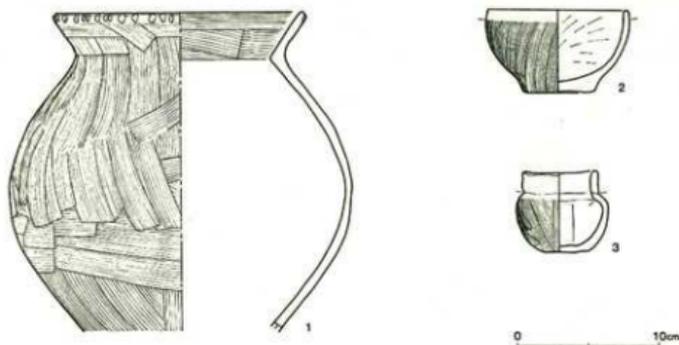
第54図 第19号住居跡

第19号住居跡（第54図）

台地平坦部のC-18・23グリッドにかけて位置している。第9号墳と第3号墳の中間に挟まれて存在している。土採りや耕作のため攪乱が激しく、住居跡の大半が失なわれ、遺構確認時に床面と炉跡が露出している状態であった。炉跡と貯蔵穴間に残る僅かな床面は、凹凸が激しくあばた状であるが、堅くしまっている。炉跡は、長径60cmを測る楕円形の地床炉で、ロームが厚さ2cmで焼土化していた。貯蔵穴は、50×46cmの隅丸方形を呈するもので、深さ26cm、底部より杯と手捏ねが出土している。

第19号住居跡出土遺物（第55図、図版40）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
台付甕	1	口径(17.4) 胴径(24.6) 現存高23.0	口縁端部に粘土を貼付した後→ 方向に刻目を入れているが、間 隔は均等でなく粗い。	口縁部内外面刷毛目。胴部外面 刷毛目、内面ナデ。 灰褐色。A～E+細砂粒。焼成 良好。	口縁部20%、 胴部30%現 存。 貯蔵穴。

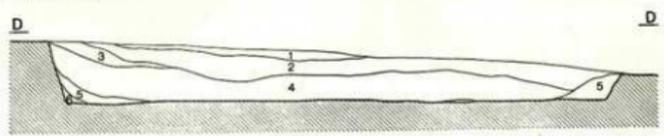
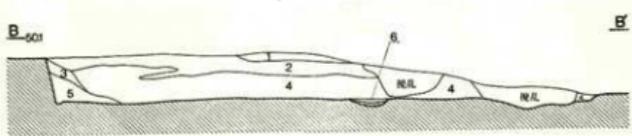
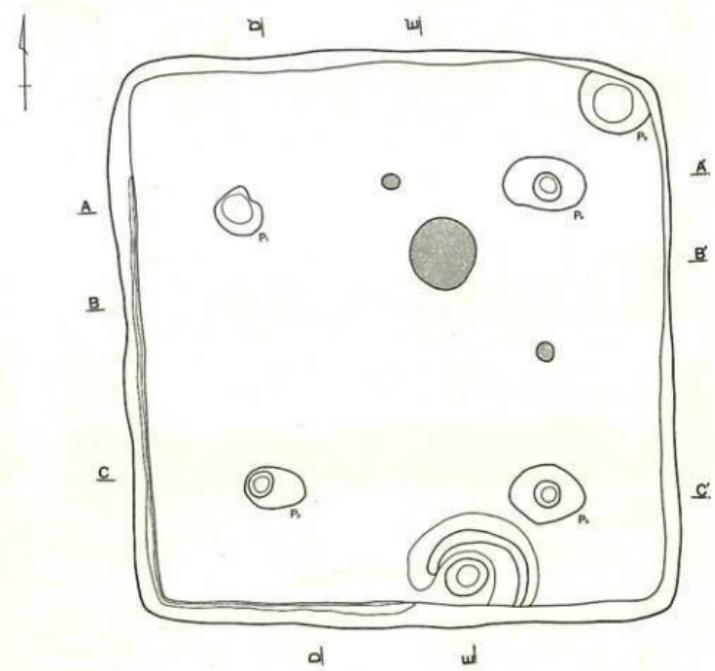


第55図 第19号住居跡出土遺物

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯	2	口径 9.7 底径 5.1 現存高 6.0	弱い上げ底か。	口縁部外面上端のみ横ナデ。体部外面目の細かい刷毛目。内面擦痕を残すナデ。底部ナデ。茶褐色。A~E+細砂粒。焼成良好。	完存。
手捏ね	3	口径 5.3 胴径 6.6 底径 3.2 器高 5.8	口縁部と胴部の境目は、粘土接合痕をそのまま残す。	口縁部内外面弱い横ナデ。胴部外面刷毛目、内面寛ナデ。底部ナデ。灰褐色。A~E+細砂粒。焼成普通。	口縁部90%、胴部・底部100%現存。

第20号住居跡（第56・57図、図版11）

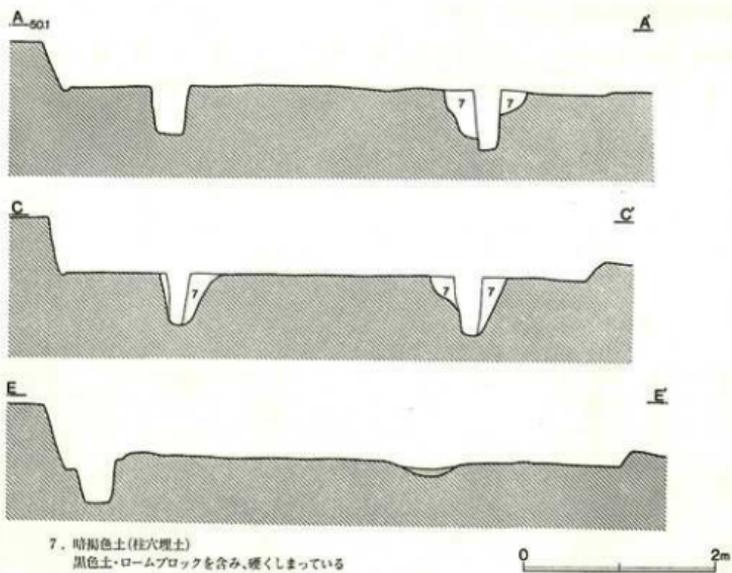
沖積面を臨む台地先端部に築造された第1号墳々丘下には、第16・17・18・20号住居跡が存在している。第20号住居跡が最大のもので、第16号住居跡の北側2mに近接し、D-7グリッドに位置している。6.26×5.87m、正方形の大形住居跡であり、N-2°-Wを主軸方向としている。壁高は6~48cmと傾斜に沿って、東壁側へ低くなっている。覆土は暗褐色土、黄褐色土が堆積していた。壁は垂直に立ち上がり、西・南壁下には、幅8cm、深さ3cmの壁溝が掘り込まれている。床面は水平で、堅く踏み固められている。対角線上に4本の支柱穴と東コーナーに小柱穴が検出され、支柱穴P₁~P₄には、径28cm、深さ64cmの柱痕が残る。炉跡はP₄面側に存在し、径78cmの整円形を呈する皿状の地床炉である。南壁下には、幅40cm、高さ5cmの半円形突堤に囲まれた円形の貯蔵穴が設置されている。遺物は覆土中や床面直上より、埴、器台、高杯などが出土している。



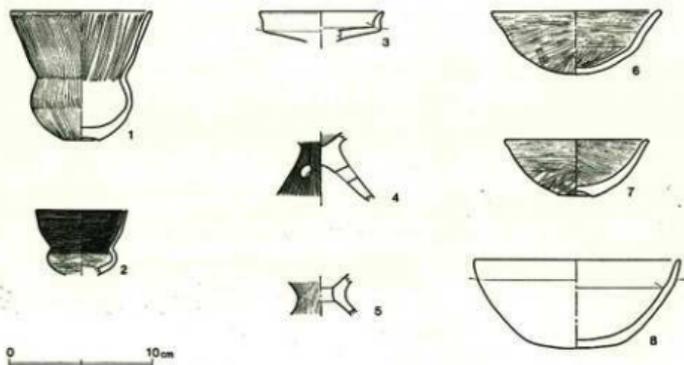
- | | |
|----------------------|------------------------|
| 1. 黒色土
多量の炭化物を含む | 4. 黄褐色土
少量の黒色土混入 |
| 2. 暗褐色土
少量の炭化物を含む | 5. 黒褐色土
多量の炭化物を含む |
| 3. 茶褐色土
微量のロームを含む | 6. 黒色土
少量の炭化物・焼土を含む |



第56図 第20号住居跡(1)



第57図 第20号住居跡(2)



第58図 第20号住居跡出土遺物

第20号住居跡出土遺物 (第58図, 図版41)

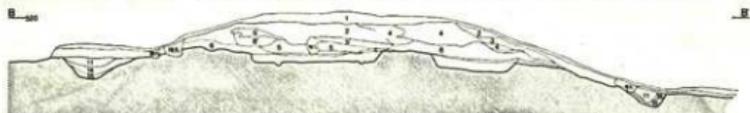
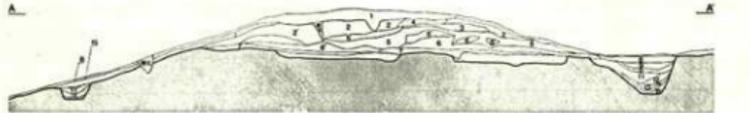
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
埴	1	口径 9.8 胴径 7.2 底径 2.6 器高 9.1	上げ底を呈す。	口縁部内外面磨き、内面は間隔が疎ら。体部外面磨き、内面ナデ。底部ナデ。橙褐色。A~F+細砂粒。胎土緻密。焼成良好。作り丁寧。	口縁部50%、体部80%、底部100%現存。13区。
埴	2	口径 (6.3) 胴径 (4.9) 現存高 4.5	口縁部内彎しながら開く。	口縁部内外面・体部内外面とも磨き。赤褐色(赤彩)。A~F+細砂粒。胎土緻密。焼成良好。作り丁寧。	口縁部30%、体部20%現存。
器台	3	受部径(6.7) 現存高 2.1		受部口縁内外面横ナデ。茶褐色。A~D+細砂粒。焼成良好。	受部40%現存。
高杯	4	現存高 4.8	脚部に3孔を有す。	脚部外面磨き、内面ナデ。赤褐色(淡褐色)赤彩。A~D+細砂粒。焼成良好。	脚部40%現存。
器台	5	現存高 2.9		脚部外面磨き、内面ナデ。赤褐色。A~D+細砂粒。焼成良好。	受部・脚部20%現存。2区。
杯	6	口径 11.8 現存高 4.4	丸底を呈す。	体部外面刷毛目の後磨き、内面磨き。底部ナデ。黄褐色。モンモリロナイト+石英+斜長石。焼成良好。	口縁部60%、体部70%現存。胎土分析試料。
杯	7	口径 10.0 底径 2.4 器高 4.0	上げ底を呈す。	体部外面刷毛目の後磨き、内面磨き。底部ナデ。黄褐色。A~G+細砂粒。焼成良好。	完形。
杯	8	口径(14.5) 底径 6.9 器高 6.2		口縁部内外面横ナデ。体部内外面、底部ナデ。橙褐色。A~E+細砂粒。焼成良好。	口縁部20%、体部60%、底部70%現存。3区。

(今井 宏・立石盛詞)

b 古墳



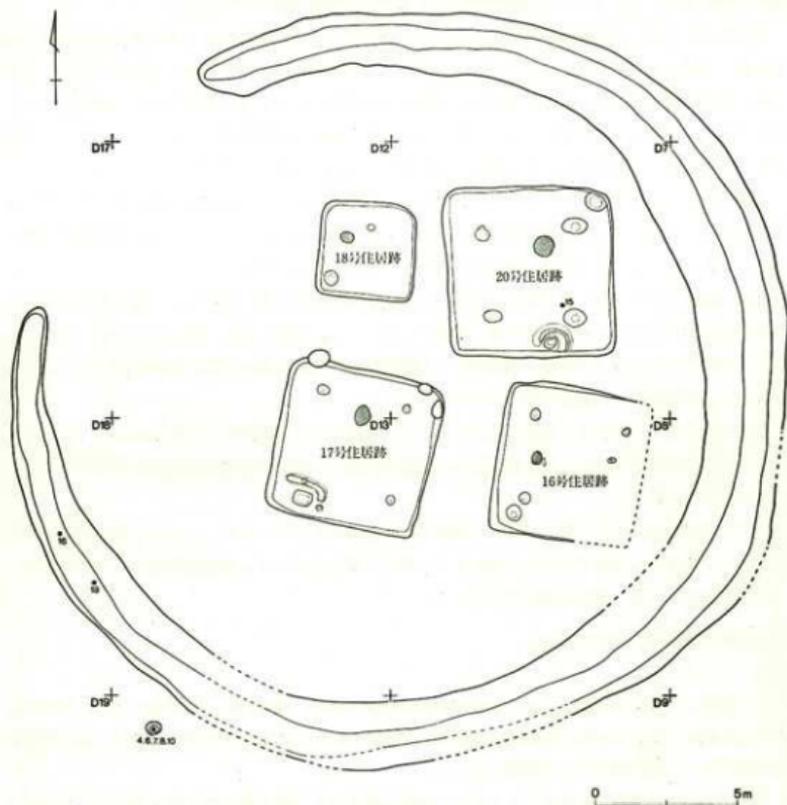
- | | |
|-------------|-------------|
| 1. 茶褐色土 | 5. 茶褐色土 |
| 2. 茶褐色土 | 5'. 茶褐色土 |
| 砂質が強い | ロームブロック混入 |
| 2'. 茶褐色土 | 6. 濃茶褐色土 |
| 3. 茶褐色土 | ローム・黒色土ブ |
| 粘性が強い | ロック混入 |
| 4. 濃茶褐色粘質土 | 6'. 濃茶褐色土 |
| 4'. 濃茶褐色粘質土 | 7. 黒色土(田表土) |
| ロームブロック混入 | 弱い粘性をもつ |



- | | | | |
|------------|---------|-----------|-----------|
| 8. 黒色土ブロック | 11. 黒色土 | 13. 黒褐色土 | 15. 黄褐色土 |
| 9. 黒褐色土 | 砂質が強い | 弱い粘性をもつ | 少量の黒褐色土混入 |
| 10. 茶褐色土 | 12. 黒色土 | 14. 濃茶褐色土 | |

0 5m

第59図 第1号墳現況図



第60図 第1号墳全体図

第1号墳 (第59・60図、図版12・13)

市の川沖積地を眼下に臨む、調査区北端の台地肩部から緩斜面にかけて築造された、調査区内で最大の古墳である。D-7・8・12・13グリッドを中心に位置している。

墳丘南麓は、民家の土台になって大部分が削平され、さらに径1m、奥行3mの芋穴が掘り込まれていた。また、南西麓には、根切溝が存在するが、比較的保存状態は良く、原形を残す古墳である。墳頂には、広い平坦面が残り、人頭大の河原石が10数個散乱していた。東側裾から北側の沖積地にかけて、墳丘裾を廻り周濶土を利用した通路が存在していた。

墳丘のコンターは、標高51.8～52.0mの等高線が平坦な墳頂部を描き出し、48.0～51.6mの等高